

平成28年度
文部科学省委託「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

幼児期における国際理解の基盤を培う
教育の在り方に関する調査研究
—外国籍等の幼児が在園する幼稚園の教育上の課題と成果から—

平成29年3月

公益社団法人 全国幼児教育研究協会

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として、＜公益社団法人 全国幼児教育研究協会＞が実施した平成 28 年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

目 次

I	研究の目的	1
II	研究の内容及び方法等	2
	1 研究主題	2
	2 研究の方法	3
	(1) 調査研究Ⅰ 質問紙調査	
	(2) 調査研究Ⅱ 面接調査及び事例研究	
	3 研究の経過	3
III	調査研究Ⅰ 質問紙調査による研究	5
	1 方法及び調査内容	5
	(1) 調査対象	
	(2) 調査期間	
	(3) 調査内容	
	2 結果	6
	(1) 幼稚園等対象質問紙調査	6
	(2) 行政対象質問紙調査	32
	3 考察	36
IV	調査研究Ⅱ 研究協力園の事例による調査研究	41
	1 方法及び調査内容	41
	(1) 調査対象	
	(2) 調査期間	
	(3) 調査内容	
	2 結果	42
	(1) 外国人集住地域のA園	42
	(2) 多様な文化に関わる際の配慮を工夫したB園	46
	(3) 多くの外国人幼児が在籍し、保護者同士の支援の力が働くC園	50
	(4) 通訳による支援が有効であったD園	54
	(5) 通訳による支援が有効であったE園	58
	(6) 学級指導上の工夫が見られるF園	62
	(7) 外国人幼児を自然体で受け入れる学級集団が育つG園	66
	(8) 学級指導上の工夫が見られるH園	70
	(9) 学級指導上の工夫が見られるI園	74
	(10) 就学に向けての取組の例	77
	3 考察	79
V	研究の成果と課題	84
	1 研究の成果	84
	2 今後の課題	85
	おわりに	87
	資料	
	質問紙調査用紙	88
	参考資料	94
	付記	95

幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方に関する調査研究 －外国籍等の幼児が在園する幼稚園の教育上の課題と成果から－

I 研究の目的

国際化の進展の中で、近年は、幼稚園に入園を希望する外国籍等の幼児（以下、「外国人幼児」という）の数が増加している。外国人幼児が在籍する幼稚園においては、幼児一人一人の国籍や言語、文化や生活習慣等に応じた指導の充実を図り、在園する全ての幼児が幼稚園教育要領に則った幼児期にふさわしい教育を享受できるよう良質の環境を確保することが重要である。

そこで、外国人幼児が在籍する幼稚園においては、外国人幼児やその保護者の日本語及び日本文化への理解の状況を把握しながら入園を受け入れ、当該幼児や保護者が安心して幼稚園生活を送れるように配慮し、教育活動を工夫する必要がある。また、外国人幼児の受入れは、周囲の日本人である幼児が国際的な感覚を身に付ける機会と考えるならば、外国人幼児や保護者への指導や配慮のみならず、学級経営の工夫を図っていくことも重要である。

しかし、外国人幼児や保護者が安心して幼稚園生活を送ることができるようになるまでの過程は多様であり、容易ではない。当該幼児が教師や友達と簡単な意思疎通ができるようになるまでの不安感が大きく、特別な配慮が求められ、また、その保護者も日本での生活に適応するに当たり、様々な困り感を感じており、多くの支援が必要と推測される。幼稚園や教師はこうした外国人幼児とその保護者の様々な不安感や困り感を受け止め、外国人幼児と保護者が安心感や信頼感を持って園生活を送れるように、工夫を図ることが大切である。

一方、冒頭に述べたように、外国人幼児やその保護者との関わりは、周囲の日本人である幼児とその保護者にとって「自分と異なる考え方や生活習慣、文化等」に触れる貴重な体験となり、国際的な感覚を身に付ける機会ともなる。特に、幼児同士が遊びや生活を通して自然に異文化を受け入れ合い、互いに認め合う体験をすることは、多様性を受け入れ、国際社会をたくましく生きる力を身に付けていく上で貴重な経験となる。また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、外国語教育の重点化、日本文化の魅力の再確認等の教育内容の充実・発展に力を入れようとする我が国の状況を鑑みても、国際感覚の基礎を育成することは喫緊の課題である。

今後は更に国際化・グローバル化が進み、多様な外国にルーツを持つ外国人幼児が増加することも予想され、幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方を明らかにしていくことが求められる。

これまでの外国人児童・生徒の受入れに関する資料等によると、平成2年の出入国管理及び難民認定法の改正以降、学校現場では外国人児童・生徒数は増加の一途をたどっている。日本語が通じず、上手くコミュニケーションがとれない状況の児童・生徒を受け入れ

つつ、全ての児童・生徒にとって学び豊かな授業を展開するためには、日本語指導が必要な児童・生徒に対する支援が課題となった。そこで、文部科学省は、小学校以上の学校に対し、「日本語指導が必要な児童・生徒に関する調査」を実施し、日本語指導の必要な児童・生徒の入学時や学習時の支援等の施策を展開している。しかし、この調査は幼稚園は対象になっておらず、幼稚園の入園状況や対応等の実態は分からないままである。

さらに、企業の工場等が集まる地域によっては、外国人が多く居住する場所（以下、「集住地域」という）もある。例えば、自動車関連の工場が集まるある市では、県営住宅に住む1500人の4人に1人が日系外国人である。こうした地域の学校等においては、外国人児童・生徒が多数在籍している。また、外国人同士でコミュニティーを築き、子供を同じ学校に通わせるといった地域もある。このように多くの外国人が居住する地域の幼児は、どのような園生活を送っているのだろうか、また外国人幼児が多数在籍する幼稚園においては、どのような配慮や工夫がなされているのであろうか、こうした特色を持つ地域の幼稚園の実態や課題を明らかにし、指導の充実を図っていくことが求められる。

そこで、本研究は、外国人幼児の在園状況を把握するとともに、当該幼児とその保護者が抱える課題、及び当該幼稚園が抱える課題を整理し、各幼稚園の指導上の留意点、当該幼児を取り巻く地域の関係諸機関との連携の在り方や具体的支援策を見出していく。さらに、各自治体の外国人幼児及びその保護者に対する支援の状況と具体的な内容をも捉え、幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方を明らかにし、幼児期の教育内容等の深化・充実に資することを目的とする。

Ⅱ 研究の内容及び方法等

Ⅰ 研究主題

グローバル化の進展や人口知能（AI）の進化により、今後社会が加速度的に変化していくことが予測される。そのような社会を生きていく子供たちには、広い視野を持ち新たな未来を創り出していくために必要な資質・能力をはぐくむことが重要である。

また、世界は、テロや紛争、貧困、開発、差別、人権、環境問題など様々な問題を抱えている。そこで国際理解教育においては、広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること等が求められており、「多文化共生の理念」を培うことも重要であると考えられる。

幼児は家庭や地域、園において多様な国々の人々と共に暮らし、そこから様々な感化を受けている。このことを踏まえると、人格形成の基礎を培う幼児期の教育においても、幼児が多様性を受け止め、国際理解の基盤を培っていくことは、非常に重要である。

幼稚園教育要領改訂に向けた教育内容の見直しの中でも、「社会に開かれた教育課程」の重要性を踏まえ、自然や地域社会における様々な文化や伝統、異なった文化等に触れたり、これらに親しみを持てるようにしたりすることが求められている。さらに、幼児に自然や身の回りの物を大切にする態度や、社会とのつながりの意識、多様性を尊重する態度や国際理解の意識の芽生え等をはぐくむようにすることが求められている。

これらのことを踏まえて、幼稚園においてはどのような国際理解の基盤を培う教育がな

されていくことが必要なのか、現状と課題を把握し、これからの在り方を明らかにする必要があると考え主題を設定した。

2 研究の方法

本研究では、質問紙調査及び面接調査等を用いて、幼稚園が外国人幼児を受け入れている状況や教師の指導上の工夫や留意点等について実態を把握し、その結果から、外国人幼児一人一人の言語や文化的背景等、特性に応じた指導上の工夫やその幼児を取り巻く学級集団への指導、当該幼児の保護者への支援の在り方を見出すものとする。また、関係諸機関へも質問紙調査を行い、具体的な支援や対応策がどのように行われ、どのような成果を挙げているかを実態把握し、今後の関係諸機関との連携の在り方や具体的支援策の方向性を見出していく。

(1) 調査研究Ⅰ－質問紙調査

1) 幼稚園等対象の質問紙調査

幼稚園等における外国人幼児の受入れ状況及び指導の工夫と成果等に関する質問紙調査を行った。

調査対象は外国人の居住の密集度等によって、日本語の習得状況が異なると考え、①ほとんど同じ国籍（母語）の人々が一カ所に集中して居住している地域 ②多くの外国人家庭が単独・個別に生活している都市部の地域 ③外国人がほとんど住んでいない地域の条件を下に、全国8都府県を選定し、その地域の中でも外国人居住比率の高い地域の幼稚園等を対象にした。

2) 行政対象の質問紙調査

上記8都府県の市区町村教育委員会を対象に質問紙調査を行った。

(2) 調査研究Ⅱ－面接調査及び事例研究

調査研究Ⅰの調査対象園の中から、先進的な取組をしている幼稚園に面接調査を行うとともに、具体的な実践事例から成果と課題を明らかにする。そして、外国人幼児一人一人の言語や文化的背景等、特性に応じた指導の充実を図り、在園する全ての幼児の国際理解の基盤を培う教育の在り方を明らかにする。

3 研究の経過

研究計画に基づき、以下のとおり研究を推進した。

7月	WG（研究内容・方法の検討）
8月	第1回調査研究実行委員会の開催（研究の目的、方法の共通理解） WG（質問紙調査項目の検討、調査対象地区・研究協力園の選定） 質問紙調査用紙作成
9月	第2回調査研究実行委員会の開催 研究協力園との情報交換及び研究の進め方について説明
9月末	質問紙調査用紙の配布

質問紙調査用紙回収期間（10月～11月）

10月 研究協力園の面接調査開始（～3月）
事例収集（～3月）

11月 第3回調査研究実行委員会の開催
研究経過報告及び事例検討
質問紙調査の集計作業

12月 第4回調査研究実行委員会の開催
研究経過報告及び事例検討
質問紙調査の結果報告
WG（研究報告書案の検討）

1月 質問紙調査の集計及び分析・考察
WG（研究報告書案の検討・作成）
事例のまとめ及び報告書（案）作成

2月 第5回調査研究実行委員会の開催
WG（報告書原稿の検討）

3月 WG（報告書原稿の修正）
文部科学省に報告書提出
報告書発送

Ⅲ 調査研究Ⅰ 質問紙調査による研究

調査研究Ⅰでは、幼稚園等における外国人幼児の就園状況及び園生活の実態、保護者の困り感、受け入れた幼稚園等の課題や関係諸機関の支援状況を把握し、外国人幼児とその保護者の指導上の課題や適切な支援の在り方を明らかにするために、幼稚園等対象質問紙調査、また、地域の行政機関の支援状況及び課題を明らかにするため、行政対象質問紙調査を実施した（資料参照）。

1 方法及び調査内容

(1) 調査対象

質問紙調査の実施地域は、①ほとんど同じ国籍（母語）の人々が一カ所に集中して居住している地域 ②多くの外国人家庭が単独・個別に生活している都市部の地域 ③外国人がほとんど住んでいない地域等の条件を下に、全国から8都府県を選定した。

①集住地域（多数・同一国籍型）・・・群馬県、愛知県、滋賀県

②都市型分散地域（多数・多国籍型）東京都、神奈川県、大阪府、福岡県

③少数地域・・・・・・・・・・・・・・・・岩手県

1) 幼稚園等対象質問紙調査

選定した8都府県の中で、外国人居住率が高い地域の幼稚園等1079園に配付
回収数 544園（回収率 50.4%）

回収数は、幼稚園477園、幼稚園型認定こども園29園、幼保連携型認定こども園38園、計544園であった。選定に使用した名簿は幼稚園から認定こども園への移行期により、幼稚園、幼稚園型認定こども園、幼保連携型認定こども園の3つのタイプが混在していたが、今回は幼稚園及び幼稚園型認定こども園506園を分析対象とする。

2) 行政対象質問紙調査

上記①から③の都府県の397市区町村教育委員会に配付
回収数は、217教育委員会（回収率 54.7%）

(2) 調査期間 平成28年10月～平成28年11月

(3) 調査内容

1) 幼稚園等対象質問紙調査

①回答園の属性及び外国人幼児の在園状況

園の属性（所在地、園の種別、学級数、園児数）、外国人幼児受入れ状況（外国人幼児在籍人数、国籍、母語が同じ幼児の受入れ状況）

②外国人幼児及び保護者の園での様子

一番印象に残った外国人幼児の気になる姿（9項目）の程度と見られなくなるまでの期間、園の外国人幼児に対する指導上の配慮事項（9項目）、一番印象に残った保護者の様子（7項目）の程度と解決するまでの期間、園の保護者に対する指導上の配慮事項（9項目）、他の幼児への影響（5項目）、外国人幼児への支援（3項目）の有無と提供者、支援（5項目）に対するニーズ。

2) 行政対象質問紙調査

① 調査対象地域の市区町村の外国人の在留状況

総人口、在留外国人数、外国人比率（平成 28 年 4 月現在）、各施設（幼稚園、保育所、認定こども園）に在籍している外国人幼児の人数把握状況

② 外国人幼児に対する支援について

外国人幼児やその家庭への支援（4 項目）、外国人幼児が在籍する幼稚園等への支援（5 項目）、地域との連携（5 項目）、支援の成果や課題（自由記述）

2 結果

(1) 幼稚園等対象質問紙調査

1) 回答園の属性及び外国人幼児の在園状況

① 回答園の学級数と園児数について

学級数の最大値は 22 学級で、平均 6.1 学級である。

園児数の最大値は 689 人で、平均 146.9 人である。

表 1 回答園の学級数と園児数

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
学級数 (学級)	505	1	22	6.1	3.5
園児数 (人)	498	1	689	146.9	107.4

N：有効回答数（以下、同）

② 外国人幼児が在籍する園数（平成 28 年 9 月 1 日現在）

外国人幼児が在籍する園は 267 園、全体の 54.0%であった。

在籍する園数が多いのは、東京 81.5%、愛知 60.2%、神奈川 55.6%と続く。

表 2 外国人幼児が在籍する園数

地域	集住地域			都市型分散地域				少数地域	合計
	都府県	愛知	群馬	滋賀	東京	神奈川	大阪	福岡	
N	118	67	53	81	81	37	29	28	494
%	60.2	50.7	32.1	81.5	55.6	43.2	44.8	17.9	54.0

③ 外国人幼児の在籍人数及び国数について

地域別在籍人数で最も多いのは神奈川で、一園当たりの最大値は 59 人である。

地域別国数で最も多いのは東京で、一園当たりの最大値は 9 か国である。

表 3 外国人幼児の在籍人数及び国数

	項目	愛知	群馬	滋賀	東京	神奈川	大阪	福岡	岩手	全体
人数	N	70	34	17	64	43	15	13	4	260
	平均値	3.0	4.2	3.8	6.2	7.4	2.7	2.5	1.0	4.7
	標準偏差	2.8	5.3	5.7	5.0	11.6	1.6	1.6	0.00	6.3
	最小値	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	最大値	19	21	25	21	59	6	5	1	59

国数	N	67	33	16	62	39	14	11	4	246
	平均値	2.0	2.4	1.6	3.2	3.0	1.8	1.7	1.0	2.4
	標準偏差	1.3	1.8	0.7	1.9	1.7	1.1	1.0	0.0	1.6
	最小値	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	最大値	7	8	3	9	7	5	4	1	9

④外国人幼児受入れ状況（H26～H28）について

平成26年度から平成28年度までに外国人幼児を受入れた園は68.3%である。所在地別の受入れ状況は表4のとおりである。

外国人幼児の受入れ園の割合が最も多いのは東京93.9%で、次いで群馬、愛知、神奈川県と続く。受入れ園の割合が最も少ないのは、岩手25.9%である。

集住地域、都市型分散地域別に見れば、受入れ状況に大きな差はないが、東京を除き、集住地域が若干多いと言える。

表4 地域別の外国人幼児受入れ園の割合（平成26年度～平成28年度）

地域	集住地域			都市型分散地域				少数地域	
都府県	愛知	群馬	滋賀	東京	神奈川県	大阪	福岡	岩手	合計
N	117	67	54	82	80	37	28	27	492
%	70.1	71.6	63.0	93.9	65.0	59.5	50.0	25.9	68.3

⑤受入れ園の状況について

在籍人数の平均は7.5名である。国数の平均は2.9か国である。最も多い在籍数は神奈川の129名で、最も多い国数は東京都で12か国である。

母語が同じ外国人幼児の在籍状況の平均は56.2%である。東京が最も多く、神奈川県、愛知、群馬と続く。岩手は、母語が同じ外国人幼児が在籍する園は無かった。

表5 外国人幼児の在籍する人数と国数

	地域	集住地域			都市型分散地域				少数地域	合計
	都府県	愛知	群馬	滋賀	東京	神奈川県	大阪	福岡	岩手	
	N	79	43	31	70	51	18	15	5	312
在籍	平均値	5.5	7.0	3.2	11.5	11.2	3.9	3.5	2.0	7.5
	標準偏差	6.6	12.4	2.8	12.4	22.4	3.1	2.6	1.2	12.6
	最小値	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	最大値	36	70	12	65	129	11	8	4	129
	N	76	43	30	70	51	19	15	5	309
国数	平均値	2.6	2.7	1.7	4.1	3.2	2.5	2.3	1.0	2.9
	標準偏差	1.7	2.1	0.8	2.5	2.0	1.7	1.5	0.0	2.1
	最小値	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	最大値	10	9	3	12	8	7	6	1	12

表6 受入れ園における母語が同じ幼児が在籍する園の割合

地域	集住地域			都市型分散地域				少数地域	
都府県	愛知	群馬	滋賀	東京	神奈川県	大阪	福岡	岩手	合計
N	77	42	32	71	54	18	16	7	317
(%)	54.5	50.0	43.8	78.9	57.4	38.9	43.8	0	56.2

都市型分散地域（多数・多国籍型：東京、神奈川、大阪、福岡）と集住地域（多数・同一国籍型：群馬、愛知、滋賀）を比較したところ、在籍人数の最大値は東京が12か国が多いが、集住地域の愛知は10か国で次に多く、他の府県も数値にあまり差はない。

また、集住地域の特徴と想定した同国人の在籍状況の全国平均56.2%であった。集住地域（多数・同一国籍型）愛知、群馬、滋賀と都市型分散地域（多数・多国籍型）東京、神奈川、大阪、福岡を比較したところ、東京が特に78.9%と突出しているが、他の府県には大きな差異はなかった。

本研究の前提として、同国人がいることで、幼稚園等の指導上の困り感に特徴があると考えたが、ここまでの分析結果から、集住地域と都市型分散地域には大きな差がないと思われる。よって、これ以降は、特定の地域性の違いを取り上げることなく、分析することとした。

また、少数地域として取り上げた岩手については、想定どおり、在籍人数、同国人数ともに少人数であることが分かった。

2) 外国人幼児及び保護者の園での様子

① 一番印象に残った外国人幼児の気になる姿について

一番印象に残った外国人幼児の入園時の年齢は、3歳が50.5%で半数を占める。4歳は30.7%、5歳は16.4%であった。入園時に2歳、6歳という回答もあったが、以後の集計については、2歳は3歳に、6歳は5歳に合算して集計した。

表7 入園時の年齢

入園時の年齢（歳）	N	パーセント
2	4	1.4
3	148	50.5
4	90	30.7
5	48	16.4
6	3	1.0
合計	293	100.0

一番印象に残った外国人幼児の国籍については、度数が10以上の国を表8に示した。この他にも、アジア地域（ベトナム社会主義共和国、バングラデシュ人民共和国等）、欧州地域（フランス共和国、英国等）、アフリカ地域（エジプト・アラブ共和国、エチオピア連邦民主共和国等）合わせて、40か国に及ぶ。

表8 気になった幼児の国籍（10人以上）

国名	度数（人）	%
中華人民共和国	106	31.5
大韓民国	29	8.6
フィリピン共和国	28	8.3
ブラジル連邦共和国	26	7.7
インド	11	3.3
アメリカ合衆国	10	3.0
パキスタン・イスラム共和国	10	3.0
ポルトガル共和国	10	3.0

入園当初気になる姿のうち、「よく見られた」の割合の最も高い項目は、「ア. 教職員からの指示が分からない」で59.6%であった。次いで、「イ. 絵本に興味を持たない、楽しめない」29.1%、「ク. 列に並んだり、順番を待ったりしない」28.5%、「エ. 話をしようとしなない」26.6%、「ウ. 歌うことに興味を持たない、楽しめない」26.3%であった。

「カ. 他人から触れられることを嫌がる」「キ. 必要以上にくっついたり、抱きついたりする」は「あまり見られない」の割合が8割を超えた。

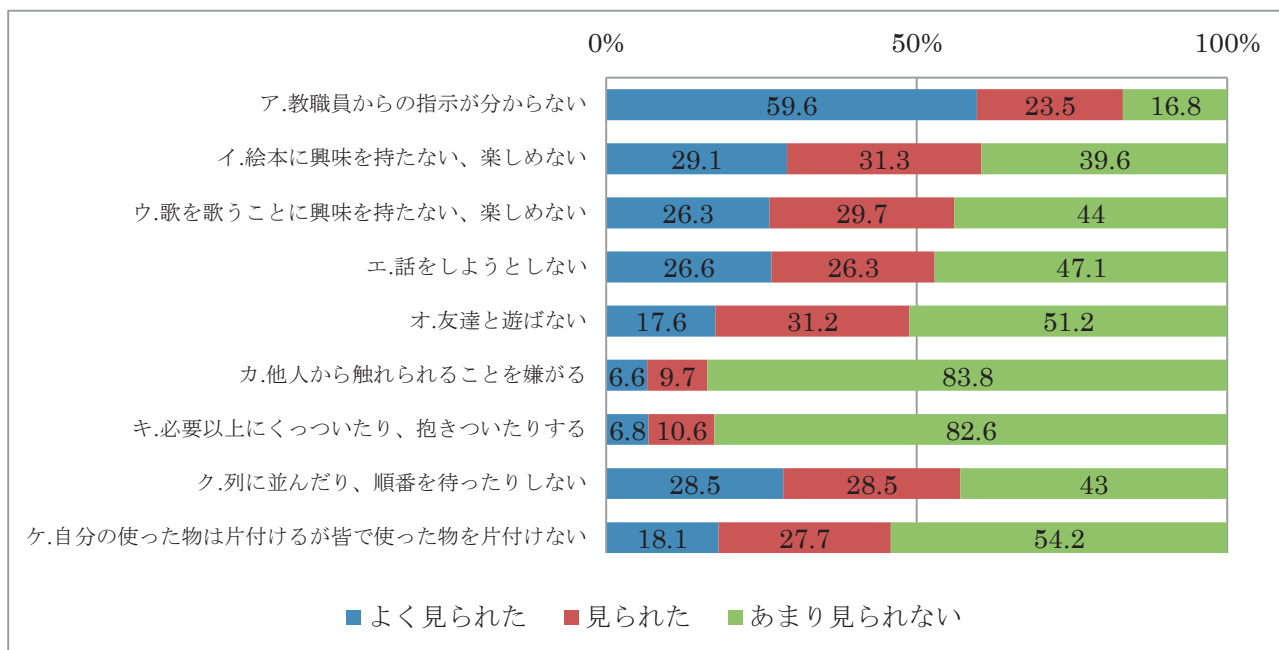


図1 外国人幼児の気になった行動 (%)

外国人幼児の気になった行動について、入園時の年齢別に比較すると (表9)、「ア. 教職員からの指示が分からない」は全ての学年で「よく見られた」の割合が高い。4、5歳は「よく見られた」、「見られた」を合わせると約90%で、3歳児は、約80%であった。

「イ. 絵本に興味を持たない、楽しめない」から「ク. 列に並んだり、順番を待ったりしない」については、年齢差は見られなかった。

また、「ケ. 自分の使った物は片づけるが皆で使った物は片付けなない」については、「よく見られた」、「見られた」を合わせると、3歳は約4割、4歳児は約5割、5歳児は約6割であった。

表9 外国人幼児の気になった行動の入園時の年齢別の割合 (%)

項目	年齢	N	よく見られた (%)	見られた (%)	あまり見られない (%)
ア. 教職員からの指示が分からない	3歳	151	55.6	25.2	19.2
	4歳	90	68.9	20.0	11.1
	5歳	51	60.8	27.5	11.8
イ. 絵本に興味を持たない、楽しめない	3歳	148	27.0	32.4	40.5
	4歳	90	30.0	34.4	35.6
	5歳	50	38.0	30.0	32.0
ウ. 歌を歌うことに興味を持たない、楽しめない	3歳	147	23.8	31.3	44.9
	4歳	90	31.1	30.0	38.9
	5歳	50	36.0	26.0	38.0

エ．話をしようとしな	3 歳	148	25.0	25.0	50.0
	4 歳	90	31.1	26.7	42.2
	5 歳	50	26.0	32.0	42.0
オ．友達と遊ばない	3 歳	148	20.3	27.0	52.7
	4 歳	90	17.8	37.8	44.4
	5 歳	50	12.0	40.0	48.0
カ．他人から触れられることを嫌がる	3 歳	146	4.1	11.0	84.9
	4 歳	89	7.9	13.5	78.7
	5 歳	50	8.0	2.0	90.0
キ．必要以上にくっついたり、抱きついたりする	3 歳	146	4.1	11.6	84.2
	4 歳	90	8.9	5.6	85.6
	5 歳	51	13.7	7.8	78.4
ク．列に並んだり、順番を待ったりしない	3 歳	147	26.5	30.6	42.9
	4 歳	90	30.0	31.1	38.9
	5 歳	50	32.0	22.0	46.0
ケ．自分の使った物は片付けるが皆で使った物を片付けない	3 歳	147	15.6	25.2	59.2
	4 歳	90	21.1	27.8	51.1
	5 歳	49	24.5	36.7	38.8

外国人幼児の気になった行動に関する自由記述を見ると、反応が少なく、理解できたか不明、言葉がオウム返しというような「言葉の理解・応答」、集団行動の意味が分からない、話が理解できないので、皆と座ってられないというような「集団行動・態度」、使った物を片付けない、忘れ物が多いというような「園生活について」、弁当を食べない、宗教による食文化の違いがあるというような「食生活について」と4つのカテゴリーに分類された。

表 10 外国人幼児の気になった行動についての自由記述の主な内容

カテゴリー	記述例
言葉の理解・応答	<ul style="list-style-type: none"> ・反応が少なく、理解できたか不明。 ・言葉がオウム返し。 ・言葉が通じないのですぐ手が出る。 ・話そうとするが伝わらず怒る、母国語で怒って泣く。 ・同国の子が集まり、母国語で話し、かたまってしまう。
集団行動・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・集団行動の意味が分からない。 ・話が理解できないので、皆と座ってられない。 ・友達と積極的に関わるが、相手が嫌がる様子を一緒にふざけていると思ってやめない。 ・怪我をしても傷を見せたがらず、どのような状況であったかが把握できにくかった。
園生活について	<ul style="list-style-type: none"> ・使った物を片付けない、上ばき下ばきの区別がない。 ・うがい、手洗い、歯磨き、トイレ後の手洗いをしない。 ・保護者が幼稚園の生活を理解できず困ったことが多い。 ・保護者に伝達事項が伝わらず、忘れ物等が多い。
食生活について	<ul style="list-style-type: none"> ・弁当を食べない。 ・日本食が苦手食べられない。 ・宗教による食文化の違いがある。

アからケの項目の姿が見られなくなった時期全ての項目で未解決が多い。

「オ．友達と遊ばない」だけは6カ月以内に55%が見られなくなっている。

「ア．教職員からの指示が分からない」、「エ．話を聞こうとしない」、「ク．列に並んだり、順番を待ったりしない」の3つの項目は6カ月以内に約50%が解決している。

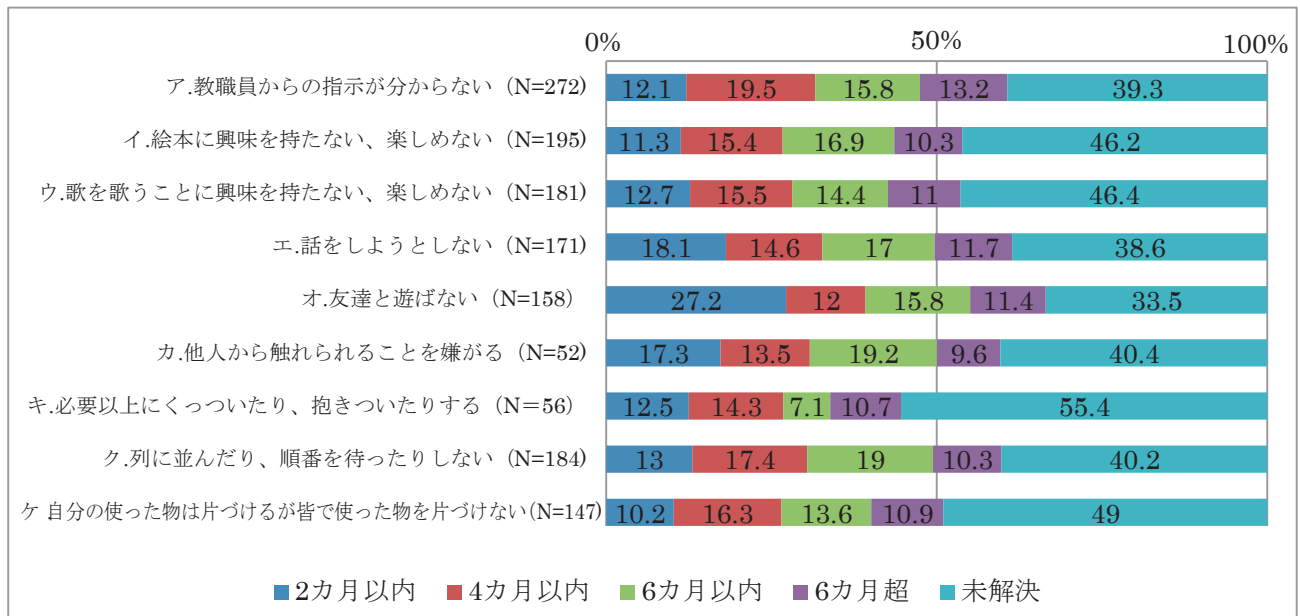


図 2 気になる姿が見られなくなった時期 (%)

アからケの項目のうち、6カ月以内に約50%が解決した項目「ア」「エ」「オ」「ク」について、入園時の年齢別に見ると(表9)、2カ月以内の割合を見ると、3歳に比べ4、5歳の割合が高い。

2カ月以内と4カ月以内を合わせると、3、4、5歳ともに「ア.教職員からの指示が分からない」、「エ.話をしようとしらない」、「ク.列に並んだり、順番を待ったりしない」は約30%から40%である。一方、「オ.友達と遊ばない」は3歳35.7%、4歳44.0%、5歳80.8%で、年齢とともに高くなる傾向にあった。

5歳について解決までの時間を見てみると、「オ.友達と遊ばない」以外は、未解決が約50%であった。

表 11 気になる姿が見られなくなった時期 (入園時の年齢別)

ア. 教職員からの指示が分からない						
入園時の年齢	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
3歳児	122	9.8	18.0	19.7	16.4	36.1
4歳児	80	15.0	26.3	8.8	15.0	35.0
5歳児	45	15.6	15.6	15.6	4.4	48.9
エ. 話をしようとしらない						
入園時の年齢	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
3歳児	74	10.8	17.6	18.9	18.9	33.8
4歳児	52	21.2	15.4	17.3	9.6	36.5
5歳児	29	31.0	10.3	10.3	0.0	48.3
オ. 友達と遊ばない						
入園時の年齢	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
3歳児	70	20.0	15.7	18.6	15.7	30.0
4歳児	50	34.0	10.0	14.0	12.0	30.0
5歳児	26	46.2	34.6	7.7	11.5	0.0

ク. 列に並んだり、順番を待ったりしない

入園時の年齢	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
3歳児	84	9.5	19.0	19.0	13.1	39.3
4歳児	55	20.0	14.5	16.4	9.1	40.0
5歳児	27	14.8	18.5	14.8	3.7	48.1

教師が気になる幼児の姿のうち、最も気になった項目の選択率をみると、「ア. 教職員からの指示が分からない」が60.3%で一番高かった(図3)。次いで、「エ. 話をしようとしな

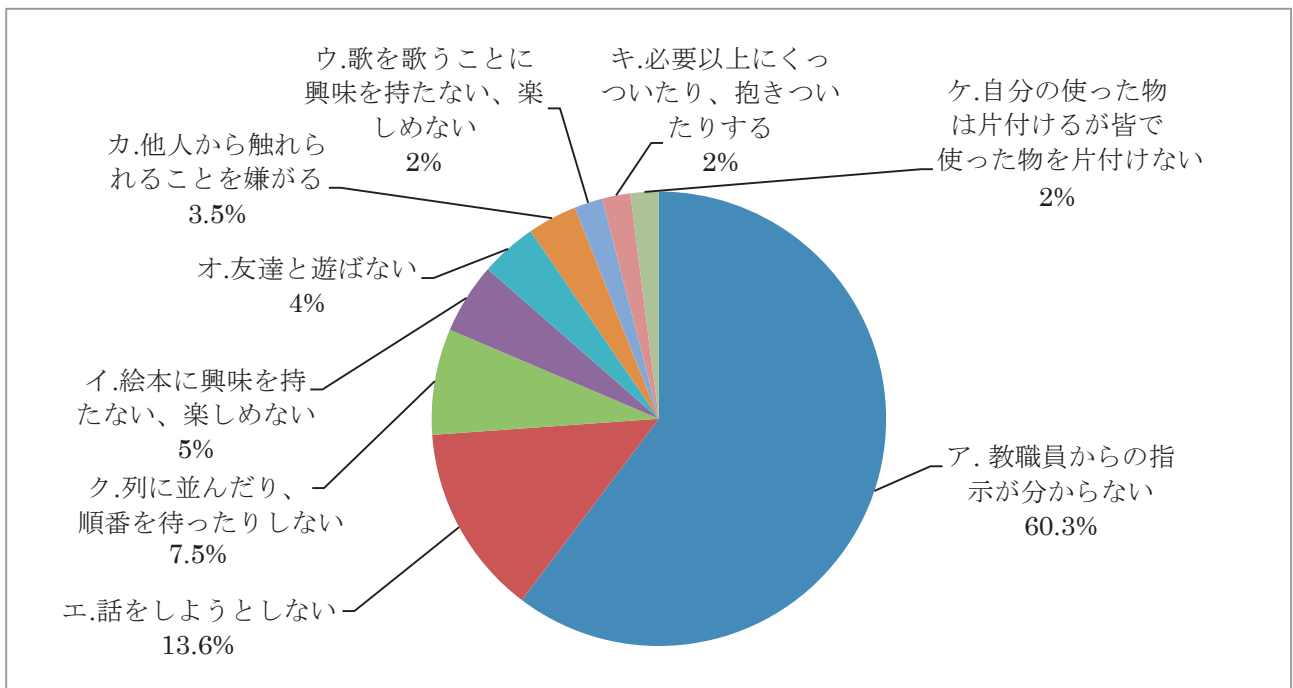


図3 教師が気になる幼児の姿のうち、最も気になった項目

②園の外国人幼児に対する指導上の配慮事項について

外国人幼児への指導上の配慮事項で、「とても配慮した」、「配慮した」と回答した割合を合わせると、「ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」92.6%、「イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」87.9%、「キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした」86.1%の順であった。

「エ. 話したり表示したりするとき、イラストなどでの表示を多くした」と「オ. 周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した」は「とても配慮した」、「配慮した」と回答した割合を合わせてみると、約60%を超える配慮をしていた。

「ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」「カ. サポートする大人が、近くにいるようにした(通訳者を含む)」は約50%は配慮していた。

「ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」と「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」は配慮していた割合が約30%であった。

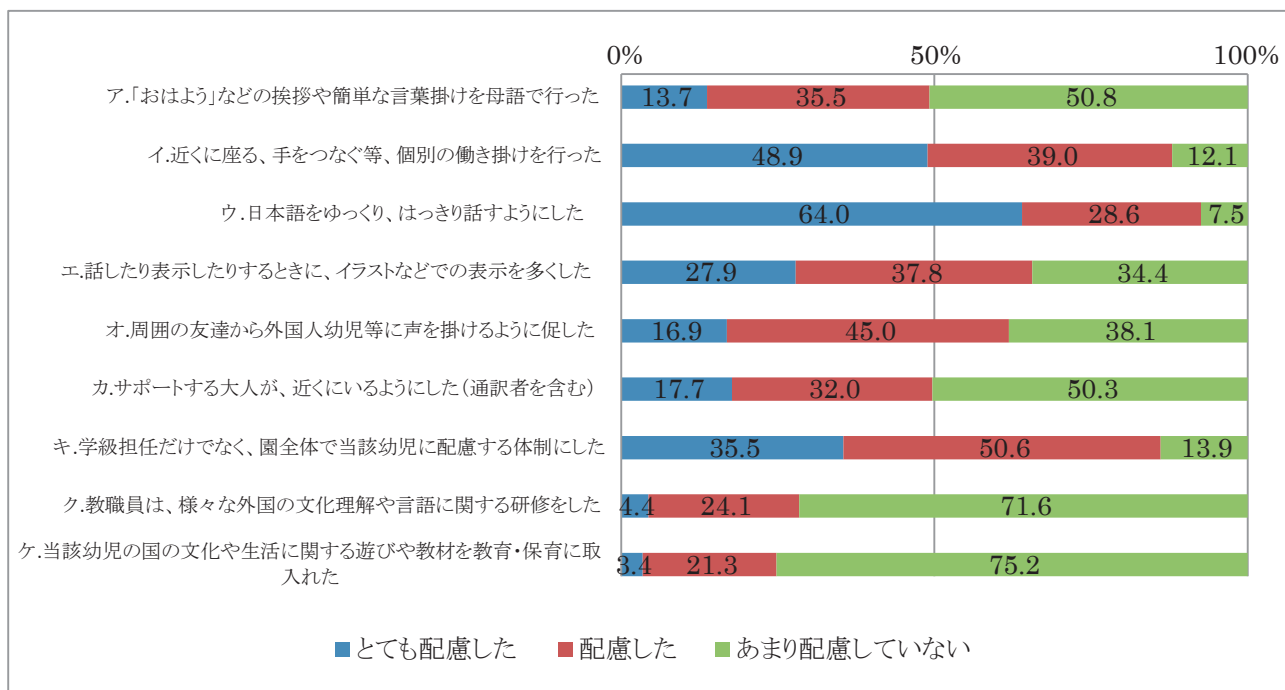


図 4 外国人幼児に対する指導上の配慮事項 (%)

指導上の配慮についての自由記述を見てみると、通訳の常時配置により、本児の思いを聞くというような「コミュニケーション」、子供同士の関わりや個別の関わりというような「関わり方の工夫」といった二つのカテゴリーに分類された。

表 12 指導上の配慮についての自由記述の主な内容

カテゴリー	記述例
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・通訳の常時配置により、本児の思いを聞く。 ・月 2 回の市の通訳派遣を利用し、園児に母国語で話す、一緒に遊んでもらう。 ・翻訳アプリを導入。 ・ドイツ語を話す担任を採用。 ・母国語が同じ子供が同じクラスになるよう、クラス分けをした。 ・園からの手紙は、中国語に翻訳した。 ・お便りにルビをふる。 ・両親が家庭で日本語で接する、園で先生、友人が日本語で話し掛ける等、一日でも早く日本語を覚えられるようにしている。
関わり方の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・子供同士の関わりが自然に生まれるように遊びの中で援助する。 ・自然な交流関係の中で楽しく過ごせるように配慮。保護者同士の関わりも同様。 ・大切なことや絵本は英語で個別に伝えたり読んだりした。 ・分からないことがあったら実物を見せたり、やって見せたりしていた。 ・家庭の宗教を理解する。

③外国人幼児に対する指導上の配慮と気になる姿の解決との関連について

外国人幼児に対する指導上の配慮と「入園当初、気になった姿」が見られなくなった期間、すなわち解決までの期間とのクロス集計を行い、両者の関連について見た（表 13-1～表 13-7）。なお、「カ. 他人から触れられることを嫌がる」と「キ. 必要以上にくっついたり、抱き

ついたりする」については、教師は「気にならない」という割合が多かったので除外した。

「ア. 教職員からの指示が分からない」において、解決までの期間について、2カ月以内の割合が相対的に高かった配慮事項は、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」16.9%、「イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」12.5%、「エ. 話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした」12.3%である。

全ての指導上の配慮に関する項目について、解決までの期間が2カ月以内、4カ月以内を合わせた割合が約3割であった。但し、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」は38%と最も高かった。

また、全ての指導上の配慮に関する項目について、未解決の割合は約4割であった。

表 13-1 外国人幼児に対する指導上の配慮と気になる姿（ア）の解決との関連

問2の項目	問1 ア. 教職員からの指示が分からない					
	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	143	10.5	18.9	12.6	13.3	44.8
イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	257	12.5	19.8	15.2	13.6	38.9
ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	259	12.0	20.1	15.4	13.5	39.0
エ. 話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	195	12.3	18.5	13.8	11.8	43.6
オ. 周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	176	10.2	20.5	14.8	11.4	43.2
カ. サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	146	10.2	19.7	13.6	12.9	43.5
キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	246	11.8	19.1	15.0	13.4	40.7
ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	82	11.0	19.5	12.2	14.6	42.7
ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	71	16.9	21.1	11.3	9.9	40.8

「イ. 絵本に興味を持たない、楽しめない」において、解決までの期間について、2カ月以内の割合が相対的に高かった配慮事項は、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」18.9%、「ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」12.3%、「イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」11.9%である。

解決までの期間が2カ月以内、4カ月以内を合わせた割合が高い項目は、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」30.2%、「オ. 周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した」28.3%、「イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」27.0%であった。

未解決の割合は、「ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」53.7%、「カ. サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）」51.8%、「エ. 話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした」49.3%であった。

表 13-2 外国人幼児に対する指導上の配慮と気になる姿（イ）の解決との関連

問2の項目	問1 イ．絵本に興味を持たない、楽しめない					
	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	114	12.3	12.3	18.4	9.6	47.4
イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	185	11.9	15.1	16.2	10.8	45.9
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	188	11.2	15.4	16.5	10.6	46.3
エ．話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	142	11.3	14.1	16.2	9.2	49.3
オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	138	11.6	16.7	17.4	10.1	44.2
カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	112	8.0	14.3	15.2	10.7	51.8
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	182	11.0	15.4	17.0	10.4	46.2
ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	67	10.4	7.5	13.4	14.9	53.7
ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	53	18.9	11.3	11.3	13.2	45.3

「ウ．歌を歌うことに興味を持たない、楽しめない」において、解決までの期間について、2カ月以内の割合が相対的に高かった配慮事項は、「イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」13.3%、「ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」13.1%、「ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」12.9%である。

解決までの期間が2カ月以内、4カ月以内を合わせた割合が高い項目は、「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」31.9%、「ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」29.0%、「イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」28.9%であった。

未解決の割合は「カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）」51.9%、「ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」50.8%、「ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」48.5%であった。

表 13-3 外国人幼児に対する指導上の配慮と気になる姿（ウ）の解決との関連

問2の項目	問1 ウ．歌を歌うことに興味を持たない、楽しめない					
	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	101	12.9	14.9	11.9	11.9	48.5
イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	173	13.3	15.6	13.9	11.0	46.2
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	176	13.1	15.9	13.6	10.8	46.6
エ．話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	131	12.2	16.0	13.0	10.7	48.1
オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	128	11.7	15.6	13.3	11.7	47.7

カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	106	11.3	14.2	10.4	12.3	51.9
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	168	12.5	16.1	14.3	10.7	46.4
ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	63	9.5	19.0	11.1	9.5	50.8
ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	47	10.6	21.3	12.8	8.5	46.8

「エ．話をしようとしなない」において、解決までの期間について、2カ月以内の割合が相対的に高かった配慮事項は、「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」24.5%、「ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」20.4%で解決の割合が高く、次に「カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）」と「キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした」が19.0%と続く。

解決までの期間が2カ月以内、4カ月以内を合わせた割合が高い項目は、「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」37.7%、「ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」34.0%、「イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」と「エ．話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした」が33.3%であった。

未解決の割合は「カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）」46.7%、「ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」41.0%「エ．話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした」40.3%であった。

表 13-4 外国人幼児に対する指導上の配慮と気になる姿（エ）の解決との関連

問2の項目	問1 エ．話をしようとしなない					
	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	98	20.4	12.2	16.3	11.2	39.8
イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	162	18.5	14.8	16.7	11.7	38.3
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	165	18.8	15.2	16.4	11.5	38.2
エ．話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	129	18.6	14.7	17.1	9.3	40.3
オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	119	18.5	10.9	20.2	10.9	39.5
カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	105	19.0	11.4	12.4	10.5	46.7
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	158	19.0	13.3	17.1	11.4	39.2
ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	61	13.1	9.8	19.7	16.4	41.0
ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	53	24.5	13.2	18.9	7.5	35.8

「オ. 友達と遊ばない」において、解決までの期間について、2 カ月以内の割合が相対的に高かった配慮事項は、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」33.3%、「エ. 話したり表示したりするとき、イラストなどでの表示を多くした」29.1%、「キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした」28.5%である。

解決までの期間が2 カ月以内、4 カ月以内を合わせた割合が高い項目は、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」43.7%、「ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」40.6%、「ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」40.0%である。

すべての指導上の配慮に関する項目について、未解決の割合は約3割であった。

表 13-5 外国人幼児に対する指導上の配慮と気になる姿（オ）の解決との関連

問2の項目	問1 オ. 友達と遊ばない					
	N	2 カ月以内	4 カ月以内	6 カ月以内	6 カ月超	未解決
ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	96	27.1	13.5	10.4	13.5	35.4
イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	151	27.2	12.6	15.2	11.3	33.8
ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	150	27.3	12.7	14.7	11.3	34.0
エ. 話したり表示したりするとき、イラストなどでの表示を多くした	110	29.1	9.1	13.6	11.8	36.4
オ. 周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	111	24.3	11.7	18.0	10.8	35.1
カ. サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	95	24.2	12.6	12.6	11.6	38.9
キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	144	28.5	11.1	13.9	11.8	34.7
ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	55	27.3	7.3	14.5	14.5	36.4
ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	48	33.3	10.4	12.5	12.5	31.3

「ク. 列に並んだり、順番を待ったりしない」において、解決までの期間について、2 カ月以内の割合が相対的に高かった配慮事項は、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」20.0%、「ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」15.0%、「エ. 話したり表示したりするとき、イラストなどでの表示を多くした」14.4%である。

解決までの期間が2 カ月以内、4 カ月以内を合わせた割合が高い項目は、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」33.3%、「ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」31.8%、「キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした」31.5%であった。

未解決の割合は「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」44.4%、「カ. サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）」44.0%、「ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」42.0%であった。

表 13-6 外国人幼児に対する指導上の配慮と気になる姿（ク）の解決との関連

問2の項目	問1 ク．列に並んだり、順番を待ったりしない					
	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	100	15.0	15.0	15.0	13.0	42.0
イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	173	12.7	17.9	19.7	10.4	39.3
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	173	13.3	18.5	18.5	11.0	38.7
エ．話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	125	14.4	16.8	16.8	12.0	40.0
オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	120	12.5	16.7	20.0	10.8	40.0
カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	109	9.2	18.3	19.3	9.2	44.0
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	165	13.9	17.6	17.6	10.3	40.6
ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	61	13.1	11.5	24.6	8.2	42.6
ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	45	20.0	13.3	13.3	8.9	44.4

「ケ．自分の使った物は片付けるが皆で使った物を片付けない」において、解決までの期間について、2カ月以内の割合が相対的に高かった配慮事項は、「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」11.6%、「オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した」11.1%、「ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」11.0%である。

解決までの期間が2カ月以内、4カ月以内を合わせた割合が高い項目は、「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」37.2%、「オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した」28.3%、「ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」28.1%である。

未解決の割合「カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）」51.1%「エ．話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした」50.0%「ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」48.8%であった。

表 13-7 外国人幼児に対する指導上の配慮と気になる姿（ケ）の解決との関連

問2の項目	問1 ケ．自分の使った物は片付けるが皆で使った物を片付けない					
	N	2カ月以内	4カ月以内	6カ月以内	6カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	82	11.0	17.1	11.0	12.2	48.8
イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	138	10.9	15.9	14.5	10.9	47.8
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	142	9.9	16.9	14.1	11.3	47.9

エ．話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	108	10.2	14.8	13.0	12.0	50.0
オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	99	11.1	17.2	15.2	10.1	46.5
カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	92	6.5	19.6	10.9	12.0	51.1
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	136	10.3	17.6	14.0	11.8	46.3
ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	53	9.4	15.1	13.2	15.1	47.2
ケ当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	43	11.6	25.6	11.6	11.6	39.5

④ 一番印象に残った保護者の様子について

保護者の国籍を見ると（表 14）、中華人民共和国、フィリピン共和国、大韓民国、ブラジル連邦共和国、インドに集中していた。その他アジア地域（インドネシア共和国、バングラデシュ人民共和国等）、欧州地域（ポルトガル共和国、ポーランド共和国等）、北米・中南米地域（アメリカ合衆国、メキシコ合衆国等）、アフリカ地域（エジプト・アラブ共和国、コンゴ共和国等）合わせて、34 か国に及んだ。

表 14 保護者との関係で困難感を感じた保護者の国籍

国名	度数（人）	%
中華人民共和国	89	26.5
フィリピン共和国	38	11.3
大韓民国	22	6.6
ブラジル連邦共和国	17	5.1
インド	10	3.0

保護者の様子について見ると、最も気になった行動は、「イ．園だより等の印刷物の内容が伝わらない」で 42.4%である。

「強く感じた」、「感じた」を合わせると、項目「イ」75.4%について、「ア．幼稚園の決まり（欠席連絡の必要性等）が分からない」64.4%、「ウ．幼児の育ちや生活の様子を伝えられない」64.0%、「キ．日本人保護者との交流が少ない」63.4%、「オ．食習慣・食文化（弁当に適切な食材の選択）」50.6%である。

「あまり感じない」と回答した割合が多い項目は「エ．時間感覚に幅があり、登園、降園の送迎が早過ぎたり、遅過ぎたりする」64.0%、「カ．病気や怪我など緊急時の連絡内容が伝わらない」56.2%である。

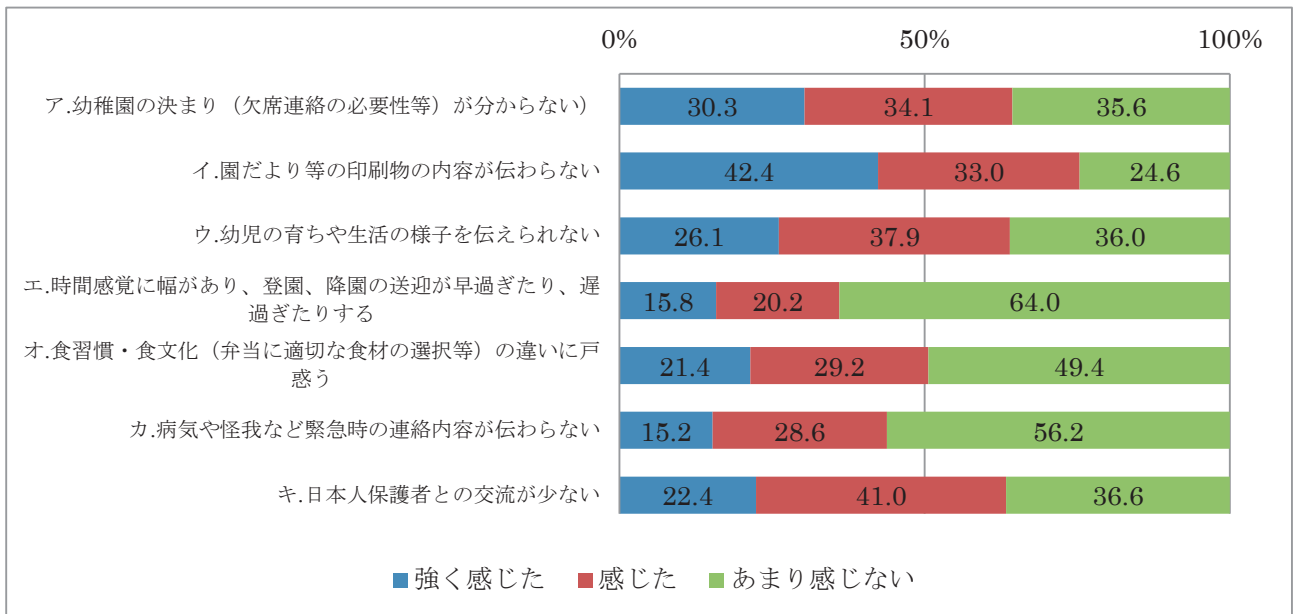


図 5 保護者の気になった行動 (%)

保護者の気になった行動が見られなくなった時期の割合を見ると、すべての項目で未解決の割合が約 7 割を占めた。特に、「イ. 園だより等の印刷物の内容が伝わらない」は 6 カ月超と未解決をあわせると 86.4%にのぼった。

「オ. 食習慣・食文化 (弁当に適切な食材の選択)」と「カ. 病気、怪我などの緊急時の連絡内容が伝わらない」の 2 カ月以内で約 8%、4 カ月以内と合わせると約 15%前後が解決しており、その割合が他の項目よりも比較的高い。

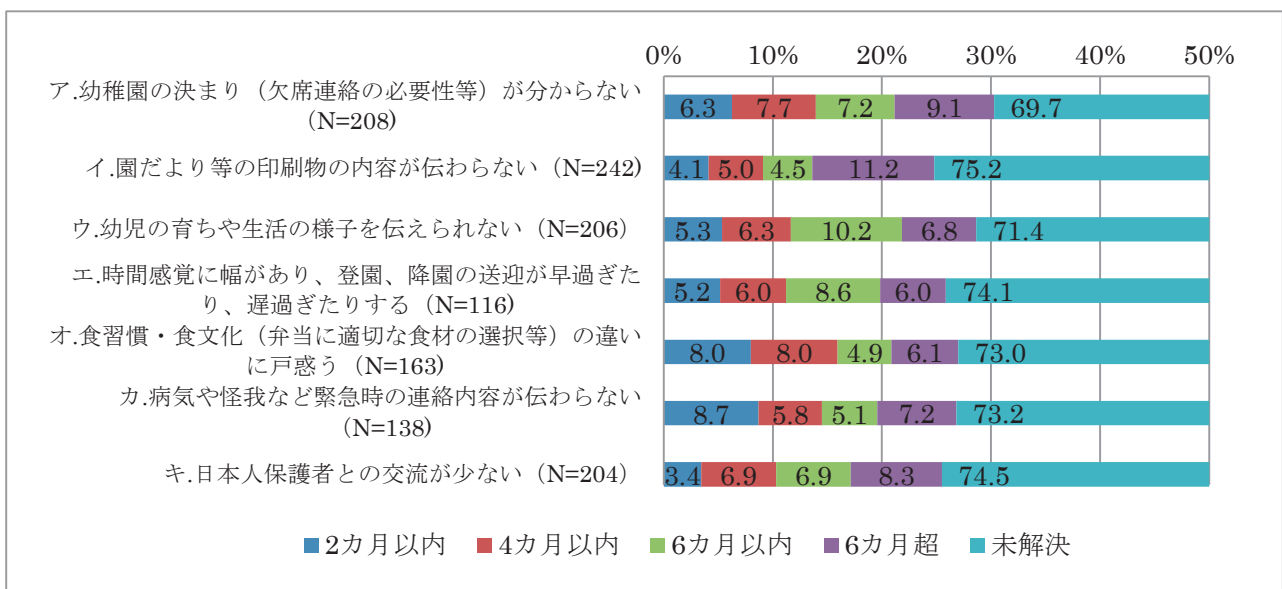


図 6 保護者の気になった行動が見られなくなった時期 (%)

⑤保護者との関係で気になっていることについて

保護者との関係や保護者同士の関係について自由記述を見ると、休みや遅刻の連絡がないといったような「保護者との連絡事項」、自分は頑張っていると分かってほしいといったような「外国人保護者の思いや個別性」、他の保護者が積極的に話し掛けてくれるといったような「保護者同士の関係」の 3つのカテゴリーに分類された。

表 15 幼稚園等と保護者との関係で気になっていることについての自由記述の主な内容

カテゴリー	記 述 例
保護者との連絡事項	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧に個別に言ったりして対応しないと伝わらない。 ・休みや遅刻の連絡がない。 ・日本語特有の言い回しは理解しにくかった。 ・配布物の理解ができていないか連絡を取る必要がある。 ・保護者自身が園に伝えたいと思っていることが伝わらない。 ・必要に応じて外国人教師が対応。 ・小学校入学に際し、小学校からの説明会のプリントを下に再度説明し、幼稚園教師と一緒に確認した。
外国人保護者の思いや個別性	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり決まりを守ってもらえない。 ・初めての日本で自分は頑張っていると分かってほしいと主張が多い。 ・文化の違いを感じている。 ・3カ月ほどで園に来なくなり、全く連絡が取れなくなった。
保護者同士の関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・他の保護者が積極的に話しかけ等をしてくれた。 ・母親、子供とともに、日本語は理解するが、母親は他の保護者の中には入らなかった。

⑥園の保護者に対する配慮事項について

保護者に対する配慮事項については、「とても配慮した」「配慮した」を合わせると、「ウ. 日本語をゆっくり、はっきりはなすようにした」93.3%「イ. 子どもの様子や連絡等、個別の働き掛けを行った」90.8%、「キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした」84.9%と相対的に高い割合である。

一方、配慮してない割合が高い項目は「ケ. 保護者会等で当該保護者の国の文化や生活を話題にする」81.6%、「ク. 様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」76.8%、「ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」67.1%である。

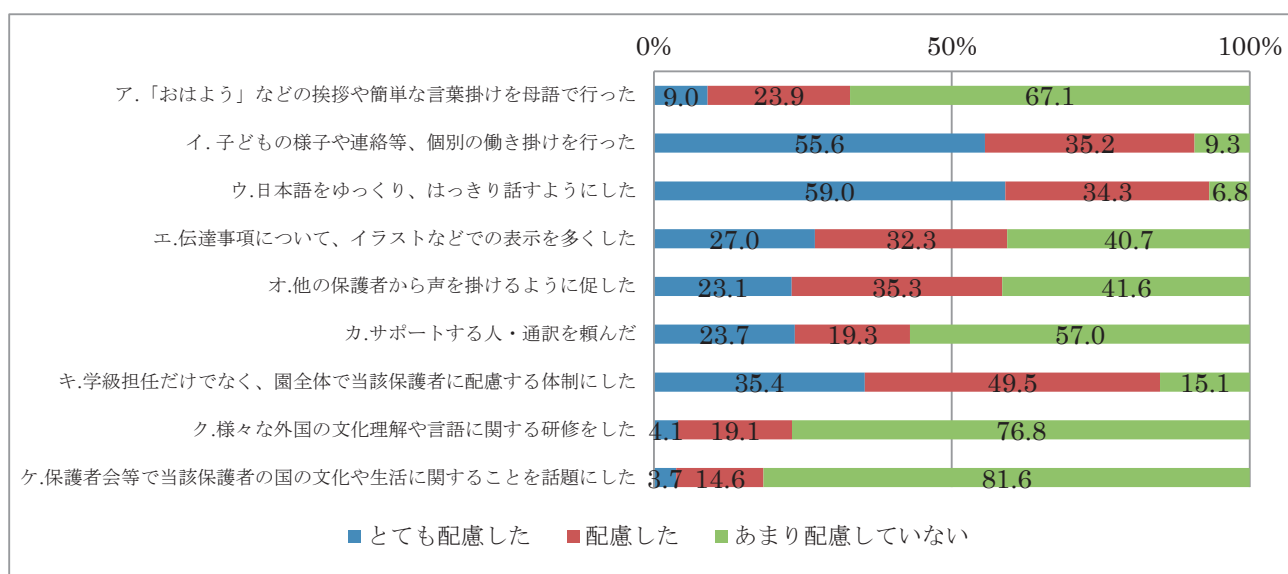


図 7 保護者に対する配慮事項 (%)

保護者との関わりに関する配慮事項の自由記述（表 16）を見ると、保護者の思いを受け止めるというような「保護者の受容」、相手の文化を取り入れるというような「文化交流」、PTA での保護者同士の関わりを持つというような「保護者同士の交流」、配布プリントの翻訳を行政担当に依頼というような「円滑な伝達の方法」の 4 つのカテゴリーに分類された。

表 16 保護者との関わりに関する配慮事項の自由記述の主な内容

カテゴリー	記述例
保護者の受容	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の頑張っているという思いは受け止め、改善された点を認め、感謝の気持ちを伝える。 ・相手国のタブーに触れ、学ばされた。例えば、「名前に赤丸は、死者」を意味する等。
文化交流	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の文化を保育や活動に取り入れる。 ・外国の遊び、絵本の紹介、保護者会で世界の料理を学ぶ会を実施。
保護者同士の交流	<ul style="list-style-type: none"> ・PTA の仕事などで保護者同士も関わりをもつようにする。 ・英語などで、保護者が活躍できる場を作った。 ・同じ国にルーツのある保護者に通訳等協力してもらった。 ・学級の周りの保護者の方が声を掛けてくれた。 ・外国人幼児の保護者が周りの保護者に積極的に関わったのでよい影響を受けた。
円滑な伝達方法	<ul style="list-style-type: none"> ・配布プリントの翻訳を行政の担当に依頼して配布した。 ・配布物は英語（あるいは、漢字、ローマ字）に直して伝えた。 ・会話はできるだけ英語で話した。 ・面談の際、通訳を頼む。

⑦ 保護者に対する配慮事項と保護者の気になる行動の解決との関連について

保護者に対する配慮事項と保護者の気になる行動との関連をクロス集計し、両者の関連性を見た（表 17-1 から表 17-7）。しかし、全ての気になる行動に対して、いずれの配慮事項においても未解決の割合が 6 割以上を占め、配慮事項による違いが識別できなかった。

表 17 - 1 保護者への配慮と保護者の気になる行動（ア）の解決との関連

問 4 の項目	問 3 ア．幼稚園の決まり（欠席連絡の必要性等）が分からない					
	N	2 カ月以内	4 カ月以内	6 カ月以内	6 カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	81	1.2	6.2	6.2	7.4	79.0
イ．子供の様子や連絡等、個別の働き掛けを行った	204	5.9	7.8	6.9	9.3	70.1
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	204	5.9	7.8	6.9	9.3	70.1
エ．伝達事項について、イラストなどでの表示を多くした	142	5.6	7.7	9.2	10.6	66.9
オ．他の保護者から声を掛けるように促した	132	4.5	9.8	7.6	10.6	67.4
カ．サポートする人・通訳を頼んだ	102	4.9	11.8	7.8	8.8	66.7
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした	191	6.3	7.9	6.3	9.4	70.2
ク．様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	57	1.8	10.5	7.0	8.8	71.9

ケ．保護者会等で当該保護者の国の文化や生活に関することを話題にした	45	11.1	6.7	4.4	6.7	71.1
-----------------------------------	----	------	-----	-----	-----	------

表 17 - 2 保護者への配慮と保護者の気になる行動（イ）の解決との関連

問 4 の項目	問 3 イ．園だより等の印刷物の内容が伝わらない					
	N	2 カ月以内	4 カ月以内	6 カ月以内	6 カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	93	6.5	4.3	2.2	8.6	78.5
イ．子供の様子や連絡等、個別の働き掛けを行った	235	4.3	5.1	4.3	11.5	74.9
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	236	4.2	5.1	4.2	11.4	75.0
エ．伝達事項について、イラストなどでの表示を多くした	165	5.5	5.5	3.6	12.7	72.7
オ．他の保護者から声を掛けるように促した	154	5.2	5.2	3.9	13.0	72.7
カ．サポートする人・通訳を頼んだ	118	5.9	4.2	1.7	14.4	73.7
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした	218	4.1	4.1	4.1	12.4	75.2
ク．様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	68	1.5	4.4	2.9	11.8	79.4
ケ．保護者会等で当該保護者の国の文化や生活に関することを話題にした	53	3.8	5.7	3.8	9.4	77.4

表 17 - 3 保護者への配慮と保護者の気になる行動（ウ）の解決との関連

問 4 の項目	問 3 ウ．幼児の育ちや生活の様子を伝えられない					
	N	2 カ月以内	4 カ月以内	6 カ月以内	6 カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	88	8.0	3.4	6.8	5.7	76.1
イ．子供の様子や連絡等、個別の働き掛けを行った	203	5.4	6.4	9.9	6.9	71.4
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	205	5.4	6.3	10.2	6.8	71.2
エ．伝達事項について、イラストなどでの表示を多くした	145	4.8	7.6	10.3	9.0	68.3
オ．他の保護者から声を掛けるように促した	132	5.3	5.3	9.8	9.8	69.7
カ．サポートする人・通訳を頼んだ	113	6.2	5.3	10.6	9.7	68.1
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした	194	4.6	5.7	9.8	7.2	72.7
ク．様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	60	1.7	5.0	10.0	10.0	73.3
ケ．保護者会等で当該保護者の国の文化や生活に関することを話題にした	45	4.4	4.4	13.3	11.1	66.7

表 17 - 4 保護者への配慮と保護者の気になる行動（エ）の解決との関連

問 4 の項目	問 3 エ．時間感覚に幅があり、登園、降園の送迎が早過ぎたり、過ぎたりする					
	N	2 カ月 以内	4 カ月 以内	6 カ月 以内	6 カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	48	4.2	2.1	12.5	4.2	77.1
イ．子供の様子や連絡等、個別の働き掛けを行った	112	5.4	5.4	8.9	6.3	74.1
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	114	5.3	6.1	8.8	6.1	73.7
エ．伝達事項について、イラストなどでの表示を多くした	83	4.8	6.0	9.6	7.2	72.3
オ．他の保護者から声を掛けるように促した	79	3.8	7.6	8.9	8.9	70.9
カ．サポートする人・通訳を頼んだ	61	6.6	9.8	11.5	8.2	63.9
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした	107	5.6	5.6	8.4	6.5	73.8
ク．様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	34	5.9	5.9	8.8	5.9	73.5
ケ．保護者会等で当該保護者の国の文化や生活に関することを話題にした	26	3.8	7.7	7.7	3.8	76.9

表 17 - 5 保護者への配慮と保護者の気になる行動（オ）の解決との関連

問 4 の項目	問 3 オ．食習慣・食文化（弁当に適切な食材の選択等）の違いに戸惑う					
	N	2 カ月 以内	4 カ月 以内	6 カ月 以内	6 カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	65	9.2	6.2	6.2	7.7	70.8
イ．子供の様子や連絡等、個別の働き掛けを行った	159	7.5	8.2	5.0	6.3	73.0
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	157	7.6	8.3	5.1	5.7	73.2
エ．伝達事項について、イラストなどでの表示を多くした	113	8.0	8.0	6.2	7.1	70.8
オ．他の保護者から声を掛けるように促した	112	7.1	8.9	3.6	7.1	73.2
カ．サポートする人・通訳を頼んだ	87	8.0	8.0	5.7	9.2	69.0
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした	152	7.2	8.6	4.6	6.6	73.0
ク．様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	46	6.5	6.5	2.2	6.5	78.3
ケ．保護者会等で当該保護者の国の文化や生活に関することを話題にした	37	10.8	2.7	5.4	2.7	78.4

表 17 - 6 保護者への配慮と保護者の気になる行動（カ）の解決との関連

問 4 の項目	問 3 カ．病気や怪我など緊急の連絡内容が伝わらない					
	N	2 カ月 以内	4 カ月 以内	6 カ月 以内	6 カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	65	9.2	1.5	7.7	6.2	75.4
イ．子供の様子や連絡等、個別の働き掛けを行った	135	8.9	5.9	5.2	7.4	72.6
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	136	8.8	5.9	4.4	7.4	73.5
エ．伝達事項について、イラストなどでの表示を多くした	101	9.9	6.9	5.0	8.9	69.3
オ．他の保護者から声を掛けるように促した	101	8.9	5.9	3.0	8.9	73.3
カ．サポートする人・通訳を頼んだ	83	10.8	7.2	4.8	8.4	68.7
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした	130	8.5	6.2	5.4	7.7	72.3
ク．様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	46	6.5	6.5	6.5	8.7	71.7
ケ．保護者会等で当該保護者の国の文化や生活に関することを話題にした	33	9.1	3.0	6.1	6.1	75.8

表 17 - 7 保護者への配慮と保護者との気になる行動（キ）の解決との関連

問 4 の項目	問 3 キ．日本人保護者との交流が少ない					
	N	2 カ月 以内	4 カ月 以内	6 カ月 以内	6 カ月超	未解決
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	70	7.1	2.9	10.0	8.6	71.4
イ．子供の様子や連絡等、個別の働き掛けを行った	195	3.1	7.2	6.7	8.7	74.4
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	199	3.5	6.5	6.5	8.5	74.9
エ．伝達事項について、イラストなどでの表示を多くした	139	4.3	7.9	6.5	11.5	69.8
オ．他の保護者から声を掛けるように促した	127	4.7	7.9	6.3	10.2	70.9
カ．サポートする人・通訳を頼んだ	94	4.3	8.5	7.4	10.6	69.1
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした	183	3.3	7.1	7.1	8.7	73.8
ク．様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	53	3.8	9.4	7.5	13.2	66.0
ケ．保護者会等で当該保護者の国の文化や生活に関することを話題にした	40	5.0	10.0	7.5	15.0	62.5

⑧他の幼児への影響について

学級の幼児が外国人幼児と関わる中でどのような影響を受けたかについて他の幼児の姿を見ると、「とても見られた」「見られた」を合わせた割合は、「ウ. 言葉が分からなくても、遊びの中で自然に交わる姿が多く見られるようになった」が 93.8%、「エ. 困っている様子を見ると、助けようとする姿が多く見られるようになった」90.4%、「イ. 外国人幼児等の言葉に興味を持つようになった」56.8%である。

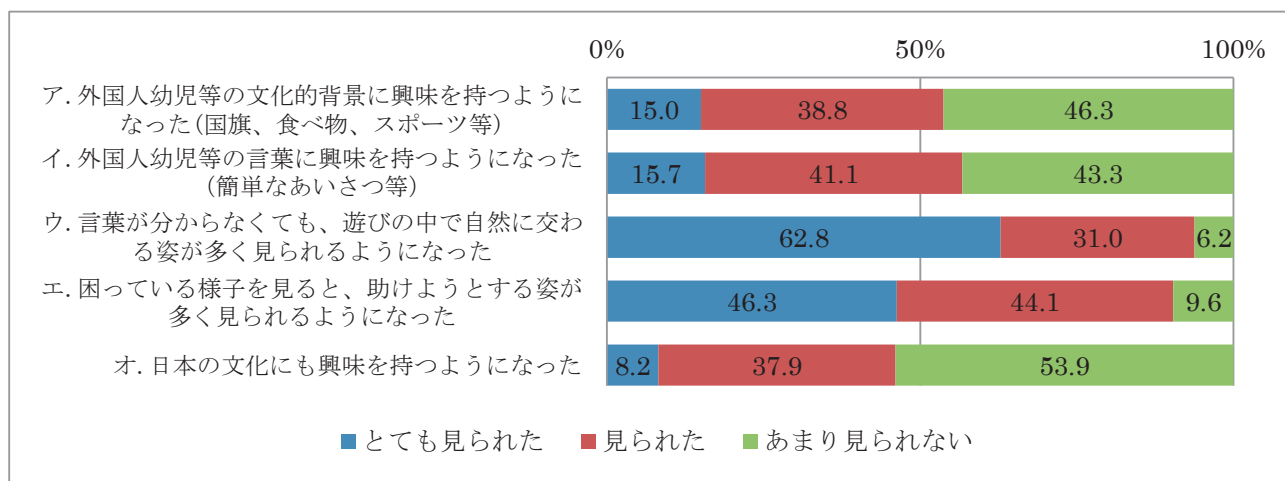


図 8 他の幼児への影響 (%)

学級の幼児への影響に関する自由記述を見ると、言葉や文化の受け止めについての内容が挙げられている。

表 18 学級の幼児への影響についての自由記述の主な内容

- ・子供たちは言葉が違って仲良く遊ぶ。この力は素晴らしいと思う。
- ・子供にとっては言葉の壁など、それ程心配することもない。
- ・保護者が使う簡単な英語を覚えて話し掛けていた。
- ・外国人幼児の国の歌と一緒に歌うようになった。
- ・親子で日本での生活を楽しんでいた。

⑨外国人幼児への指導上の配慮点と学級の他の幼児への影響

問 2 の外国人幼児への指導上の配慮点を問 5 の他の幼児への影響について、クロス集計し、指導上の配慮点がどの項目に効果があったかを見ることにした。

学級の中で「ア. 外国人幼児等の文化的背景に興味を持つようになった(国旗、食べ物、スポーツ等)」他の幼児の姿が「とても見られた」割合が高かった教師の配慮点は、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」31.6%、「ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」28.6%、「ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」19.9%である。

他の幼児への影響が「あまり見られない」割合が高かった配慮点は、「ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」44.0%、「イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」42.3%、「キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした」40.4%である。

表 19-1 外国人幼児への指導上の配慮点と学級の他の幼児への影響（ア）との関連（％）

問2の項目	問5 ア．外国人幼児等の文化的背景に興味を持つようになった（国旗、食べ物、スポーツ等）			
	N	とても見られた	見られた	あまり見られない
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	156	19.9	45.5	34.6
イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	279	15.8	41.9	42.3
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	293	15.4	40.6	44.0
エ．話したり表示したりするときに、イラストなどででの表示を多くした	207	17.4	46.4	36.2
オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	193	17.1	44.6	38.3
カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	157	18.5	43.3	38.2
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	275	17.1	42.5	40.4
ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	91	28.6	52.7	18.7
ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	79	31.6	54.4	13.9

「イ．外国人幼児等の言葉に興味を持つようになった（簡単な挨拶等）」について、他の幼児に「とても見られた」割合が高かった配慮点は、「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」34.2％、「ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」30.8％、「ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」23.7％である。

他の幼児への影響が「あまり見られない」割合が高かった配慮点は、「ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」40.8％、「イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」39.2％、「キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした」38.7％である。

表 19-2 外国人幼児への指導上の配慮点と学級の他の幼児への影響（イ）との関連（％）

問2の項目	問5 イ．外国人幼児等の言葉に興味を持つようになった（簡単な挨拶等）			
	N	とても見られた	見られた	あまり見られない
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	156	23.7	54.5	21.8
イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	278	16.9	43.9	39.2
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	292	16.8	42.5	40.8
エ．話したり表示したりするときに、イラストなどででの表示を多くした	206	18.4	45.1	36.4
オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	192	22.4	43.8	33.9

カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	156	19.2	44.2	36.5
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	274	17.5	43.8	38.7
ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	91	30.8	49.5	19.8
ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	79	34.2	51.9	13.9

「ウ．言葉が分からなくても、遊びの中で自然に交わる姿が多く見られるようになった」について、他の幼児に「とても見られた」割合が高かった配慮点は、「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」81.0%、「ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」78.0%、「ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」72.2%である。

「ウ．言葉が分からなくても、遊びの中で自然に交わる姿が多く見られるようになった」について、どの配慮点の項目も9割以上の割合で「とても見られた」「見られた」が高い。

表 19-3 外国人幼児への指導上の配慮点と学級の他の幼児への影響（ウ）との関連（%）

問2の項目	問5 ウ．言葉が分からなくても、遊びの中で自然に交わる姿が多く見られるようになった			
	N	とても見られた	見られた	あまり見られない
ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	158	72.2	27.2	.6
イ．近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	282	66.7	31.2	2.1
ウ．日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	295	64.7	31.9	3.4
エ．話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	210	71.9	27.1	1.0
オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	197	70.6	28.4	1.0
カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	159	63.5	34.6	1.9
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	277	67.1	30.0	2.9
ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	91	78.0	20.9	1.1
ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	79	81.0	17.7	1.3

「エ．困っている様子を見ると、助けようとする姿が多く見られるようになった」について、他の幼児に「とても見られた」割合が高かった配慮点は、「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」65.8%、「ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」61.5%、「オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した」56.9%である。

「エ. 困っている様子を見ると、助けようとする姿が多く見られるようになった」について、どの配慮点の項目も、9割以上の割合で「とても見られた」「見られた」が高い。

表 19-4 外国人幼児への指導上の配慮点と学級の他の幼児への影響（エ）との関連（%）

問2の項目	問5 エ. 困っている様子を見ると、助けようとする姿が多く見られるようになった			
	N	とても見られた	見られた	あまり見られない
ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	157	54.8	42.0	3.2
イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	281	50.2	44.5	5.3
ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	294	49.3	43.2	7.5
エ. 話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	208	55.3	38.5	6.3
オ. 周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	195	56.9	39.5	3.6
カ. サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	157	52.2	42.0	5.7
キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	276	50.0	43.8	6.2
ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	91	61.5	38.5	0.0
ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	79	65.8	32.9	1.3

「オ. 日本の文化にも興味を持つようになった」について、他の幼児に「とても見られた」割合が高かった配慮点は「ク. 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」14.4%、「ケ. 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」12.7%、「オ. 周囲の友達から外国人幼児に声を掛けるように促した」11.0%である。他の幼児への影響が「あまり見られない」割合が高かった配慮点は「ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」53.1%、「キ. 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした」51.5%「イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った」51.1%である。

表 19-5 外国人幼児への指導上の配慮点と学級の他の幼児への影響（オ）との関連（%）

問2の項目	問5 オ. 日本の文化にも興味を持つようになった			
	N	とても見られた	見られた	あまり見られない
ア. 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	153	9.2	45.1	45.8
イ. 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	278	7.9	41.0	51.1
ウ. 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	290	7.9	39.0	53.1
エ. 話したり表示したりするときに、イラストなどでの表示を多くした	205	10.7	43.4	45.9

オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	191	11.0	45.5	43.5
カ．サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）	156	9.6	45.5	44.9
キ．学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	274	8.8	39.8	51.5
ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	90	14.4	53.3	32.2
ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	79	12.7	62.0	25.3

幼児への影響に関する全ての項目と配慮点の関連を見てみると、「ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」と「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」の配慮点が幼児への影響の1位と2位の高い割合を占めている。第3位には「ア．「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」と「オ．周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した」である。

幼児への影響と配慮点との関連の全体を通してみると、「とても見られた」「見られた」を合わせて見ると、どの配慮点についても「ウ．言葉が分からなくても、遊びの中で自然に交わる姿が多く見られるようになった」「エ．困っている様子を見ると、助けようとする姿が多く見られるようになった」は8割から9割の影響が見られた。

「ク．教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」について、「ア．外国人幼児等の文化的背景に興味を持つようになった（国旗、食べ物、スポーツ等）」については81.3%、「イ．外国人幼児等の言葉に興味を持つようになった（簡単な挨拶等）」80.2%、「オ．日本の文化にも興味を持つようになった」は67.8%と他の配慮点より影響があった。

「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」について、「イ．外国人幼児等の言葉に興味を持つようになった（簡単な挨拶等）」86.1%、「ア．外国人幼児等の文化的背景に興味を持つようになった（国旗、食べ物、スポーツ等）」については86.0%、「オ．日本の文化にも興味を持つようになった」は74.7%と他の配慮点より影響があった。

⑩外国人幼児への支援

幼稚園等における各支援が有ると回答した割合は、「ア．母語を話せる人が通訳してくれる」44.4%、「イ．外国人幼児等の国の文化や伝統についての情報提供や研修」12.5%、「ウ．外国人幼児等を受け入れるための言語や配慮などを学ぶ場や機会」8.8%である。

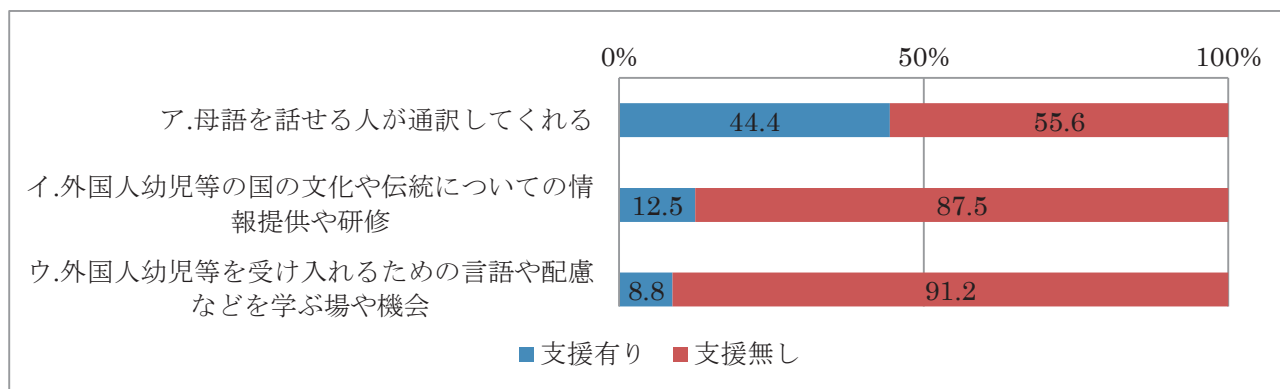


図9 外国人幼児への支援の有無 (%)

各支援の提供者の割合をみると、「ア. 母語を話せる人が通訳してくれる」は保護者が76.4%、行政が29.5%、地域が10.0%であった。

「イ. 外国人幼児等の国の文化や伝統についての情報提供や研修」は、保護者が47.5%、行政が33.3%、地域とNPOが7.5%であった。

「ウ. 外国人幼児等を受け入れるための言語や配慮などを学ぶ場や機会」は、行政が61.5%、保護者の支援は26.9%ある。地域は11.5%である。

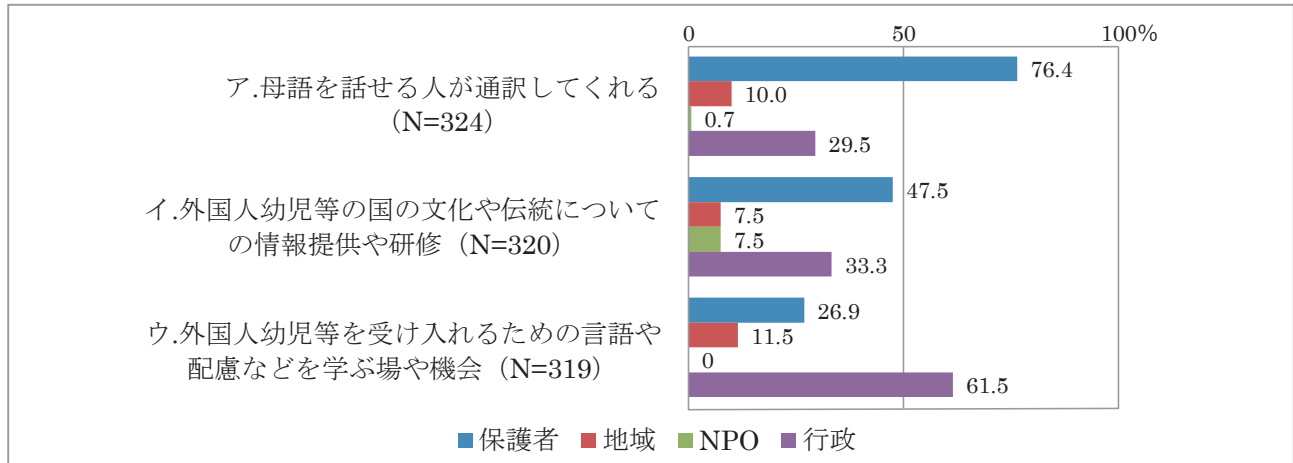


図 10 支援の提供者 (%)

外国人幼児への支援に関する自由記述を見ると (表 20)、同じ国の保護者同士の教え合いといった「保護者の支援」、園だより、配布物等の翻訳や日本語サポート指導といった「行政からの支援」、園の概要説明 (入園時) に通訳ボランティアの支援といった「NPO / 地域からの支援」、職員同士の学び合い、自発的な学び等といった「教職員の工夫」の4つのカテゴリーに分類された。

表 20 外国人幼児等への支援に関する自由記述の主な内容

カテゴリー	記述例
保護者の支援	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ国の保護者同士の教え合い。 ・外国人保護者の友人 (日本人) と担任が連絡を取り合った。 ・共通語となる英語による通訳・交流。 ・外国人保護者を含めた保護者間の交流会。 ・積極的に父母会に参加して仲良くした。
行政からの支援	<ul style="list-style-type: none"> ・園だより、配布物等の翻訳 ・日本語サポート指導 ・個人面談等必要なときに通訳派遣 (入園面接時等) ・月に1、2回程度行政から通訳の方が来る。 ・市からの委託を受けている団体。
NPO / 地域からの支援	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO が園の概要説明 (入園時) のみ通訳ボランティアが来てくれた。 ・地域の大学が作った幼稚園・保育園ガイドブックを提供された。 ・地域の企業からの支援が得られる。
教職員の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・職員の中に外国語を話せる人がいる。職員同士の学び合い、自発的な学び等。 ・外国人保護者が自主的に通訳できる人を見つけてきたり、周りの保護者や担任が母語を自主的に勉強している。 ・母親に教会のボランティア活動等、身近に日本語が学べる場を知らせる。

⑪ 幼稚園等が必要と考える支援について

各支援に対する優先順位の回答の割合を見ると、1位の割合は、「ア. 園行事（健康診断、保護者会等）や必要な時に応じた通訳の派遣」36.4%、「エ. 外国人幼児等の指導に関わる補助者」31.8%、最も優先順位の低いのは、「イ. 日本の文化や伝統についての研修」1.7%である。優先順位としては、「ア」「エ」「オ」「ウ」「イ」の順である。

上位の「ア」「エ」「オ」は通訳、アドバイザー等の人材支援を要望し、4位以下は「ウ」「イ」の研修となっている。

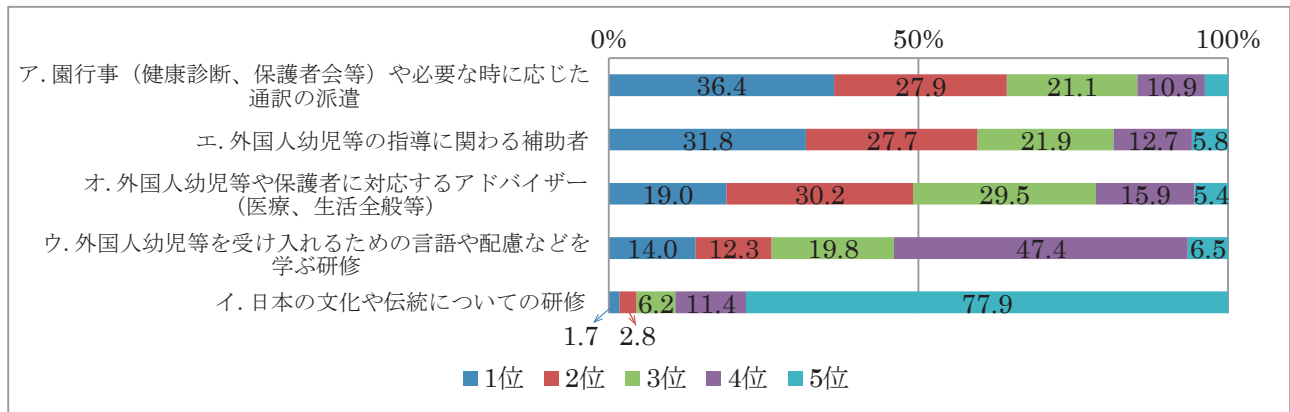


図 11 幼稚園等が必要と考える支援に対する優先順位（%）

（2）行政対象質問紙調査

1) 対象地域の市区町村の外国人の在留状況

①外国人比率（平成 28 年 4 月現在）

在留外国人比率（%）の平均は、表 21 の通りである。

表 21 地域別の在住外国人比率（%）の平均

地域	集住地域	都市型分散地域	少数地域	合計
N	64	126	21	211
平均値	2.1	1.8	0.5	1.7
標準偏差	2.0	2.6	0.3	2.3

②各施設（幼稚園、保育所、認定こども園）に在籍している外国人幼児の人数把握状況

幼稚園等における外国人幼児の在園状況について、集住地域は都市型分散地域より把握率が高く、幼稚園、保育所、認定こども園の把握率を比べると、保育所の把握率が高い。

表 22 外国人幼児の在園数を把握している教育委員会の割合（%）

地域	幼稚園	保育所	認定こども園
集住地域	57.1 (N= 56)	76.6 (N= 64)	59.4 (N= 32)
都市型分散地域	26.3 (N=118)	35.8 (N=123)	19.3 (N= 88)
少数地域	70.6 (N= 17)	75.0 (N= 20)	66.7 (N= 15)
合計	39.3 (N=191)	52.2 (N=207)	34.1 (N=135)

2) 外国人幼児に対する支援について

①外国人幼児やその家庭への支援

外国人幼児や家庭への支援の実施率を見ると（表 23）、全体としては、3割以下の実施率であった。集住地域と都市型分散地域を比較すると、「1. 子育てに関する情報（広報誌、HP等）を多言語で紹介している」ではほぼ同程度だったが、「2. 就園や子育てについて、外国人専用の相談窓口を設置している」、「3. 就園に関する情報案内（園の概要、入園手続きの資料等）を多言語で作成している」、「4. 通訳や翻訳等の手助けをする NPO 法人等の支援団体を紹介している」については、集住地域の方が高かった。

表 23 外国人幼児や家庭への支援の実施率

項目	集住地域 (N=67)	都市型分散 地域 (N=128)	少数地域 (N=21)	合計 (N=216)
1. 子育てに関する情報（広報誌、HP等）を多言語で紹介している	28.40	32.00	4.80	28.20
2. 就園や子育てについて、外国人専用の相談窓口を設置している	19.40	5.50	0.00	9.30
3. 就園に関する情報案内（園の概要、入園手続きの資料等）を多言語で作成している	35.80	15.60	0.00	20.40
4. 通訳や翻訳等の手助けをする NPO 法人等の支援団体を紹介している	22.40	17.20	4.80	17.6

②外国人幼児が在籍する幼稚園等への支援について

外国人幼児が在籍する幼稚園等への支援の実施率を見ると、全体的に低調であった。行政が行うほとんどの支援は、集住地域で実施率が高い。さらに保育所の実施率が高い。教員に向けての研修が行われている割合は幼稚園が高い。

表 24 外国人幼児が在籍する幼稚園等への支援の実施率

項目	種別	集住地域	都市型分散 地域	少数地域	合計
1. 教員等を対象に、外国の文化、習慣等を学ぶ研修を実施している	幼稚園	5.4 (N=56)	6.0 (N=116)	0.0 (N=17)	5.3 (N=189)
	保育所	4.7 (N=64)	2.5 (N=121)	0.0 (N=20)	2.9 (N=205)
	認定こども園	2.9 (N=35)	2.3 (N=86)	0.0 (N=15)	2.2 (N=136)
2. 外国人幼児等に対する指導の参考となる資料（指導資料、外国語会話集等）を作成している	幼稚園	1.8 (N=56)	1.7 (N=116)	0.0 (N=17)	1.6 (N=189)
	保育所	4.7 (N=64)	3.3 (N=120)	0.0 (N=20)	3.4 (N=204)
	認定こども園	2.9 (N=56)	2.4 (N=116)	0.0 (N=17)	2.2 (N=189)

3. 園や保育所の要請に応じて外国人幼児等に対応するための教員等の加配を実施している	幼稚園	8.9 (N=56)	0.0 (N=116)	0.0 (N=17)	2.6 (N=189)
	保育所	9.4 (N=64)	0.8 (N=121)	0.0 (N=20)	3.4 (N=206)
	認定こども園	5.9 (N=34)	0.0 (N=86)	0.0 (N=15)	1.5 (N=135)
4. 園や保育所の要請に応じて通訳ボランティア等を派遣している	幼稚園	19.6 (N=56)	12.1 (N=116)	0.0 (N=17)	13.2 (N=189)
	保育所	28.1 (N=64)	6.6 (N=121)	0.0 (N=20)	12.7 (N=205)
	認定こども園	17.6 (N=34)	7.0 (N=86)	0.0 (N=15)	8.9 (N=135)
5. 園や保育所の配布物を要請に応じて多言語に翻訳している	幼稚園	26.8 (N=56)	10.3 (N=116)	0.0 (N=17)	14.3 (N=189)
	保育所	35.9 (N=64)	12.4 (N=121)	0.0 (N=20)	18.5 (N=205)
	認定こども園	17.6 (N=34)	9.3 (N=86)	0.0 (N=15)	10.4 (N=135)

③地域との連携について

地域の連携・支援については、集住地域での実施率が高い。

通訳や翻訳などの支援は、都市型分散地域も他の支援策に比べて、実施率が高い。

表 25 地域との連携・支援について、地域別実施率（％）

項 目	集住地域 (N=67)	都市型分散 地域 (N=127)	少数地域 (N=21)	合計 (N=215)
1. 外国人幼児等の家庭と地域との交流を促進している（子供会、祭り、イベント等）	17.9	11.8	0.0	12.6
2. 通訳や翻訳などについて、通訳者を派遣するなどして外国人をサポートしている（人材バンク、ネットワーク等）	20.9	14.2	0.0	14.9
3. 外国人のために医療機関との連携をしている（医療機関について多言語での情報配信、通訳者等付き添いの配置等）	10.4	8.7	0.0	8.4
4. 外国人幼児等の家庭を支援するNPO法人等支援団体の活動の推進をしている（団体名、活動内容、連絡先の紹介等）	11.9	6.3	4.8	7.9
5. 災害等緊急時の対応について、外国人対応の連絡窓口を設置している	10.4	7.1	0.0	7.4

④ 行政支援の成果と課題について

行政支援の成果と課題に関する自由記述（表 26）を見ると、成果については「日本語習得支援のための授業」と「幼稚園等への通訳等の派遣」といった 2 つのカテゴリー、課題については、「支援全般の拡充」、「文化や言葉のギャップ解消」、「人材確保」の 3 つのカテゴリーに分類された。

表 26 行政が行っている支援の成果と課題についての自由記述の主な内容

	カテゴリー	記 述 例
成果	日本語習得支援のための授業	<ul style="list-style-type: none"> ・「定住外国人日本語教育推進プレクラス・プレスクール事業」を NPO 法人に委託、きめ細かな支援ができた。 ・国際理解室を設置、個別指導を実施し、成果を上げている。
	幼稚園等への通訳等の派遣	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人幼児と保護者の通訳と手紙の翻訳（ポルトガル語・スペイン語）をする臨時職員が各園に巡回、保護者との意思疎通にとっても役立っている。
課題	支援全般の拡充	<ul style="list-style-type: none"> ・本市が提供するサービスはごく限られたものである。 ・多国籍化、多言語（母語）化しており、支援の難しさを感じる。（同 6 件） ・国際化が進む中、必要となってくるのは必然であり、日本語能力が十分でない外国人への支援体制を構築する必要がある。 ・保育所等に通っていくには、より日常的な支援体制が必要と感じる。 ・外国人幼児等家庭支援（情報誌の作成や窓口の設置など）を行っているが、今後は全庁的に広めていくことが課題 ・日本語指導が必要な子供が在籍する学校園に、申請に基づいて母語を話すことが出来る支援員を派遣しているが、園を対象にした支援が十分でない。
	文化や言葉のギャップ解消	<ul style="list-style-type: none"> ・外国籍の園児の数が増えてきているため、保護者とのコミュニケーションが難しい。 ・文化や言葉の違いのために無断欠席・遅刻、連絡が付かない、施設からの連絡が通じないなどの課題がある。 ・文化の違い（朝食を食べない、しつけができていない等）により、様々な課題が発生するため対応が困難。 ・通訳や翻訳の訳し方に委ねられるため、正しく訳されているか、園長も判断できず、誤まって伝わった時等、トラブルが生じやすい。
	人材確保	<ul style="list-style-type: none"> ・通訳や翻訳ができる人材が国や言葉によって限られてしまうため、募集をしても、見つかりにくい。（同 5 件） ・乳幼児の子育て対象者が少なく、手厚い支援ができていない状況である。
	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・発達に遅れがある外国人幼児の発見と保護者への対応がとても難しい。 ・外国人幼児が在籍する状況があれば、支援を検討していきたい。 ・地域連携については、担当課が違うので、窓口が分かりにくく、支援の周知が難しい。 ・私立幼稚園は都道府県が管轄、市区町村では把握できていないことが多い。

3 考察

日本における外国人の居住比率の高い集住地域の3府県、都市型分散地域4都県、及び外国人の居住比率の低い1県の市区町村を対象にした質問紙調査の集計結果をまとめると、以下のことが言える。

(1) 幼稚園に関する結果の考察

1) 調査対象地域における外国人幼児の状況について

① 調査対象地域では、2園に1園は外国人幼児が在籍している。

外国人居住比率が多い調査対象地域の幼稚園等の2園に1園は外国人幼児等が在籍している。外国人幼児が在籍している幼稚園等における外国人幼児の在籍人数の平均は、4.7人である。

② 調査対象地域では、ほとんどの幼稚園等が外国人を受け入れている。

平成26年度から平成28年度(9月まで)の間に、外国人幼児を受け入れた園の割合は、東京が最も高く93.9%であった。次いで群馬71.6%、愛知70.1%、神奈川65.0%と続く。在籍数の一番少ないのは、岩手25.9%である。

東京の割合が突出しており、ほとんどの幼稚園等が外国人を受け入れている。この突出した東京を除いて集住地域、都市型分散地域別に見ると、集住地域は、63.0%から71.6%に対し、都市型分散地域は、50.0%から65%になり、集住地域の方が外国人幼児を受け入れている園の割合が若干多い。

③ 調査対象地域では、1園に多様な国の外国人幼児が在園している。

平成28年度は、在籍している外国人幼児の国別の数の最大値(平均値)は、集住地域の愛知は7か国(2.0)、群馬8か国(2.4)、滋賀3か国(1.6)、都市型分散地域の東京9か国(3.2)、神奈川7か国(3.0)、大阪5か国(1.8)、福岡4か国(1.7)である。1園に多様な国の外国人幼児が在園していることが分かる。

④ 母語が同じ幼児の在籍率については、集住地域と都市型分散地域との差はない。

集住地域(多数・同一国籍型)群馬、愛知、滋賀と都市型分散地域(多数・多国籍型)東京、神奈川、大阪、福岡を比較したところ、在籍している外国人幼児の国別数の最大値については、集住地域と都市型分散地域と2つに分けた場合、地域の差は見られなかった。

また、母語が同じ幼児の在籍状況については、東京が特に78.9%と突出しているが、ほかの府県には大きな差異はなかった。

本研究の前提として、同国(母語)の人がいることで、幼稚園等の指導上の困り感に特徴があると考えたが、集住地域と都市型分散地域の外国人幼児の受け入れ状況には大きな差はなく、地域を分けて分析・考察する必要はないようである。

⑤ 東京と神奈川の在籍状況は、都市型の典型と考えられる。

東京の平均は6.2人、国数は平均3.2か国であり、神奈川は、7.4人、3.0か国である。国数の最大値は、東京9か国、神奈川7か国である。母語が同じ幼児の在籍状況については、東京が78.9%、神奈川が57.4%で平均の56.2%を超えている。

このような状況から、東京と神奈川については、都市部のいろいろな地域の幼稚園等に多様な国の幼児が複数在籍している状況となっており、都市型分散地域の典型と考えられ

る。なお、平均在園児数が最も高い神奈川については、在園児の多くが外国人である幼稚園からの回答が含まれていることによる影響で、平均値を押し上げていると考えられる。

2) 外国人幼児を受け入れた幼稚園における指導上の課題と配慮について

① 教師の最も気になったこと（困り感）は、幼児に指示が伝わらないことである。

教師が、入園当初の様子について気になった幼児の姿として「よく見られた」のは、「教職員からの指示が分からない」が 59.6%で、最も高かった。次に気になった行動は、「絵本に興味を持たない、楽しめない」29.1%、及び「歌うことに興味を持たない、楽しめない」26.3%「列に並んだり、順番を待ったりしない」28.5%「話をしようとしなない」26.6%と続く。

これらについて、教師が気になったことの順位を尋ねたところ、「教職員からの指示が分からない」が 60.3%で最も高く、次いで、「話をしようとしなない」が 13.6%、「列に並んだり、順番を待ったりしない」7.5%である。

② 気になる度合いは、教師の発達観や期待感に影響される。

入園当初の様子について気になった幼児の姿について「よく見られた」、「見られた」を合わせて見る中で、年齢差が見られたのは、「教職員からの指示が分からない」で、4、5歳は約 90%で、3歳児は約 80%で年齢差が見られた。

また、「自分の使った物は片付けるが皆で使った物は片付けない」については、3歳は約 40%、4歳児は約 50%、5歳児は約 60%で、年齢によって差が見られた。

上記の2項目に関する年齢差については、実際の幼児の姿に対する教師の発達観や期待感が反映されていることが推察できる。

③ 入園当初に気になった姿が概ね見られなくなり、安定するのは半年くらいである。

気になる姿が見られなくなるまでの期間を尋ねたところ、「友達と遊ばない」だけは2カ月以内に約 30%が見られなくなり、4カ月以内に約 40%、6カ月以内に 55%が見られなくなっている。

また、教師の気になることのトップ3である「教職員からの指示が分からない」「話を聞こうとしなない」「列に並んだり、順番を待ったりしない」は6カ月以内に約 50%が解決している。

このことから、教師や友達の話が分かるようになり、概ね半年くらい経つと、外国人幼児は、学級の中で安定してくると考えられる。

④ 年齢と共に言葉による伝達が複雑になるので気になった姿の未解決の割合は高くなる。

入園当初に気になった姿が見られなくなるまでの期間（年齢比較）を見ると、2カ月以内での解決率は、3歳に比べ4、5歳の解決率が高く、10%から 20%の差がある。

5歳については、言葉は分からなくても友達と遊ぶことはできるようになっていくのは、他の年齢より早く、「友達と遊ばない」の未解決率は 0%である。

しかし、「友達と遊ばない」を除く他の3項目「教職員からの指示が分からない」「話を聞こうとしなない」「列に並んだり、順番を待ったりしない」については、4カ月以内の解決率が 30%を超えているにもかかわらず、未解決率が約 50%近くあり、他の年齢より多い。このことから、言葉で気持ちを伝え合うようになっていく5歳の学級の中に入っていく外国人幼児にとって、子供同士が交わす言葉が複雑になっていること、自分が伝えたくても

伝わらない、言えないジレンマ等の難しさがあると推察される。

⑤ 外国人幼児への働き掛けとしてコミュニケーションの工夫は多様である。

日本語をゆっくり話す、近くに座る、手をつなぐ等の個別の働き掛けや当該幼児に配慮する園内体制については、ほとんどの園（約90%）で配慮をしていることが捉えられた。

また、イラストなどでの表示を多くする、周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促す、「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行う、サポートする大人が近くにいるようにするなど、コミュニケーションの方法を多様にする工夫については、約半数が行っている。

しかし、様々な外国の文化理解や言語に関する研修や、当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育活動に取入れるなどの配慮は、約30%である。

⑥ 教師の働き掛けと幼児の変容の関係には即効性の高いものと時間のかかるものがある。

教師が気になっている幼児の姿7項目と配慮点の関連を見ると、「当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」の働き掛けは7項目のうち6項目について2カ月以内に解決する割合が上位3位までに入っており、比較的即効性が高いことが読み取れる。

「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」については、7項目のうち5項目について2カ月以内に解決する割合が上位3位までに入っており、比較的即効性が高いことが読み取れる。

「サポートする大人が、近くにいるようにした（通訳者を含む）」の働き掛けについては、「話をしようとしなさい」項目が2カ月以内に解決している割合は3位になるが、その後の伸びが緩やかで、未解決率が46.7%と最も大きくなる。このことについては、通訳等のサポートする人との関係や存在と幼児が自ら話すことの育ちとの関係を深く考察する必要性を示唆している。

3) 保護者との関わりについて

① 教師が最も気になっていることは保護者に伝わらない困難感である。

保護者の姿について、教師が最も気になっているトップ3は、「園だより等の印刷物の内容が伝わらない」、「幼稚園の決まり（欠席連絡の必要性等）が分からない」、「幼児の育ちや生活の様子を伝えられない」である。保護者は全ての項目で未解決が多い。

② 教師は個別対応や園全体の協力体制によって働き掛けを工夫している。

保護者に対する教師の働き掛けのトップ3は、「日本語をゆっくり、はっきり話すようにした」、「子供の様子や連絡等、個別の働き掛けを行った」、「学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした」であった。

③ 外国人幼児の保護者の行動は変わりにくい。

保護者の気になる行動と保護者に対する配慮事項のクロス集計をし、両者の関連性を見たが、全ての気になる行動に対して、いずれの配慮事項においても未解決の割合が6割以上を占め、配慮事項による違いが識別できなかった。

保護者の個人差が大きく、配慮の一貫した有効性や差異が見い出せない。このことから、きめ細かい配慮が必要であると考えられる。

4) 学級の他の幼児への影響について

① 言葉は通じなくても一緒に遊ぶ中で、幼児同士は影響し合っている。

外国人幼児が在籍する学級で共に過ごす他の幼児たちの変容について見ると、「言葉が分からなくても、遊びの中で自然に交わる姿が多く見られるようになった」が93.8%で最も多く、「困っている様子を見ると、助けようとする姿が多く見られるようになった」が90.4%と続く。幼児たちにとって、言葉が通じなくても自然に関わる中で、互いに思いを通じさせ、困っている姿を見れば助けようとするなど、「援助性」を発揮する姿は協同性の芽生えにもつながっていくと考えられる。

② 外国の文化理解や言語に関する研修は学級の幼児の育ちにつながる有効性が高い。

幼児の変容の割合が高い教師の働きかけは、「当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」、「様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」「「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った」、「周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した」であり、これらの働き掛けの有効性が高いことが読み取れる。

「当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」、「様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」の働き掛けについては、P14の表13-1から7に示すように、他の働き掛けの度数に比べてかなり少ないが、実践すれば外国人幼児と共に園生活を過ごしている周囲の幼児の変容を促しており、実践の有効性は高いと言える。

外国人幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育活動に取入れることは、様々な外国の文化理解や言語に関する研修を受けることによって質が高まると考える。

5) 外国人幼児が在園する幼稚園等に対する支援

① 保護者が支援している割合が多いのは、「母語を話せる人が通訳してくれる」が約8割、「外国人幼児等の国の文化や伝統についての情報提供や研修」が約5割である。

② 行政が支援する割合が高いのは、「外国人幼児等を受け入れるための言語や配慮などを学ぶ場や機会」で約6割である。

③ 幼稚園等が必要と考える支援の優先順位が高いのは、「園行事（健康診断、保護者会等）や必要な時に応じた通訳の派遣」、「外国人幼児等の指導に関わる補助者」で、最も低いのは、「日本の文化や伝統についての研修」である。

幼稚園等が必要とする支援は主に通訳やアドバイザー等の人材支援を要望しており、言語や配慮を学ぶ研修や日本の文化、伝統を学ぶ研修のニーズは低い。しかし、外国人幼児への指導上の配慮点と他の幼児への影響との関連を見ると、研修の実施率は低いが実践すれば外国人幼児と共に生活する他の幼児への影響は大きく、研修の有効性が高いことから、人的配置と同様に、実践に役立つ研修が重要である。

(2) 行政機関に関する結果の考察

1) 回答地域の概要

外国人幼児の在園状況について、幼稚園では、集住地域は分散地域より把握率が高い。幼稚園、保育所、認定こども園の把握率を比べると、保育所の把握率が高い。これは入園事務を行政が行っているためと思われる。

2) 外国人幼児や家庭への支援は、集住地域の実施率が高い。

調査対象の全ての行政が行っている支援の中で、最も多くの行政が行っているのは、「子育てに関する情報（広報誌、HP等）を多言語で紹介している」ことで、全体の28.2%である。次いで、「就園に関する情報案内（園の概要、入園手続きの資料等）を多言語で作成している」、「通訳や翻訳等の手助けをするNPO法人等の支援団体を紹介している」、「就園に関する情報案内（園の概要、入園手続きの資料等）を多言語で作成している」の順である。

「子育てに関する情報を多言語で紹介している」については、都市型分散地域が最も高いが、その他の支援については、集住地域の実施率が最も高い。同国人が集団で居住している地域への支援が必要とされているからと思われる。

3) 幼稚園等への支援の内容と実施率

幼稚園等への支援の実施率は、「園や保育所の配布物を要請に応じて多言語に翻訳」、「園や保育所の要請に応じて通訳ボランティア等を派遣」、「教員等を対象に、外国の文化、習慣等を学ぶ研修」、「園や保育所の要請に応じて外国人幼児等に対応するための教員等の加配」、「外国人幼児等に対する指導の参考となる資料（指導資料、外国語会話集等）を作成」が実施されている。

「教員等を対象に、外国の文化、習慣等を学ぶ研修を実施」については、都市型分散地域が最も高いが、その他の支援については、全て集住地域の実施率が最も高い。

集住地域は外国人幼児の在籍数を把握している割合が高く、保育所からの要請に応じて支援が実施されている率が高いことが推察される。

4) 地域との連携

行政が地域との連携の内容について、実施している割合が高いのは、「通訳や翻訳などについて、通訳者を派遣するなどして外国人をサポート」、「外国人幼児等の家庭と地域との交流を促進」、「外国人のために医療機関との連携」、「外国人幼児等の家庭を支援するNPO法人等支援団体の活動の推進」、「災害等緊急時の対応について、外国人対応の連絡窓口を設置」の順であった。

全ての項目について、集住地域の割合が高かった。

5) 全体的な傾向

家庭や幼稚園等への支援について、集住地域の実施率が高い。その内容は教員の派遣、加配、指導資料、養成に応じた翻訳など、教育活動に直接関わる多様な内容になっている。支援の成果や課題で自由記述を見ると、主に言葉に関する支援が挙げられていた（表26）。日本語を話せない保護者との懇談等に、通訳のできる職員を派遣し、相互の理解を深めていることがうかがえた。教育委員会は、文化や言葉の障壁を解消するなど、支援全般の拡充とそれを担う人材確保の必要性を強く認識していることが窺えた。人材整備のための財政的措置が急務と考えられる。

IV 調査研究Ⅱ 研究協力園の事例による調査研究

調査研究Ⅰで実施した質問紙調査の対象の都府県の中から、外国人幼児が在籍している幼稚園等で、先進的な取組をしている園に面接調査を行うとともに具体的な実践事例を収集し、その成果と課題を明らかにし、幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方の示唆を得ることを目的とした。

1 方法及び調査内容

(1) 調査対象

調査研究Ⅰで実施した質問紙調査の対象の都府県①集住地域（多数・同一国籍）群馬県、愛知県、滋賀県、②都市型分散地域（多数・多国籍）東京都、神奈川県、大阪府、福岡県の中から研究協力園を選ぶ。③少数地域は除外した。

※事例の中では、研究協力園それぞれA園からI園と記載し、対象児は各園ともA児とする。

(2) 調査期間

平成28年9月から平成29年3月

(3) 調査内容

① 研究協力園に出向き、具体的に見たり聞いたりして面接調査を実施する。

園の概要、地域の実態、入園当初の対象児の様子、保護者の様子、学級の幼児の様子、教師の対応、教師の思いと指導上の留意点、幼児や保護者の課題・困難点とその改善策、園が希望することや利用したいこと等を聞き取る。

② 毎月一回のエピソード記録の事例を分析・考察し、対象児や保護者の変容から各園の指導の成果と課題を明らかにする。

2 結果

(1) 外国人集住地域のA園

1学級に複数の外国人幼児が在籍することで、同じ母語の幼児同士の関わりが多くなり、日本語を覚えたり、使ったりする必要性を感じないことが課題である。言葉が通じる安心感や母語の習得への意欲を大切にしつつ教師と外国籍適応指導助手との連携により、課題改善に向かった事例である。

園の概要	
学級数・園児数	4歳児1学級 27名 5歳児2学級 45名 計72名
外国人幼児について（現在、在籍している幼児）	17名（4歳児6名、5歳児11名）
	ブラジル連邦共和国（ポルトガル語）12名、フィリピン共和国（タガログ語）2名、ペルー共和国（スペイン語）2名、モンゴル国（モンゴル語）1名
地域・園の実態	
	<ul style="list-style-type: none">・県内に大きな工場があり、外国人の集住地域である。ここ数年の間に、A園においても、外国人幼児の入園が急増し、1学級に複数の外国人幼児が在籍する。・通園区内に外国人が経営する託児所が2園ある。そこから通う幼児が多く、幼児の送迎は託児所のスタッフのため、保護者との関わりは少ない。また、保護者の園行事の参加もほとんどない。・園の要望によって、外国籍適応指導助手（以下、「助手」という）が教育委員会より配置される。幼児と共に遊び、その中で通訳をする、昼食後少人数の外国人幼児に対して日本語指導をする、保護者向けの文書を翻訳する等の仕事を受け持っている。

◎入園当初の幼児と保護者の様子

- ・5歳A児は、前年11月にブラジル連邦共和国より来日した。入園まで集団経験はなく、入園当初は、言葉が通じないこともあり、落ち着かない。危険な行動も見られたため、常に教師が側についていた。両親は、日本語がほとんど話せない。母親は、早朝から夜までの勤務のため、A児を託児所に預けており、行事の参加も乏しいため保護者との関わりは持ちにくい。

◎助手の援助により「片付け」の意味が分かり気持ちを切り替える <5月>

A児は一人でサッカーボールを蹴って遊んでいた。教師が片付けの時間になり「終わりだよ」と言っても、やめようとしなない。教師がボールを取り上げ、絵カードを見せ、「片付けだよ」と言うと、怒り机の下にもぐってしまう。声を掛けても出てこようとしないので、助手に通訳をしてもらい、A児の話を聞いてもらう。

A児は「先生が僕のボールを取った」「意地悪した」と受け止めていて、教師の「終わり」「片付け」は通じていないことが分かった。A児は自分の思いを助手に話し、気持ちを受け止めてもらうと納得し、次の活動に移った。

入園当初、園生活の仕方（ルール）や言葉が分からず、自分のしたいことを止められる、したいことをさせてくれないという不満や、やりたくないことはしたくないという思いから、教師の話を聞かなかつたり、反抗的な態度をとったりすることが多かった。気持ちに寄り添う助手の通訳としての役割は、信頼関係を築く上でも重要だと痛感した。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・椅子に座ることや学級に入れることを無理強いせず、できることを褒めながら、園生活の仕方（ルール）が身に付けられるように促すことにした。
- ・園生活の仕方（ルール）を視覚で分かるように、写真やイラストで示したり、○×のカードを見せたりして理解を促した。
- ・ポルトガル語で挨拶したり、グループ名等をポルトガル語でも示したりして、親しみが持てるようにした。
- ・反抗的な態度が見られたため、スキンシップを図り、「あなたのことが好き」というメッセージを常に伝え、信頼関係を築くよう努めた。
- ・外国人幼児が得意なサッカー等の遊びや紙飛行機作り等の興味が持てそうな遊びを取り上げ、他の幼児との関わりが持てるようにした。
- ・助手と連携して、保護者に幼児のよい点や気になる点を伝え、保護者とも信頼関係を築くよう努めた。

◎教師が話す母語を聞いたり同じ母語の幼児と遊んだりして安心感を得る <10月>

A児等外国人幼児と日本人幼児が混ざって、サッカーをする。A児はボールを追い、園庭を走り回ると徐々に日本人幼児が遊びから抜ける。しばらくして、A児は保育室に戻ると、水道の蛇口から水を飲む。教師が「暑かったから水飲もう」と言うと、A児は頷く。教師は「アクア」と言うと、A児は「飲んだ」と答える。

棚から人気キャラクターの絵本を取り、教師に差し出す。教師は絵本を持ってゆっくりと「本貸して」と言うと、A児は同じように「本貸して」と言う。教師が本から手を離すと、B児が来て、本を引っ張る。教師は「一緒に見て」と言うと、2人は床に座り絵本を広げる。2人の真ん中にC児が来て、3人（全員外国人幼児）で絵本を見る。絵本の端に描かれているキャラクターの名前を言い、画面の中に同じキャラクターを見つけると指差し、笑い合う。

全員で縄跳びをすると声を掛けられるが、A児等3人は絵本を見ていて外に出ない。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・教師が日常的にゆっくり言葉を掛けたり、「アクア」とポルトガル語を使ったりすることで、A児も徐々に日本語を覚え、使おうとするようになった。
- ・A児の取った絵本は物語性がなく、見本と同じキャラクターを探すというゲーム感覚を楽しんでいる。絵本を通して関わっているのは、外国人幼児である。母語を素直に出せる雰囲気の中で、話し合い、通じ合うことで、安心感を感じとっていると思われる。
- ・個人面談で、託児所にはポルトガル語を教えるスタッフがいて、ワークブックを使用し勉強していること、保護者が母語を大切にしていることが分かった。
- ・縄跳びのように自分の苦手なことに対しては、教師の声は届かず、やらずに済ませようとする姿も見受けられる。

◎日本人幼児と関わるA児の姿 <11月>

園庭にサッカーコートを作ると、A児が「サッカーやりたい」とボールをけり始める。学級の友達が次々に集まっている。チームに分かれる際、日本人幼児の中に、A児と同じチームがいいと言う幼児がいる。A児は友達にパスを出したり、優しくキックしたりする。また、サッカーの好きな友達と片言ではあるが会話を交わす姿も見られる。絵本の読み聞かせの際、自分の席に座り、静かに絵を見たり、耳を傾けたりするようになる。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・絵本の読み聞かせの際、絵本の内容は理解できていないようだが、皆と同じように席に座り、静かに見ることができるようになった。園生活の仕方に慣れてきて、時と場に応じた態度がとれるようになりつつあると考えられる。
- ・運動会をきっかけに、A児は走ることが速い等の運動面のよさが認められるようになった。他者から認められることで、A児も「友達」「すごい」等と言うようになり、友達を意識したり、認めたりするようになってきている。A児にとっては、運動会が変容の節目になっている。
- ・教師は、皆ができる遊びとして意図的にサッカーを取り上げており、10月頃からは日本人幼児も加わるようになる。しかし、A児の勢いにおされて、他の幼児がサッカーから先に抜けることもあった。11月頃になると、周囲の幼児がA児のよさを認めるようになり、A児は中心となって遊びを進める一方で、友達を意識して動くようになってきている。

◎日本の伝承遊びに参加する <12月>

「あぶくたった」のわらべうた遊びをすると、外国人幼児は様子を見ていたが、楽しそうな雰囲気を感じ取ったようで、仲間に入ってきた。A児は友達と手を繋ぎ、「あぶくたったー」と歌う。「ごはんを食べてむしゃむしゃむしゃ」「歯を磨いてしゅっしゅっしゅっ」は、友達の様子を見ながら動作を付ける。繰り返し行い、教師が「今日はもう時間だから…」と言うと、残念そうな表情をする。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・「あぶくたった」のわらべうたは、外国人幼児に馴染みはないが、友達と手を繋いで輪になり同じ動作をし、同じ言葉を唱和する、日常生活の動作を言葉にする、擬音を発する等の楽しさがあり、外国人幼児も興味を示すことが分かった。

【まとめ】

① 集住地域の幼稚園では母語を意識しながら日本語を教える必要がある。

1学級に複数の外国人幼児がいることで、同じ母語の幼児同士で関わるが多く、日本語を覚えたり使ったりする必要性を感じず、友達関係が広がらないことが教師の困り感としてあげられている。

外国人幼児は母語で考え、生活しており、園の方針としては母語が基礎だと考えてい

る。母語を大切にしながら、日本語に興味を持てるように工夫している。しかし、日本で集団生活をする上で困らないように日常生活に必要な程度の日本語は理解し、活用できるようにする必要があると考え、指導している。

② 助手の役割と援助の重要性

A園の場合、園の要望により助手が配置されている。助手は、通訳としての役割を担い、教育活動に入り場面に応じて外国人幼児の思いを受け止めたり、教師の思いを適切に伝えたりすることができるメリットがある。特に、入園当初は、言葉が伝わらず不安や不満をもちやすいが、思いを受け止められることが、信頼関係を築くことにつながり大変有効である。

助手は保護者対応の役割も担い、保護者との通訳、配布物の翻訳も行っている。しかし、個人面談等に助手を通訳に入れると、複数の教師から指摘されるように感じる保護者もいるので、こうした保護者一人一人の受け止め方に配慮する必要がある。保護者が信頼している通訳を連れてくる場合には、保護者の意思を尊重し、その通訳を認める等の配慮も必要である。園の方針の下、助手等の他の教職員との連携、協力体制が重要である。

助手が配置されている園は少なく、恵まれている状況ではあるが、外国人幼児が1/4を占める中、助手の勤務が、週4日、一日4時間のため、更に手厚い配置が望まれる。

③ 教師の援助の工夫

A児の場合、入園当初は指示が分からないことで、落ち着きに欠ける行動も多いことも気になっていた。しかし、A児は運動会を通して学級の一員としての行動の仕方を学んだり、運動面のよさを認められたりした。このことから運動会が変容の節目と考えられ、その後、友達関係が広がり、教師の困り感も薄れていった。

教師が視覚に訴える標示を工夫することは、外国人幼児の理解を促す上で有効な時もあるが片付けでは有効ではない。片付けのように絵では伝わりにくいものがあることに留意する必要がある。

また、外国人幼児の母語を使って挨拶をしたり、グループ名等に用いたりすることは、外国人幼児が親しみを持つ上で有効であると同時に、日本人幼児が外国語に興味を持つきっかけともなる。

積極的にスキンシップを図り、「あなたのことが好き」というメッセージを伝えることは、その幼児自身を受容する姿勢として大切であり、他の幼児のモデルにもなっている。

外国人幼児の興味のある遊び（サッカー）を広め、日本人幼児の参加を促し、交流を図っている。このことは、外国人幼児が遊びの楽しさを味わい、友達関係を広げる上で効果があった。その一方、外国人幼児にとって馴染みのない「あぶくたった」のわらべうたは、友達と手を繋ぐ、同じ動作をする、同じ言葉を唱和する、日常生活の動作を言葉にする、擬音を発する等の楽しさがあり、外国人幼児も興味を示し、日本の伝統文化に接するきっかけになることが分かった。

(2) 多様な文化に関わる際の配慮を工夫したB園

幼稚園が保護者とのコミュニケーションに苦勞している様子を見て、周囲の保護者がいろいろな形でできることを考えて、自主的に動いてくれた事例である。

園の概要
学級数・園児数 3歳児1学級30名、4歳児1学級19名、5歳児2学級44名 計93名
外国人幼児について（現在、在籍している幼児） 5歳児A児（父：アフガニスタン）（母：アフガニスタン）両親ともペルシャ語で、日本語は挨拶ができる程度である。父親は英語が話せる。母親は簡単な英語が話せる。同じ学級に、父親がペルシャ語を母語とする幼児がいる。その他の学級にも、中華人民共和国、大韓民国、カナダ等、様々な国籍の幼児が在籍している。
地域の実態 人口の1割近くが外国籍という地域柄、いろいろな国の幼児がいるが、中華人民共和国、中華民国、大韓民国の幼児は毎年入園している。また、毎年6月から7月にかけて、インターナショナルスクールの夏休みの時期や外国から一時帰国している間に短期入園する幼児が数人いる。

◎入園当初の幼児と保護者の様子（4歳児10月）

- ・日本語をほとんど話さず、ペルシャ語を話しながら身振り手振りで表現した。
- ・身の回りの始末などは2、3日ですぐに覚え、一度覚えたことは喜んで行った。
- ・プランターの野菜を見て「わーお」と素直に感動したり、箸を使って一生懸命食べようとする姿を友達に褒められて照れたりすることがあった。
- ・好奇心が旺盛で、したいと思ったことはすぐに行動に移し、高いところに登ったり、屋上に一人で行ってしまったりすることがあった。言葉が通じないこともあり、何度論しても同じことを繰り返してしまうので、安全管理上、目が離せない状況があった。
- ・しようとしていることを止められると怒り、頑なに拒否し、言葉で伝えられず、相手を押したり、物を投げたりすることがあった。
- ・パズル、線路の製作などやり方が分かると繰り返しじっくりと取り組んだ。
- ・3週間ほど経つと、じゃんけん遊びなどが分かり、自分で加わるようになった。「おはよう」「ありがとう」「ごめんね」「できたよ」など、語彙も少しずつ増えてきた。
- ・園庭の夏みかんを取りたくて、牛乳ケースを何段も重ねて登って取ろうとする。ヒューム管を投げて取ろうとする日もあった。投げることは危ないので、言葉だけではなく、手で×と示す指導を繰り返す。物を投げた後で、教師と目が合うと、自分でも手で×を示し、うなずくようになり、してはいけないことが分かってきていた。
- ・送迎は主に母親がするが、日本語は全く話せない。父親も時々送迎する。
- ・どの学級にも外国籍の幼児がおり、外国生活経験者も多く、英語などが話せる保護者もいて、通訳を頼める保護者や自分から通訳を申し出てきてくれる保護者もいる。
- ・学級の幼児は、配慮が必要な友達の受け止めや関わりがとても優しい。助けようとしたり、少しよい姿があると「〇〇くんすごい。みんな拍手！」と褒めたりしてくれる。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ A児が入園することを事前に知らせて、温かく迎え入れる気持ちが生まれるように、子供たちと一緒にロッカーや靴箱に名前シールを張って準備した。すると、「カラー帽子を入れるところがあるね」「名札のポケットも作らなくちゃ」などと子供たちの方が必要なことが分かっている、準備をして、出会いを楽しみにしていた。

◎進級したころのA児の様子

- ・ 進級して学級編制が変わり、ようやく馴染んだ友達とも離れて、やや不安定だった。
- ・ 週に2、3日は休み、続けて登園することがあまりない。遅れて登園することが多く、欠席する際の電話連絡がない。登園した日は一人遊びをしていることが多い。

◎遅刻してバス遠足に参加できなかった<5月>

バス遠足を前に心配した教師は、降園時に手紙を渡ししながら、英語のできる保護者のサポートを受けて説明したり、保護者の職場にファクシミリ送信をした上で通訳の方に電話で確認したりするなど二重三重の手立てを講じた。しかし、当日は集合時間に遅れ、幼稚園から出発前に自宅や職場に電話をしたが、連絡が取れず、遠足には行けなかった。結局、バスが出発した15分ほど後に保護者と集合場所に来たようである。その場に残っていた海外在住経験のある保護者が、すでにバスが出発したことを英語で伝えてくれた。

A児が遠足に行けなかったことがあって、その後の遠足や行事の際に、保護者の一人が自主的に手紙の内容をイラストと簡単な英語で説明した手紙を作ってきてくれるようになった。まず教師に提案してくれる心配りに感謝し、教師からA児の保護者に見せて説明するようにした。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ 連絡がなく欠席したり、伝えたことが伝わっていなかったりすることが多く、とにかく登園してほしいこと、欠席ならばその旨を確実に連絡してほしいと願っている。そのため、保護者の職場の通訳の方に手紙をファクシミリで送信し、さらに電話で確認することを繰り返し行った。

◎事前連絡が伝わり、定刻に登園しバス遠足に参加できた<10月>

5月の遠足に行けなかったため、10月のバス遠足では、保護者の職場の通訳の方も交えた個人面談や直前の職場の通訳の方を介しての連絡など、更に丁寧に行った。周りの保護者が、集合時間や持ち物を絵にして書き出し、英語の説明を添えた手紙を作って渡してくれたこともあり、遠足当日は定刻に登園できた。保護者も笑顔で、A児も無事に遠足に参加することができた。

イラスト入りの手紙を作ってくれた保護者の好意に対して、とても感謝している様子であった。また、手紙に描かれた持ち物の中に事前に提出するものもあったが、それも確実に提出できた。

出欠席の連絡については繰り返し伝えているが、なかなか連絡がもらえない。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ 個人面談や事前に職場の通訳の方への連絡を通じて、確実に連絡が伝わるようにした。
- ・ 遠足の前にはいつも特別な手紙があるという認識になると、周りの保護者にも負担になるので、あくまでも好意であることを通訳の方を通じて伝えた。
- ・ これをきっかけに保護者同士が、分からないことがあっても互いに気軽に聞いたり助言したりできるような関係性ができるとういと思っている。
- ・ 教師は、自分の伝え方が悪いのではないかと反省していたが、この件は折に触れて職員室で話題になり、その中で、今までのいろいろな事例が話題になった。時間や約束に対する意識には国民性や文化による差があり、変える必要性を感じていないこともあるのではないかと共通理解した。
- ・ A児の気持ちを受け止め、教師との信頼関係を基盤に安心して園生活が送れるように、個別での関わりを増やすようにした。周りの幼児に対しては、A児に対する親切な姿は認めつつ、何かトラブルがあったときに、A児にも、相手の幼児にも、公平な目で見ること学級全体がA児に対して偏見を持つことのないように配慮している。
- ・ 約束したことにに対しては、それを守るよう毅然とした態度で遊びを禁止する場合には、それに替わる遊びを提案するなど指導する。一方で、一つの遊びができなくなったら次はどの遊びをするか予め決めておくことで、少しでも気持ちの切り替えがスムーズにできるように工夫している。また、A児が落ち着いて遊べる場を作り、他児とのゆるやかな関わりの中で十分に遊べるようにする工夫もしている。

<その後のA児と学級の様子>

- ・ 11月になると、自分から教師を誘って鬼ごっこなどをするようになった。教師と一緒に楽しく遊ぶことができる。しかし、片付けのときなど状況に応じて遊びを終わりにしなければならないときにも、遊びを続けたくて気持ちを押しえられないことがある。
- ・ 学級ではA児に対してとても親切な幼児が多い。言葉が分からないことを踏まえ、ジェスチャーや実物を見せることで物事を伝えようとする幼児が多い。友達が何かを教えようとしてもA児にはその意味が分からず、否定されたと思い込んで手を出してしまうこともあるため、少し距離を置いている様子の幼児もいる。

◎宗教上の配慮が実は不要だった<5歳児12月>

例年12月にはクリスマスに関連する歌や製作をしていたが、今年度はA児の宗教に配慮し、それらを控えていた。しかし、その件に関しては、個々の家庭で意識の差があると考え、保護者の職場の通訳の方を通じて確認を取ってみると、クリスマスに関する催しは家庭でも楽しんでおり、全く問題がないとのことだった。以前、近隣の寺院に散歩に出掛けた際、宗教上の理由で欠席したこともあり、配慮が必要であると思い込んでいたことに気付いた。

P T A と共催のミニコンサートに当たって、P T A に協力を依頼し、在籍する外国籍の幼児の全ての母国語の歌詞が入った「きらきら星」をアレンジしてもらい、幼児たちの前で保護者に歌ってもらった。

A児はコンサートの前は休みがちだったが、当日は登園し、保護者も他の保護者と一緒に最前列に立って歌を披露した。

＜教師の思いと指導上の留意点＞

- ・これまで、宗教上の理由で散歩の行き先に制限があったり、会食の際に必要ながあれば代替食で対応したりしていたことから、クリスマスに関する取組はできないと思い込んでいた。園が特別な配慮をしていることは、伝えなければ保護者には分からないことなので、早めに確認を取る必要があった。
- ・宗教に関しては国籍によって決まっているわけではないので、日本人の家庭も含めてそれぞれの家庭の考え方を尊重することが大事だと気付いた。

【まとめ】

- ① 守らなければならない約束事は確実に伝え、公平な対応をすることが重要である。

言葉が分からないことによる不安を教師が受け止め、一対一の関わりができる場面をつくったり、相手を思いやるモデルを示したりすることがよい友達関係の基盤をつくっていく。言葉が通じないことで、行き違いが起こることもあるが、道徳や規範意識に関することは、誰に対しても公平に対応することが学級経営の鍵である。

- ② 何か手助けできることはないかと考えてくれる保護者の力に支えられる。

教師の熱心で細やかな指導や幼児の姿、そして5月の遠足での出来事を受けて、周囲の保護者もA児親子を気に掛けており、保護者が好意でイラスト入りの手紙を作ったり、連絡事項を通訳して伝えてくれたりした。PTAが中心になり、コンサートでいろいろな国の言葉で「きらきら星」の歌を保護者が披露したことは、幼児にとっても保護者にとっても心温まる機会となった。その中で、A児の保護者も周りに感謝する姿があり、保護者同士の関係性ができつつある。外国で暮らす人々への思いやりの心を大切にした指導や配慮が、幼児や保護者にも広がっていったと思われる。

主体的に支援をしてきている保護者の協力に対して、該当の保護者が感謝の気持ちを抱きながら園生活を送れるように常に働き掛けていかななくてはならない。そして園の全教師の中からもこのような支援に対しての感謝を伝えていくことを忘れてはならない。

- ③ 限られた風習への知識に捉われることなく、個別な対応が必要になる。

いろいろな国の文化や習慣についての知識をもっていることは大切であるが、一概には判断できないこともあることが分かった。行事や食などに関わる文化的な配慮点については、入園当初にまとめて確認しておくことが有効であると思われる。

国による風習の違いと思い込まず、その家庭が何を重視しているのか、個別に対応しながら、外国人幼児も安心して過ごせる方法を一緒に探っていくことが大切である。

(3) 多くの外国人幼児が在籍し、保護者同士の支援の力が働くC園

困っていたら助けよう、できることは率先して取り組んでみようとす保護者同士の助け合いの風土がある幼稚園の事例である。

園の概要	
学級数・園児数	4歳児1学級25名 5歳児1学級34名 計59名
外国人幼児について	(現在、在籍している幼児) 4歳児A児(父:母 中華人民共和国)母親とA児は日本語は全く話せない。 その他に中華人民共和国、フィリピン共和国、インドネシア共和国、チュニジア共和国等の国から、6人の幼児が在籍している。
地域の実態	下町情緒溢れる地域である。保護者は、教育熱心で楽しんで子育てに取り組んでいる。保護者同士の関わりが深い。保護者間で新しい保護者へは、園の教育について知らせ、良い意味の「おせっかい」をする保護者が多い。外国籍の保護者に対しても同様である。毎年多くの外国人幼児が在籍している。外国人居住者は、各家庭仕事も違い、国も違い、マンションに核家族で住んでいるケースが多い。近所に祖父母が住み、園児の面倒や、母親へ通訳しながら関わる家庭もある。

◎入園当初のA児の様子

- ・日本語は全く話せない。
- ・走り回る、机の上に上るなど落ち着かない状態が続く。絵本や紙芝居などは、言葉が分からないので見ようともせず、動き回っていた。
- ・いろいろな遊びに興味を持つ。欲しい、やりたいという思いを行動で表し、友達遊びの中に飛び込んで行き、奪ったり、倒したりして、注意されることが多くなった。
- ・いけないことや危ないことを「ダメ」とばかり言われるが、それはなぜかが伝わらなかったが、7月ごろから落ち着いてきて、集まって、座るようになり挨拶はするようになった。
- ・身の回りのこと、自分のことは全てできる。他の子供の様子を見て動ける。

◎入園当初A児の母親の様子

- ・保護者会等に、母親は内容が分からないまま参加している。同じ国の他の保護者が傍にいて、通訳をしてくれていた。降園時の連絡事項なども同じ保護者が通訳をしてくれていたが、6月ごろになると通訳を続けていてくれた保護者は少し疲れたのか、距離を置くようになった。
- ・教師は身振り手振りでその日のことを報告するが、母親は自分にはよく分からないので「大丈夫」と話を打ち切り、日本語が少しだけ分かる父親が週2日は家に居るので、いつでも電話してと言う。
- ・9月からは、教師と話していて分からないことがあると「携帯翻訳」のアプリを見せて自分でも理解しようとするようになった。
- ・家庭にはテレビがなく、日本語に触れる機会がほとんどない。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・入園当初A児は、動き回っていた。A児と同じように動き回ったりする幼児も数名いたが、学級全体が落ち着くようにすることに専念し、追いかけたり、留めたりは無理にしなかった。その間に他の幼児の落ち着きを確保するようにした。
- ・A児は破壊的な行動や危険な行動が多いので、教師は禁止の意味を示そうとし、両腕で×の形を作るポーズが多くなり、他の幼児も禁止の×ポーズをすることが多くなった。これが続いてA児が責められていると感じないように教師は配慮していくことにした。
- ・認めてほしいという思いを伝えようとする仕草を受け止め、互いにジェスチャーを交えて関わるようにし、A児との関係をつくるようにした。
- ・A児の行動を保護者に伝え、してはいけない危険なことを分かってもらうようにした。
- ・登園の折、母親が挨拶もせずA児を手離して帰ろうとするような行動をすると、同国の年長児の母が、幼稚園では、親子で手をつないで登園し、親も子も立ち止まってきちんと朝の挨拶をするものだと引き留めて教えてくれた。具体的に教えてくれる他の保護者の支援に、教師は感謝し保護者同士の関わりを見守る。
- ・夏休み前の個人面談で、家庭でも日本語に触れるように、例えば子供向けのアニメなどを見せてほしいと具体的に伝えた。9月には、夏休み中に日本語の単語の勉強をしたと父親からの報告があった。

◎夏休み明けの様子

- ・覚えた日本語の単語の数が増える「〇〇君、貸して」「〇〇君、たたいた」などいくつか2語文も使うようになる。「〇〇君、壊した。ダメ」など友達のことを訴えてくるようになる。
- ・「なに？」とバツタを指差し名前を尋ねるようになるなど日本語への興味が出てきた。
- ・久しぶりの幼稚園で友達と関わりたい気持ちが強く、集団行動をするときも友達との遊びをしたがるようになった。

◎ダメっという言葉に頑なになる場面<9月>

初めて玉入れをすることになる。生活グループの色のマットに分かれて始める準備をするように教師が言う。A児に青グループの青色のマットを示すが、A児はすでに乗っていた別の色のマットに乗ったままで動こうとしない。周りの幼児が「ちがうよ」「だめだよ」とA児に伝えると、A児は、ダメと言われたことに怒って、叩いてくる。よく関わっている男児とけんかのようになり、教師が止めると、ぷいっと保育室に行ってしまう。A児はすねて、玉入れに参加しなかった。学級で集まった時に、皆の前で、A児を膝に乗せ話をする。教師が「ダメって言われて嫌だったの？」と聞くと黙ってうなずく。その気持ちを教師が皆に伝え、「A君はまだ分からない日本語があるから、青グループが分からなかったんだね。ダメって言われると入れてもらえないと思ったのかもじゃないよ。ダメじゃなくて、青に行こうねって優しく手をつないで連れて行ってあげたらよかったのかな？」「A君、一緒に行こうって手をつなぐのは大丈夫？」と聞き、手をつないで連れていく振りをしOK？と手でジェスチャーをつけると笑顔でうなずく。「みんなも優しい声で教えてあげてね。じゃあ、B君、A君を座る場所に連れて行ってあげてくれる？」と促すとB児が手をつなぎA児を誘導した。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ A児の危険な行動に対して、やめさせる、やり方を教える、場面を変えるなどの対応で、遊びが続いていたが、A児自身の「〇〇君たちと遊びたい」「自分がやりたい」などの思いが出てきて、A児の気持ちを確実に理解し仲介することが必要になってきたので、学級の幼児たちにも具体的に伝える。
- ・ 幼稚園に慣れてきたこともあり、園庭開放中に、A児の動きは活発になってきた。乱暴な遊び方をしているのを見て、他の保護者がA児に注意した。このように誰もが遠慮なく関わるのが日常的に保護者間で行われている。教師はこうした保護者の関係を見守る。

◎運動会をきっかけに積極的になってきた父親 <10月>

運動会の親子練習など、必要に応じて父親が休みを取り母親と一緒に参加して幼稚園の行事など理解しようとしていた。競技内容が分かり、チーム分けなどでは、保護者同士はさり気なく声を掛け合いアドバイスをしてくれているので参加の仕方が分かったようだ。運動会で何か手伝いがあればやると父親は申し出てくれた。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ 運動会は大きな行事でA児親子には理解できないことが多い。親子競技では同じグループの保護者同士の結束を促すように全体に声を掛け、楽しく参加できるようにした。

◎幼稚園が好きになった親子 <11月から12月>

- ・ 母親が10日間ほど入院するが、その間父親が送り迎えをし弁当を作り、休まずに登園させた。参観日にも父親が一人で来て保育参観をし、その後の懇談会にも参加する。A児が楽しそうに遊んでいる姿や約束事を守っている姿も見られてよかったと喜ぶ。「家では片付けないし言うことを聞かないが幼稚園では上手にやっていたので驚いた」との感想があった。
- ・ 個人面談(12月)では、父親が来る。日本の幼稚園の教育がよいと話す。子供を遊びの中で育てることがよいと言う。そこで意欲が育つのでよいという。教師からは、A児はやりたいことに向かうと一直線なので集団教育の中で、守らなければならない約束は守ってほしいと伝えると保護者は、「自分の主張を出すことは中国では当たり前。日本の教育のよさは分かっているけれど、約束が多すぎるね」と言う。しかし「中国は勉強が詰め込みすぎで、それでもノーベル賞は日本人が沢山取っている」と話し、学校も日本の小学校に行かせたいと言う。家ではA児専用のiPadを用意して、DVDなどを活用して日本語の勉強をしたり日本語で遊んだりするようになったと報告してくれた。

<教師の気付き>

- ・ 父親の協力が大きいのが、家族そろって幼稚園に親しんでくれていると感じる。母親の急病でも欠席せずに通園する努力が見られることは、A児が幼稚園を休みたくないということを父親が理解してくれていることによると思われる。

【まとめ】

① 外国人幼児を多く受け入れることで保護者同士で支え合う姿が生まれる。

C幼稚園には、外国人幼児は常に多く在籍している。教師がA児の母親との連絡方法に苦慮しているのを見ると、学年の違う中華人民共和国の保護者やフィリピン共和国の保護者が助けてくれるようになった。年長組の保護者は、園の経験や余裕があるので、担任の困っている様子を察知して支援の手を差し伸べてくれる。自分たちも初めは同じように困った経験をしており、日常的なことの中に必要な支援であることを経験者として最もわかっているからこそその行動なのかもしれない。

外国人幼児が多く在籍していることにより、外国人幼児の家庭にとっては、安心感につながっている。互いに情報を共有したり、園の様子を伝え合ったりすることが日常的に行われている。いろいろな国の人が入っていることで安心するのではないかと思われる。

② 通訳してくれる保護者の支援に対しては相互の関わり方に留意する必要がある。

A児の母親は、日本語が分からない状態で幼稚園に来たが、入園当初の大変な時期には、同じ組の同国の保護者が通訳をしてくれた。身近に通訳をしてくれる保護者がいたことで教師は安心して頼りすぎてしまった。通訳をしてくれる保護者が次第に距離をおくようになった姿に教師は気づき、通訳を頼むことを止めてみた。一人の人に負担をかけないように園内の教師間でも話し合い、保護者の支援に対しては相互の関わり方に留意する必要があることを確認した。

③ 保護者にも互いのよさを発揮する楽しさを伝える。

現在第三子が通っている年長組B児の保護者が、第一子を通園させている時には、全く日本語が話せなかった。その頃、和服の着付けができる保護者が、幼稚園の夕涼み会で子供に浴衣を着せることができるように希望者を募って着付け教室を開きたいと提案し午前中に設定した。当時も数人の外国人の母親が在籍していて、その人たちも参加した。そして入学式に和服を着るという目標を立て、それを実現した。日本文化を伝えようとする母親たちの取組は自分たちの楽しみの一つとして定着していった。

そこに関わったB児の保護者は、次に自分ができることは何かと受け止め、日本語を学んで上達した。そして、現在では園内の外国人保護者にもよく声を掛け、区内の他の幼稚園に出向いて「英語で遊ぼう」のボランティア講師をしている。

幼児一人一人が伸び伸びと自己発揮でき、楽しい園生活を送るためには、約束事も必要であるし、助け合いも必要である。子供たちの学びと同じように保護者にも各自の持ち味や力を発揮してほしいと考える園の方針が保護者の自己実現にもつながっている。C園には何か手伝えることがあったらしようとする風土があり、「良いおせっかいは大歓迎」という園の方針が保護者に根付いている。

(4) 通訳による支援が有効であったD園

入園当初に行政が行っている日本語指導を受けることで幼稚園生活に慣れ、自信をもって生活したり、友達関係を深めたりしていった。しかし、進級して遊びの中で様々な感情を日本語で「言いたいのに言葉が見つからない」状況になり外国人幼児はもどかしさを感じるようになった。そこで教師は周囲の幼児に外国人幼児の表情を手掛かりに気持ちを理解する方法を知らせたり、言葉を補ったりして言葉でコミュニケーションを図る喜びを実感させていった事例である。

園の概要
学級数・園児数 3年保育3歳児1学級20名、4歳児1学級22名 5歳児1学級30名 (計72名)
外国人幼児について(現在、在籍している幼児) 5歳児A児(父、母 フィリピン共和国) その他に大韓民国6名、中華人民共和国4名、フィリピン共和国2名、中華民国1名、タイ王国1名(計14名)が在籍している。
地域の実態 多様な国籍をもつ人が集住する地域である。近年は定住化も進み、学校(園)には多くの外国人児童が就学(園)している。そのため行政では、日本語の初期指導及び日本の学校(園)生活への円滑な適応を支援する「日本語サポート指導」を実施している。
幼児を対象とした日本語サポート指導(区実施)
【内容】 在籍する幼稚園において、母語を使って日本語を指導することのできる指導員を配置し、個別の日本語サポート指導を行う。 ※幼児1名に対して指導員1名を派遣する。 ※対象児と一緒に行動し、主に通訳等を行う。
【時数】 1日2～4時間を基本とし、合計50時間。延長指導は受けられない。 ※A児の場合は 5月:18時間・6月:12時間・7月:2時間・9月:18時間 計50時間利用

◎入園当初の幼児と保護者の様子

- ・4歳児学級から入園。入園前の集団生活の経験はない。
- ・家庭内の会話は基本的にタガログ語だが、両親はより多くの人とコミュニケーションを図って欲しいという願いから、A児との会話では英語を使用していた。
- ・父親は日本語の会話が可能であり、A児は、日本語も多少理解していたが語彙が非常に少なく、会話は指示語や簡単な単語での受け答えであった。
- ・4歳児入園当初から友達に関心を示し、同じ場で遊んだり動きを真似たりしていた。特に電車を走らせる遊びでは、近くの友達と「一緒」「こっち」等の簡単な言葉を交わし、笑顔で遊ぶ姿が見られた。しかし、線路を長く繋げようとして友達を押しのけたり、電車を取り合って泣いたり、使えないと癩癩を起したりすることもあった。
- ・学級で集まって見る絵本や紙芝居には興味を示さず、絵本と全く違う方を見る、寝そべる、周囲の友達に手を出す、動き回るなどの姿が見られた。また、支援を要する幼児(学級に6名在籍)が歩き出すと、後を追ったり大きな声を上げたりするため、学級全体が落ち着かないという状態が続いた。教師はいけないことや危ないことについて「ダメ」

「ストップ」「ノー」と言葉を掛けるがA児にはその意味が分からない様子であった。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・英単語やOKサインを交えて肯定的な言葉を掛け、受け止められる満足感を味わえるようにしてきた。また、突発的な行動や危険な行動、破壊的な行動の一因には、思いを上手く表現できない、相手の言葉を理解できない辛さや苛立ちがあると思われたので、5月中旬から9月末まで行政が提供する「日本語サポート指導」を活用した。

◎4歳 日本語サポート指導の導入

- ・行政による日本語サポート指導は、自ら選んで遊ぶ時間の後半から片付けや一斉活動、弁当の準備等を行う時間にあたる10時から12時に依頼した。
- ・当初A児は、走り回る、集まらない等の行動をとりながら指導員の反応を見ているところがあったが、指導員は傍にいて教師や友達の言葉を伝えたり、A児の言葉を聞き、思いを察して日本語で周囲に伝えた。
- ・毎回同じ指導員が来て一緒に遊んでくれることが安心につながったようで、A児は徐々に落ち着いて過ごすようになっていった。
- ・教師は、A児が友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じられるように、学級活動で鬼ごっこやダンスを積極的に行った。また指導員からA児に対して、遊びに入る時の言葉『入れて』や遊びを始める時の言葉『鬼ごっこする者この指と～まれ』等を伝えてもらうようにした。
- ・生活習慣面では「今は、こうしようね」「今は、話を聞く時」等、指導員に言葉を掛けながら関わってもらい、A児が自分のすることを意識できるように指導した。
- ・運動会を通して学級の皆で活動する楽しさを経験したことや家庭でも日本語で話す努力をしていたこともあり、4歳児10月中旬頃からは誕生会や学級での集まりの際に座ったり、話を聞いたりできるようになり、身支度や片付け等も徐々に自分から進んで行うようになってきた。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・A児にとって言葉が通じる人が隣にいてもらえる安心感を得ていたと思うので、サポートが有効であったと感じる。
- ・指導員との打合せ時間を確保することは困難であったが、保育中にA児の様子を見て教師の指導方針や考えを伝え、指導員と指導の方向性を共通にするように努めた。
- ・他にも配慮の必要な幼児が多く、じっくりと言葉を知らせたり気持ちを受け止めたりすることが難しかったので、A児に個別に関わってくれる指導員の存在は、教師にとっても心強かった。

◎5歳児1学期の様子

- ・友達が始めたお化け屋敷ごっこに、A児も興味を持ち仲間に入る。これまではヒーローごっこのように同じものを持って同じ動きをするだけで楽しいといった様子だったが、部屋を暗くしてお化け作りを楽しむ等、友達と協力して遊びを進める姿が出てきた。しかし、遊びが学級全体に広がり人数が増えると、互いに実現したい内容が伝わりにくくなり、何をしてよいか分からなくなったA児は違う遊びに移って行った。

- ・教師が仲介役となり互いの思いを伝えているが、言いたいのに言葉が見つからないA児はもどかしさを感じることも多い。A児と一緒に遊ぶ友達には、「どんな時に嫌そうな顔だった？」等と言葉を掛け、A児の表情を手掛かりに気持ちを理解する方法も知らせている。

◎周年行事の練習場面<5歳10月下旬>

登園後、全学級が皆の部屋に集合。A児は、主任教諭の「立つ、移動する、合奏する」等の言葉を聞いて動き、舞台に並ぶと笑顔を見せて姿勢を正した。指揮者の合図で合奏を始め、自分が演奏しないパートでは、時折演奏している幼児に視線を向けている。

ダンスで使用するスカーフを準備する際に「僕の（スカーフ）はどこ？」と教師に聞く。首に巻いたスカーフを「見せて」と教師が確認すると笑顔を見せる。

自分で遊びを選んで活動する場面

園庭で砂を集める男児たちの近くに行き、暫く見ているが仲間には入らず場を離れる。

その後他の幼児の遊びを一通り見て歩き、傍にいたB児に「鬼ごっこやる人この指と～まれ」と大きな声で言う。B児は「ちょっと待ってて」と言っていなくなる。再度A児が「鬼ごっこやる人この指と～まれ は～やくしないと…」と呼び掛けると、戻って来たB児と傍にいたC児が仲間に入り、3人で追いかけて鬼を始める。A児は「鬼は○○だよ」「大丈夫だ！○○君タッチしよう！」と2人に伝え、遊びをリードしている。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・日本語で伝えようとする姿が多くなってきたので、安心して表現できるように見守るとともに、A児の言葉を繰り返したり補ったりしながら、言葉でコミュニケーションを図ることの喜びを実感できるようにしている。

◎昼食後に友達と進めていたドッジボールの場面<5歳12月上旬>

園庭で始まったドッジボールにA児も笑顔で参加し、白チームになる。ゲームの途中に来た友達2、3名は「紫チームが少ないから、紫に入って」と言われ、紫チームに入り1回戦は紫チームが勝った。

園長がふとテラスを見ると、A児がすのこに座って、声を出さずに涙を流していた。傍に行き「何かあったの？」「どうしたのかな？」と声を掛けると「白少ない、紫多い。みんな紫に入ってる」と言う。園長は「そうか、いいことに気付いたね。みんなにもってみようよ」と話し、A児と一緒にドッジボールをしている幼児のところへ行く。すると、クラスの友達も傍に来て「A君、どうしたの？」「A君、何か嫌なことあったの？」「ボールが当たったから嫌だったの？」等と、次々に聞いてくる。園長は「ちょっと待って、A君の話を聞いて」と声を掛ける。A児は「紫多い、白少ない、みんなが紫に入るから」と涙声で言う。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・「チームの人数が少なくて負けた」という不満や悲しさを泣くことで表現していたA児に寄り添い、思いを受け止め、A児自身が友達にも言葉で発信できるように援助した。また、周囲の幼児がA児の言葉を聞く雰囲気を作り、よりA児が話しやすいようにした。
- ・うまく伝えられないもどかしさから、その場を離れてしまう姿に対しては、思いを受け止めながら、自分の言葉で伝えられるように後押ししている。

【まとめ】

- ① 通訳が教師の意図を理解して周囲の状況や他者の気持ちを伝えることが外国人幼児の安心感につながる。

入園当初、日本語が不慣れなA児に対して教師は英語を交えて寄り添うが、幼児を受止める言語表現にはどうしても限界がある。肯定的な受け止めに努めても、緊急時等は「NO」等の否定的な言葉を掛けざるを得ない状況であった。そのような中、着任した指導員は英語に堪能な日本人で、幼稚園の生活の仕方や教師の意図を理解し、A児に状況や他者の気持ちを伝えることが可能であった。このことはA児の安心感となり、幼稚園生活の仕方を身に付けるだけでなく、教師との信頼関係や友達への親しみの気持ちを築く上で大きな助けになったと思われる。従って、入園後の早い時期における通訳の存在は、外国人幼児が幼稚園生活に慣れ、その後の園生活を充実させる上で有効であると考えられる。

- ② 思いや感情を伝えるには「〇〇というのか」と実感できる伝え方の工夫が大切である。

5歳になったA児は、式典の練習で全体の中の自分の役割を意識して動いている。また、鬼ごっこの場面では、「鬼ごっこやるものこの指と～まれ」と、指導員に教えてもらった日本語のフレーズで呼びかけ、友達との遊びを楽しんでいる。

一方、ドッチボールでは思いを上手く表現できず、遊びの場から離れてしまう。この頃になると、友達関係のなかで複雑な心情や状況を伝える必要も生じるが、そこまでの言葉や論理的に伝える術は獲得されていないと思われる。

日本語に触れる機会が少ない外国人幼児が、複雑な思いを言葉で表現できるようになるためには、「この気持ちは日本語で〇〇というのか」と思えるような実感を伴った体験やその日本語を聞く経験が必要である。指導員がA児に遊びの始め方や仲間入りに使用する日本語を伝えたように、遊びや生活のなかで意識して心情を表す言葉を発したり、状況等を相手に伝わるように話す通訳者の役割は大きい。外国人幼児は、通訳者の助けを得ながら複雑な内容も友達に発信できるようになり、より豊かな友達関係を築くことにつながるのではないだろうか。

- ③ 通訳の配置時間について

D園が利用した日本語サポートは、1日2、3時間、合計50時間の上限があったため、一番効果が期待できる時期と時間を選択して活用した。しかし、短時間のため教師との十分な連携時間が取れないのが現状であった。また、効果が現れ始めたところでサポート期間が終了してしまったのは残念である。外国人幼児や周囲の実情に応じたサポート利用の配慮があるとより充実した支援になると思われる。

(5) 通訳による支援が有効であったE園

日本語で話せないことを気にして、母語でも話さなくなってしまった幼児が、通訳と母語で話すことによって、気持ちをほぐし、安定していった事例である。

園の概要
学級数・園児数 3歳児1学級26名、4歳児2学級41名、5歳児2学級43名 計110名
外国人幼児について（現在、在籍している幼児） 5歳児A児（父、母 メキシコ合衆国） 4歳児から入園し、家庭ではスペイン語を話している。父は日本語少しと英語が話せるが、母は日本語がまったく分からない。 他に4歳児2名 3歳児にA児の弟がいる。
地域の実態 園周辺は住宅開発が進み、新しい住宅やアパートが立ち並び、市外からの転居も多い。仕事の関係で外国籍の子供も若干、通園している。

◎入園当初の幼児と保護者の様子

- ・ A児は、昨年4歳児で入園してきた。入園当初の頃は、全く日本語が分からないので、いつも不安そうな顔で教師の傍について行動していた。
- ・ 朝は父親が幼稚園に送ってくる。父親は日本語が少しと英語ができるので、連絡等ではできるだけ朝に、教師が身振り手振りや数字などを使って具体的に伝えるようにした。手紙は父親の会社に英語の通訳ができる方がいて、文書など翻訳してくれた。帰りの迎えは母親が来ているが、連絡などの場合、数字は分かるが、それ以外は伝わらなかった。
- ・ A児の弟は、今年度3歳児として入園し、不安もなく過ごしている。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ A児は入園当初は、スペイン語しか話せなかった。また園生活の仕方が分からなくて不安そうであったので、教師はA児の不安をできるだけ取り除けるように、傍について園生活の仕方を教えたり、一緒に遊んだりした。しばらくするとA児は、自分が皆と違う言葉を話すことを気にして全く話さなくなった。そこで教師は、携帯電話のアプリで、スペイン語を出して聞かせてあげると、ほっとした表情を見せた。
- ・ 3歳児で入園した弟には、一緒に遊んで、教師に親しみを持てるよう心掛けた。また絵カードや写真を使って、遊具や教材の場所を知らせ、活動内容や行動の仕方を理解しやすいように配慮した。

◎自分が話す言葉が違うことに気付き、話さなくなった<4歳1学期>

4歳児入園当初に家族全員で、メキシコ合衆国から来日したばかりのため、日本語はまったく分からなかった。学級の幼児たちは、A児が知らない言葉（スペイン語）を話すので、不思議に思ったようであった。A児はそれを察知して、スペイン語でも話さなくなり、暗い表情になってしまった。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ A児の入園と同時に、隣接する小学校にA児の兄が入学した。兄のための支援員として配置されたスペイン語の通訳の先生に園から要望して来てもらい、A児にスペイン語で話をしてもらうようにした。するとA児は安心してスペイン語で、自分の話したいことを話すことができ、気持ちもほぐれたと思われる。このことをきっかけに、教師にも心を開いて気持ちを伝える様子が見られるようになった。
- ・ また保護者との個別懇談や、月末の連絡時などに支援員に通訳をしてもらい、教師と母親との意思疎通を図ることができるようになってきた。

◎自分の要求を表すようになってきた<4歳2学期>

2学期頃から担任の様子をよく見ている、傍にいて真似をすることや、「先生」「来て」と日本語で話し、手を引いて促すようになり、次第に生活する中で身近な物の名前や生活の言葉などを覚えて、単語ではあるが話せるようになった。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ A児はしてほしいことがあると、「先生」「来て」と呼んで要求するようになってきた。教師はA児の思いをしっかり受け止め、丁寧に答えることでA児との信頼関係を深めていくようにしていった。

◎大好きな歌で、学級活動に積極的に参加するようになってきた<4歳3学期以降>

3学期にはずいぶん日本語の理解ができるようになり、劇遊びでは歌が大好きで、よく覚えて楽しく参加していた。

5歳児になると日本語の理解も進み、教師との遊びの会話もできるようになった。5歳児2学期のお店屋さんごっこでは、お店の人になって品物を作ったり、友達とやりとりを楽しんだりして、活動的になってきた。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ 教師は遊びや様々な活動を通して、学級の友達との関係をつなげてきた。5歳児に進級した際に、信頼関係のできてきた担任の教師が変わらないように配慮した。

◎兄の姿がモデルとなっている<5歳6月>

A児の兄が2年生になり、随分日本語ができるようになってきて、触れ合い参観日(土曜参観)と一緒に参加して通訳をしてくれた。そのためA児も弟もスムーズに活動に参加できた。二人は兄のお蔭で日本語に興味をもち、覚えようとしていて、よい影響を受けている。兄をモデルにしながら生活していると思われる。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ 日本語が上達した2年生の兄を園行事に参加してもらえるようにしたことで、A児や弟、保護者も活動を楽しめた様子であった。また二人は、兄の影響を受けて、日本語に興味を持つようになってきている。

< A児の弟の学級での様子から >

◎思い切り体を動かして遊べるようになってきた< 3歳10月 >

初めてのバス遠足。バス内では静かに座席に座り、ニコニコして車窓から外を眺めるなど、表情もよく遠足を楽しみにしている様子が伺えた。現地の触れ合い広場では大型総合遊具に自分からどんどん上って思い切り体を動かして遊ぶ姿が見られた。

5段くらいある階段状の遊具から、何回も跳んで遊ぶことを楽しんでた。「〇くん、すごいね。」と教師が拍手をして認めると、表情が明るくなり、更に喜んで続けて遊んでいた。教師が傍にいて見守っていると安心し、「先生きて、きて」と言って手招きして、自分のやりたい遊具に来てほしいことを言葉で伝えた。教師が付いていくと初めてローラー滑り台に行くようになった。教師と一緒に滑ると「わーっ」と声を上げて喜び、大変気に入って何回も遊んでいた。教師にスペイン語でとても楽しい気持ちを大きな声で伝えようとした。教師がうなずくと繰り返し遊ぶ姿が見られた。

< 教師の思いと指導上の留意点 >

- ・弟は、気持ちも安定していて、したいことをやってみようとする姿が見られている。教師が近くで見守るようにしていると、「先生、来て」と自分の気持ちや感動を伝えようとするようになってきた。

【まとめ】

- ① 母語で話そうとするしてくれる人の存在は、幼児を安心させる。

母語でも全く話さなくなってしまったA児に、教師は携帯電話のアプリでスペイン語を出して聞かせてあげると表情が和み、教師とのコミュニケーションツールとして使っていた。しかしアプリは変換が違ってしまうこともあり、十分ではなかった。小学校に配置された支援員に、A児とスペイン語で話してもらおうようにしたことで、A児は自分の話したいことを母語で話すことができ、気持ちもほぐれ、安心できた。また、保護者に、園の連絡事項を伝えてもらったり、面談で、A児の様子を伝えてもらったりしたことで、保護者が安心して、園への信頼を寄せることにつながった。

- ② 母語で話せる環境を整えることで、自分の気持ちを表しやすくなる。

来日したばかりで4歳児に入園したA児は、他の幼児と自分が話す言葉が違うことに気付き、全く母語で話すことをしなくなってしまうのに対して、3歳児で入園した弟は、言葉を気にする様子もなく、自分のしたいことをして過ごし、周りの幼児や教師に対しても、スペイン語で一生懸命に話をして、分かってもらおうとする姿が見られ、スペイン語で話しても通じないことを、気にしていない様子であった。すでに姉が入園しているという安心感もあったと思うが、3歳児と4歳児の発達の差によって、表現の仕方が変わってくるものと思われる。母語で話せる環境を整えることによって、A児は自分の気持ちを表現できた。また母語が通じないことを気にしていない弟には、他の3歳児と同様に、絵表示や写真などの視覚物を使う援助が有効であった。

- ③ 幼児の興味や関心のある遊びや得意なことを通して、友達と関わりをつなげていくようにすることが大切である。

A児は歌や劇遊びなど自分の好きなことができることで、積極的に友達と関わっていくようになってきている。弟は当初から体を動かすことが好きであったし、楽しんでいた。教師は一人一人の興味や関心をつかみ、友達との関わりのきっかけをつくっていくことが大切である。

- ④ 日本語が分かるようになった兄に通訳をしてもらう場合には配慮が必要である。

A児の兄が小学校で日本語を習得し、生活の仕方が身に付いてきたことが、家族が日本での生活に馴染むことにつながっている。A児と弟にとって、兄の存在は日本語を覚えるモデルとなっている。兄弟の間でも日本語を使う場面が増えていっているものと思われる。また保護者にとっても、言葉のみならず、理解しにくい状況を身近に説明してくれる存在として、頼りにしている様子が見受けられる。しかし、あまり兄に頼り過ぎてしまうと、大事な判断を保護者でなく子供に委ねることになりかねないので、その点は注意していくことが大切である。

- ⑤ 小学校に配置されている通訳を活用する工夫をしていきたい。

この地域の小学校には、スペイン語の分かる支援員が配置されているが、幼稚園にはこのような制度がない。この事例では、教育委員会や小学校長の配慮によって、通訳の派遣が実現できたが、今年度はこの通訳の教員が他市へ異動となってしまったため、保護者が自分でスペイン語の分かる知り合いを連れてきて、面談をしたり、必要な連絡をとったりしているという。幼児も保護者も安心して園生活を送るためには、通訳の存在は欠かせないものと思われる。幼児・保護者の安心につなげるためにも、幼稚園にも通訳できる支援員が配置されるような制度ができるよう、行政に働き掛ける、地域や保護者の協力者を探すなどの手立てを工夫する必要がある。

(6) 学級指導上の工夫が見られるF園

外国人幼児が安心感を持ち、楽しい園生活を繰り広げられるように学級全体でその幼児の母語に触れる機会をつくっていった。それによって外国人幼児が言葉を発することを楽しむようになった事例である。

園の概要
学級数・園児数 3歳児1学級20名、4歳児2学級41名、5歳児2学級40名 計101名 外国人幼児について (現在、在籍している幼児) 5歳児A児 (父、母 中華人民共和国) 全員中国語。全く日本語が分からない。 他、4歳児に2名 5歳児に4名の外国人幼児が在籍している。
地域の実態 本園の地域は市の中心部で、近年高層マンションが建ち、古くからの人に加え新しい住民が多く流入している。外国人も様々な国から様々な背景をもった人々が生活している。

◎入園当初のA児と保護者の様子

- ・日本語はほとんど話せず、周りの友達の様子を見て、視覚的に理解して行動する。
- ・身の回りのこと、自分のことは全てできるが、椅子にじっと座ったまま遊ぼうとしない。友達が遊んでいる様子を眺めている。教師が誘うと、おずおずと遊び始める。教師と共に遊べるという安心感が生まれてからは、自ら教師を誘い、遊ぶようになる。
- ・わからないことに関しては首を傾げたり首を振ったりする。
- ・自分の思いが伝わらないもどかしさに怒って涙をこぼす。そのような時はどのような援助をしても「どう表現してもわかってもらえない」という思いが強いようで頑なに黙る。
- ・両親ともに日本語がわからない。入園の説明会には父親の勤め先の上司が付き添ってくれた。日常の連絡文書、提出文書などもその方が通訳をしたり日本語で記入したりしてくれる。緊急なことやわかりにくいことは職場に電話すると通訳してくれる。
- ・6月頃、4歳児クラスの母親で、アプリを使いながら少し通訳できる方が親切に関わってくれるようになった。その母が通訳をしてくれるようになってから、その母親をととても信頼し、何でも相談をしているようである。
- ・A児が幼稚園で楽しく過ごしていることはとても喜んでいる。
- ・教師は身振り手振りや、翻訳アプリを使って保護者に伝えているが、伝わりきらない。踏み込んだ内容を伝えきれないと、保護者は「大丈夫」と言って話を終わらせる。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・入園当初は、友達が遊んでいる様子を遠くからじっと見ている状態で、毎日教師が遊びに誘った。最初は首を振って「遊ばない」と示していたが、誘い続けると少しずつ遊び始めるようになり、笑顔が見られるようになった。
- ・学級の幼児たちがA児に思いを伝えていけるように教師が寄り添い、コミュニケーションを深めていくことができるようにした。
- ・視覚的に理解することが主なので、A児用にカードを用意して、事あるごとに表情カードなどを使ってみたが、あまり効果はなかった。
- ・A児の優しさや思いなどを丁寧に学級の幼児たちに発信し、支え合えるようにした。

- ・思い通りにならないことや、気持ちを上手く表現できないことについて苛立ち涙した際に、教師はA児の気持ちを汲み取るようにしたが、そのような状況になるとA児が頑なに話すことを拒むので、気持ちが落ち着くまで寄り添うことに努めた。
- ・個人面談で、市の取組の一つとして通訳の手配があるので依頼したが、電話による通訳であり、母親は望まず、親しくなった4歳児クラスの母に通訳として同席してもらい面談をしたいと言ってきたので、それを実施した。

◎自由遊びで友達と思いが通じ合わなかった場面 <9月>

A児が友達B児と何かやりとりをしているが、互いに納得いかないような表情でB児がA児に諭すように何かを言っていた。A児はとても怒った表情をしていた。

教師が「どうしたの?」と尋ねると、B児が「Aちゃん、Cちゃんとカプラしたいねんて。でも、私が先にCちゃんとプリキュアごっこする約束しててん」と、C児がどちらと遊ぶかというトラブルになっていた。C児は少し困りながらもB児と遊ぶことを決めていた。二人はA児を誘ったが、A児のカプラで遊びたい気持ちは変わらなかった。A児の気持ちや考えを教師がいろいろと言葉を掛けて発言を促すが、黙り込んで何も言わない。C児が「明日、一緒に遊ぼう」と言うと、A児は何も言わず怒りながら泣き始めた。教師が寄り添った後、「明日、Cちゃんが一緒に遊ぼうって言ってくれてたね。Cちゃんと遊ぶ約束しに行く?」と言葉を掛けるとうなずいて、教師と一緒にC児と遊ぶ約束をした。

◎夏休み明けのA児と保護者の様子

- ・9月ごろから、A児の姉（中学3年生）が来日して一緒に住むようになり、送迎をすることが多くなった。降園後、公園などでよく遊んでくれるので、A児は笑顔が増え、活発になっている。姉と母語を話す機会も増え、日本語で話すことも多くなった。
- ・運動会の活動で、学級でいろいろな国への興味を広げる機会をつくると幼児たちはA児の国の話をしたりA児に聞いたりするようになった。A児も喜んで自分の国について話していた。
- ・A児が「ダメ!」と強く言うことが多くなり、誤解が生じることがある。A児なりにルールを理解した上で友達に声を掛けているが、それが正論であるときもあれば、そうではないこともある。そうでないときは教師や友達に正されるが、友達だと納得できないことが多い。また、正論だったとしても、言い方が強いため、言われた側の子供はもやもやとした気持ちになってしまうことが多い。
- ・A児が保護者に対して少し通訳をするようになり、そこから保護者も教師の話を理解してくれるようになりつつある。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・A児に寄り添いながら、A児の気持ちを教師が言語化するようにした。教師が汲み取ったA児の気持ちを「怒っている」「悲しい」「嬉しい」などの言葉で表現し、A児の気持ちが他の幼児に伝わるように努めた。気持ちが落ち着くと、自分の思っていることをよく話すようになって、相手に伝えたいという気持ちも出てきた。初めから諦めて何も言わなかったり、うまく言葉で表現できないかもしれないと失敗を恐れたりする姿があるので、A児なりに表現できるようになってほしいと考えた。

- ・1学期は頑なに中国語を話そうとはしなかったが、教師が中国語を教えてほしいと言うと、少しずつ教えてくれるようになってきた。「昨日の〇〇、覚えている？」と、前日に教師に教えた中国語について自ら声を掛けてくるようになってきた。A児にとって中国語を話すことがマイナスイメージにならないように配慮していった。
- ・A児の思いや、A児が困っていることについてはその都度必ず幼児たちに伝え、A児にわかるようにはどのように伝えていけばよいのかを学級で一緒に考える時間をとった
- ・2学期に入ると言語でのやりとりがスムーズになってきたが、何かトラブルが起こると、他の幼児は分からせようとする話し方をしている。A児は分かった上で納得できないことには黙り返む。トラブル解決へ向けた心情的な互いのやりとりはとても難しい。焦らずに丁寧な仲介を進めている。

◎母国語を友達に教える楽しさを感じた事例 <11月>

1学期、絵本に中国語の挨拶が載っており、A児に発音してほしいと頼むと少しだけ友達の前で披露してくれた。しかし、友達の前で中国語を話すことは嫌なようであった。

2学期になり、教師が中国語の本で中国語を勉強していることをA児に知らせると、興味をもったようで中国語の本を覗き込んできた。「この、『ごめんなさい』ってなんていうのかわからないんだけど、Aちゃんわかる？」と聞くと「てぶちー」「てぶちー。合ってる？」A児は頷く。「ありがとう！さすがAちゃん！中国語話せて嬉しいわ！Aちゃん、また教えてくれる？」「いいよ」A児はにこにこ笑っていた。翌日、A児が教師に声を掛けた。「先生、昨日の覚えている？」「『ごめんなさい』？覚えているよ、『てぶちー』。合ってる？」「合ってる！今日、何教える？」A児と教師のやり取りを見ていたB児が何の話か声を掛けてきた。「私、Aちゃんに中国語教えてもらってるの」「えー！いいなー！Bも教えてほしい！」B児の大きな反応に、周りの幼児たちも集まってきて自分も教えてほしいとA児に話しかけ始めた。「じゃあ、皆でAちゃんに中国語教えてもらう？Aちゃん、教えてくれる？」と教師が聞くと「いいよ」とA児は照れくさそうでも嬉しそうにうなずいた。

降園時の集まりで、皆の前にA児を呼んだが恥ずかしがって出てこられない。「先生も一緒に話すし、できないことがあったら助けるから大丈夫。教えてほしいなあ」「お願い！中国語教えてAちゃん！」教師と友達の言葉で、A児は皆の前に立った。教師は「何教えてもらおうか？私が最初に教えてもらった『ごめんなさい』でいい？」と聞くと幼児たちは同意し、A児は頷いた。「A先生、中国語で『ごめんなさい』ってなんて言いますか？」A児は少し恥ずかしそうに、教師に少しもたれかかりながら、「…てぶちー」皆の前で教えてくれた。「てぶちー？てぶちー！あってる？」幼児たちは口々に唱え、A児を見つめていた。A児は頷いた。教師は「Aちゃん、ばっちりだったら、手で丸ってしてくれる？」A児は頷いて頭の上で大きく腕を丸にする。「やったー！てぶちー！」「Aちゃん教えてくれてありがとう！」幼児たちは皆嬉しそうにA児に礼を言った。A児は照れていたが満足そうに「いいえ」と答えた。翌日から毎日、A児に一日一語、中国語を教えてもらっている。中国語を園で話すことに抵抗のあったA児も12月に入ってからはあまり身構えることなく、中国語を話すようになってきた。

＜教師の思いと指導上の留意点＞

- ・ A児は普段の生活の中でとてもよく日本語を話すようになった。活発に多語文で話すことができている。しかし、まだ人に注目されているという状況ではなかなか話すことができない。十分に力をもっているA児だからこそ、多くの場で発言できるようになってほしい。
- ・ 運動会の活動の中で、中華人民共和国について取り上げた際、学級の友達がとても興味を持ったので、A児から教えてもらう機会をつくった。それはA児にとって自信や喜びになり、「中国語教室」につながった。
- ・ A児による「中国語教室」は、A児が母語にも日本語にも誇りと自信をもってほしいと考え、進めてきた。当然A児自身のプライドはあると思うが、間違ってもよいのだという雰囲気づくりをし、何でも発言できるようになってほしいと願っている。
- ・ A児が中国語を話す姿を他の幼児たちはとても喜び尊敬する気持ちで見ているので、その気持ちをA児に伝えていくようにしている。皆が中国語を教えることを望む発言したことも、A児への親しみや中国語への興味が沸いたきっかけになった。普段の遊びの中でも、中国語を言う姿が学級で見られるようになり嬉しい。A児が勇気を出して一歩踏み出したことに対して、A児を認める学級の幼児たちの素直な反応がA児の安心感や喜びや自信へと結び付くようにしたいと考える。

【まとめ】

① 教師が丁寧に寄り添い信頼関係を築くのが重要である。

入園当初の不安なときには、教師との信頼関係が大きな意味をもつ。まずは寄り添い、遊びに付き合い、園生活が楽しいことを伝えていくことが重要である。

友達との関わりが増えると友達同士のトラブルも起きる。言葉が通じないことで互いが理解しトラブルを解決することはとても難しい。気持ちを言葉にすること、表現することの難しさに直面するが、丁寧に気持ちを読み取り、気持ちの通訳をしながら対応していく必要がある。

教師は気持ちの通訳に表情カードなどを使ってみたが、A児には逆効果であった。年長児にもなると複雑な心模様を簡易なカードを使われて表現することは嫌だというプライドがある。自ら気持ちを言葉に出せるように、学級で互いを思いやる気持ちを育てていく指導が必要である。

② 人前に出て言葉を使うことへの抵抗感をなくす工夫が大切である。

毎日の「中国語教室」のように母国語を堂々と披露する機会を設けることで、一人一人の良さを学級全体で再確認することは楽しい園生活につながる。

外国人幼児のみならず学級の幼児が言葉に対して敏感になり、興味を持って身近に日本語・中国語を取り込むことができている。小さなきっかけでも国際感覚を養う土壌作りにつながると思われる。

詩や歌など言葉の決まったものを声に出すこと等を取り上げ、人前で日本語を披露する機会を設け 自信につなげることも必要である。

誕生会や発表会などの「晴れの場」をうまく活用して、各自の喜びにつながるような工夫をしていくとよい。

(7) 外国人幼児を自然体で受け入れる学級集団が育つG園

外国人幼児を自然体で受け入れる風土があり、教師は常に日本語を理解しているかどうかを見極め、遊びや生活の中での幼児同士の言葉のやり取りを見守る。この教師の姿が外国人幼児を自然体で受け入れる多様性のある学級を育てている事例である。

園の概要	
学級数・園児数	2年保育4歳児1学級16名、5歳児1学級17名 計33名
外国人幼児について	(現在、在籍している幼児)
	4歳児A児(父、母 インドネシア共和国)の他2名 計3名
地域の実態	
	自動車産業の発展とともに栄えてきたT市には、ブラジル連邦共和国、フィリピン共和国等の人々が多く居住している。外国人幼児の保護者は共働きであることが多く、保育所への就園率が高い。市内には外国人が集住している地域があり、一つの保育所に外国人幼児の在籍率が80%という実態の園もある。G園にも毎年数名の外国人幼児が入園するが、入園している外国人幼児の家庭は、社宅ではなく単独で住んでいる。
	行政からの支援として、ポルトガル語、中国語などの通訳が行われている。
	近隣の大学が「幼稚園・保育園支援ガイドブック」をタガログ語、スペイン語、ポルトガル語、中国語、英語の五か国で作成し、幼稚園、保育所に配布している。主な内容は入園関係、園生活全般等を詳しく説明しており、受け入れる園及び入園を希望する外国人保護者にとって有効活用されている。

◎入園当初の幼児と保護者の様子

- ・来日した当初は日本語をほとんど理解できなかったが、保護者はA児が困らないよう、入園当初から簡単な単語(挨拶、お茶、コップなど)は日本語で言えるように教えた。
- ・身の回りのことなどはほとんど自分で行えるが、言葉だけでは理解できず、教師が手本を見せると、真似て自分でやろうとする。
- ・不安な表情を見せたが、教師の側にいることで安心しようとした。
- ・絵本や紙芝居などを見る時は、座ってはいるが、言葉が分からないので、辺りを見回したり、隣にいる友達の気を引いたりする等、落ち着かない様子が見られた。
- ・父親は日本語が概ね分かるが、母親はあまり分からない。教師は身振り手振りでその日のことを報告すると、「分かりました」「大丈夫」と答えるが、理解されているか不明である。
- ・給食では、宗教上の理由で豚肉を食べないことに対して、疑問を持つ幼児もいたが、一度話すと納得し、その後は偏見なく受け止めている。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・まずは、本児が安心して過ごせるように、新しいこと(行事や製作、遊びなど)は、A児が分かりやすいよう、教師が見本を見せたり、友達の様子を見せたりしながら、一緒に行うようにした。
- ・A児は動作で思いを表そうとするので、動作から思いを捉え、簡単な単語を使ってA児の思いを日本語にし、思いを受け止めながら、思いと言葉がつながるようにした。

- ・入園前は、A児が日本語をどれだけ理解できるのか、宗教食について、周りの幼児がどう受け入れるかなど不安があった。しかし、学級の幼児の関わりには国籍などで友達を選ばず、学級の一員（友達の一人）として受け入れている様子が見られたことから、A児は日本語の理解力に乏しくても、徐々に不安が取り除かれていくであろうと予想した。

◎ A児の学級での様子から

◎日本語が伝わっていないことに気付く <10月>

運動会の経験画を描く場面－教師は学級全員を集め、運動会で行ったことを振り返り、それぞれに楽しかったことや頑張ったことを話す。A児は皆と一緒に座って、楽しそうにしているが、皆が何について話しているかは分からない様子が見られ、発言しなかった。

画用紙を配ると、A児はすぐに絵を描き始めた。“どのような絵を描くかな”“どれくらい理解しているかな”と見守っていると、太陽と家を描き始めた。“簡単な単語以外の文章”や“具体的な見本がないこと”は理解ができないと改めて感じた。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・今回の事例から、A児の日本語の理解力がどの程度かを確認することができた。学級全体への話（長い文章、見本がないこと）の理解が難しい。しかし、分からないから困っているという様子はなく、友達の姿を見ながら、意欲的に活動を楽しむ姿はある。その姿をしっかりと受け止め、認め、A児が安心して皆と一緒に活動していけるよう、見本を示したり、個別に声を掛けたりすることが大切だと感じた。また、教師がA児を温かく受け止める姿を見せていくことで、他児もA児への関わり方が分かり、偏見を持たずに接していけると考えた。

◎劇遊びはA児の興味関心があるテーマを中心に選ぶ <11月>

12月の生活発表会の劇遊びに向けて、A児がごっこ遊びで好む“ねこ”、日本で受診した経験がある“病院”が内容に含まれ、歌もある『ねこのおいしゃさん』の絵本を題材にした。遊びの中で、教師は焦らず言葉が分かるように、短くはっきり言うことを心掛けたが、A児ははじめ、絵本に出てくる“言葉のやりとり”を言おうとする姿は見られなかった。

病院ごっこセットとお面を室内に設定すると、「これなに？」とすぐに興味を示した。A児が“お医者さん”のお面をかぶったので、教師が患者の動物の役をして関わった。A児は「次のカンザ（患者）さんどうぞ」「どうしましたか？」「これは大変！急いでな一さなくっちゃね（治さなくっちゃね）」と、絵本に出てくる言葉を言ったり、歌を歌ったりし、ねこのお医者さんになりきった。周りにいた幼児も加わり、友達同士で役になりきったやりとりをする姿が見られた。

11月に保育参観があり、A児が友達と一緒に遊ぶ様子や一斉活動の様子を保護者に知らせたことで、保護者は安心してきたようである。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ A児は語彙が少ないため、話や絵本の内容を理解できずにいたが、普段からA児が親しんだり、経験したりした題材を選ぶことで、無理なく絵本に親しみ、語彙が増えていくことが分かった。そのことから、絵本のみでなくいろいろな活動においても、教師はA児が親しみやすく、興味の持てる内容を取り入れること、簡単なものの名前や動作と日本語が一致しやすいよう、短くはっきりとした言葉を掛けることが大切だと感じた。
- ・ また、今回の事例のように、教師の言葉掛けに対し、A児は表現しなくても、A児の心の中でその言葉のやり取りを楽しんでいることが分かった。“なかなか言葉が出てこない”“どうやって言えるようにしようか”と焦らず、A児のありのままの姿を温かく受け止めていくことが大切である。
- ・ A児と他の幼児が関わる場面では、A児の日本語の発音が不明瞭なことは気にせず、身振りや表情を含めてA児の言葉を理解して会話を楽しんでいた。まずは“この活動をA児は楽しんでいるか”“A児が分からないなど感じている様子はないか”ということをつまみつつ、A児が楽しんでいる場面を教師も共有しながら、幼児同士の関わりを見守っていくことが大切だと感じた。

◎幼児同士の伝え合いを見守る<12月>

B児がA児に「“あっちむいてホイ”しよう」と話し掛けた。A児は「なにそれ、分からない」と答えた。普段、分からないことがあると、教師に助けを求めてくるので、今回もそうするかなと思った。

A児が“分からない”というとき、B児はすぐに「じゃんけんぽんってするでしょ」「それで、勝った人が…」と自分とA児の手を使いながら説明し始めた。

教師はA児が分からない素振りを見せた時には言葉を補っていこうと思い、2人のやり取りを見守った。A児はB児の説明だけで、すぐに「分かった!」と言った。どれだけ理解ができているかA児の隣に座り、「がんばってね」と声を掛け見守った。

じゃんけんではB児が勝つと、B児はA児の様子を見つつ、「いくよ」と声を掛けてから「あっちむいてホイ!」と指を指した。A児はB児の指とは違う方向に顔を向けることができた。その様子を見て、しっかり遊び方を理解していると感じた。A児に「やったね。違う方に向けたね」と、声を掛け、B児には「B児の話でちゃんとA児が分かってくれたね」と言葉を掛け、伝わって嬉しい気持ちに共感した。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ 困った時には教師に頼ることができるA児だが、少しずつ自分で友達と関わりたい思いが出てきている。今回の事例のようにA児が友達の思いを自分で聞こうとする姿が見られた時には、その姿を側で見守り、必要に応じて仲立ちするようにした。友達の言っていることが自分で分かった時の嬉しさを十分に味わうことで、友達との関わりがより楽しいものとなってほしいと考えた。
- ・ 周りの幼児たちも、思いや考えを自分で伝えたいという気持ちが出てきている。A児が分からない時には、教師の伝え方を真似て関わってみようとする姿が見られるようになってきたので、教師は側で分かりやすい言葉を補いながら、周りの幼児も伝わった嬉しさを感じられるようにした。

【まとめ】

- ① 外国人幼児と保護者にとって、早く安心して登園できるような配慮が大切である。

G園は、毎年数名ではあるが外国人幼児を受け入れていることから、親子共に園に慣れるまでの関わりや援助に工夫があり、受け入れる風土が培われている。園として、第一に大切にしている姿勢は、早く園に慣れ、安心して通園できるようにすることと掲げており、指導上の留意点として、言葉だけの説明では理解しにくいと思われることには、ア実際に物を見せる、イ動きのモデルを示す、ウ必要な言葉を知らせるなどを挙げている。また、保護者に対しても同様な配慮をしており、宗教上の理由から食材の制限があるため、給食の献立については、事前に食材を伝える、献立の写真を見せるといった視覚的な情報を示すなどの工夫をしている。幼稚園の細やかな配慮は保護者を安心させ、信頼につながると考える。

- ② 外国人幼児と教師との関わりが学級の幼児同士の関係性をはぐくむ素地となる。

学級の幼児の関わりの様子から、外国人幼児であるということを意識することなく、自然に受け入れていると考える。A児は教師を頼りに思いついて歩くなど、安心できるまで、教師からの細やかな配慮の下に過ごした。学級の幼児が偏見を持たずに接していくよう、A児への関わりを意識して配慮してきた教師の姿勢は、A児への関わりモデルとなって、学級の他の幼児の関わり素地となっていると思われる。12月の事例でB児が示した遊びの説明の場面から、幼児同士が自ら言葉で伝えよう、聞き取ろうとする意識が相互に育ち、伝え合える嬉しさを共有する友達関係が育っていることが分かる。

- ③ 互いの国の言葉や文化に興味を持ち、多様性のある学級集団が育つ。

日本語の語彙を増やそうとする教師は、細やかな観察と指導の工夫が必要である。指導のポイントとしては、ア. 簡単な言葉をはっきりと発音する、イ. 日常使う言葉を知らせる、ウ. A児が興味を持てる話題、他の幼児と共有できそうなイメージや言葉のやり取りが生まれる状況や歌を用意するなどがある。しかし、11月の事例のように、教師の思いと違った姿になっても、焦らず、じっくりと一緒に遊んだり、環境を作ったりすることも必要であることが分かった。外国人幼児にとって、日本語が分かり、話せるようになることは大切であるが、まずは、友達と関わって遊ぶ楽しさを十分に味わえるようにすることが重要である。さらに、G園でのインタビューでは、互いの国籍の違いに気付いていない時期には、あまりそのことを際立たせることはせず、相手の国の言葉や文化の違いに興味を持つようになる時期を見計らって、言葉や文化の交流が自然な形で進められようとしているとのことであった。その国の言葉で挨拶する、生活発表会でその国の言葉や文化を取り入れる等の工夫をし、幼児にとって外国人幼児と共に生活することがわくわくする楽しい体験になるようにすることで、互いを尊重し認め合う心豊かな幼児が育つことにつながると考える。

(8) 学級指導上の工夫が見られるH園

教師が、外国人幼児・保護者の気持ちや、困っていることを丁寧に受け止め、他の幼児や保護者との関わりのきっかけを作るように配慮をしたことで、保護者からも協力が得られ、幼児も安心して園生活を楽しめるようになった事例である。

園の概要
学級数・園児数 3歳児1学級23名、4歳児1学級21名、5歳児1学級23名 合計67名 外国人幼児について (現在、在籍している幼児) 3歳児のA児(父、母 中華人民共和国) その他3歳児5名 4歳児5名 5歳児7名 合計18名
地域の実態 今年度は、18名の外国人幼児が在籍し、中華人民共和国、大韓民国、インド、タイ王国、フィリピン共和国、ルーマニア等8か国の幼児がいる。仕事の関係で長期滞在が多いので、保護者のどちらかは日本語の会話や読み書きが可能なことが多い。日本に帰化をしている場合や、両親のどちらかが外国籍という家庭もある。両親ともに日本語がほぼ分からない場合、仕事場の上司や友人などが手紙を読んで伝えてくれている場合もある。学級の中に英語が話せる保護者がいて、通訳してくれることもある。

◎入園当初の幼児と保護者の様子

- ・3歳児の男児A児。父・母共に中華人民共和国籍である。両親共に日本が大好きで、家庭でも日本語で生活している。父は日本語を読めるが、あまり書けない。母は読み書き共にできる。教師の話は理解しているようだが、文章の読み取りは難しいようで、入園のしおり等の内容が正確には伝わっていないこともあった。
- ・A児は、入園前に未就園児の会に父親と一緒に何回か参加していたため、園の環境には少し慣れていたが、言葉を掛けても返事がないので、どの程度日本語を理解しているか分からなかった。
- ・入園当初、登園後の身の回りの仕度は自分からはしようとせず両親が全て行っていた。
- ・片付けや集団での活動を嫌がり、参加しようとしなかったことが多かった。着替える時や、トイレに行きたくなった時もズボンの上げ下ろしを自分ではせずに大人の顔を見ていることが多く、教師は実物を使い、一つずつ順を追って着替えの方法を知らせ、できた事を認めるようにしてきた。家庭では、とても大事に育てていて、A児が嫌がることは無理にはさせないということであった。自分の身の回りのことを自分でする経験の大切さや幼稚園でA児自身が困っている事がらを教師が伝えても、なかなか理解を得られなかった。その後、徐々に園長に悩みを相談するようになってきたので、教師から、保護者に伝えたいことは園長から分かりやすく説明するようにした。
- ・弁当が始まると、「食べない」と言って、弁当箱のふたを開かずずっと座っていた。両親と相談しながら、食べられそうなものを少しずつ入れてもらうようにしたが、パンやお菓子をもってきても一学期は一切食べなかった。教師は、持ってきたお弁当箱を、一度はふたを開けて、中身をA児が確認するように促していた。

◎ A 児の変容

◎お弁当を一口食べる <9月初旬>

2学期になり、教師は一口でも弁当を食べて欲しいと思い、弁当箱に入っているパンを小さくちぎり、「一口だけ食べようね。はい、あーん」と言ってA児の口の前に持っていった。するとA児はそれを思わずパクリと食べたので、教師はおおいに褒めた。その日は1口だけ食べて弁当を片付けた。

降園時、父親にその話をすると、とても喜んでA児の頭をなでていた。その後も、A児の食べそうなものをいろいろ試して持ってきた。おつまみのような小さなアジの乾燥したものは自分から食べていた。

◎お弁当を全部食べる <9月下旬>

ある日、気が付いたら弁当を全部食べ終え、教師に見せに来た。教師は「弁当箱がピカピカになった」と、大きな声でA児を褒めた。周りにいた職員や園長にもA児の前で伝えたと、とても嬉しそうであった。その日以降、A児が自分で食べることも増えたが、完食はその日のみで、教師と相談して半分だけ食べるようになった。「半分だけピカピカ」と言われることも嬉しい様子であった。「あと一口食べようね」と言うと、そのことを受け入れ、最後にもう一口、食べられるようになった。

持ってくるものは、乾燥したアジ、ハム、唐揚げ、パンなどが多く、ハムや唐揚げは、自分から食べることが多い。おにぎりの時もあるが、御飯はあまり好きでない様子で、野菜は一度も持ってこない。

<教師の思いと指導上の留意点>

1学期には、弁当を一口も食べない日が続いたが、A児が一口食べたことをきっかけに教師は焦らずにA児が食べられそうなものを保護者と相談して試してきた。内容は、「日本の幼稚園の弁当」という固定概念にとらわれず、家庭で食べ慣れているものを持たせてもらった。周囲の幼児は、3歳児ということもあり、弁当の中味についてはあまり違和感を持たず、「Aちゃんは、このお魚なら食べられるんだね」と教師が言葉に出して褒めたため、「Aちゃんお魚好きなんだね」と自然に受け入れていた。違いに対する感覚は教師の言動が重要であると感じている。また、家庭で保護者が食べさせてくれていた生活から、自分で食べる習慣を身に付けていくために、時間を掛けて指導してきた。

日本語が少しずつ理解できるようになり、褒められている事も分かるようになった。「ピカピカ」「半分だけピカピカ」などの分かりやすい言葉を喜ぶ姿が見られたので、日々丁寧に声を掛けていった。

◎「大好きな友達ができる」<9月下旬>

父親同士が親しくなったB児（中華人民共和国）のことが、好きになった様子で、遊びの時に側にいることが多くなった。しかし、どのように一緒に遊んでよいのか分からず、手をつないで一緒に歩いたり、抱きついていきなり押し倒したりするようになった。B児は押し倒されることを嫌だと言葉で言えず、泣くこともあった。教師はA児に「危ない」ということを伝え、父親にも、大好きな友達ができたと、及び遊び方が分からず抱きついて倒してしまうことがあることを伝えた。

◎B児に抱き付いて倒し、頭をぶつけてしまう <10月初旬>

ある日、B児に抱き付いて、たまたまB児が廊下の巧技台に頭をぶつけてしまった。教師は帰り掛けに父親にその話をした。今までは何を伝えてもにこにこ話を聞いていた父親が、その日は深刻な顔で話を聞いて、「友達を傷つけるのは困る。」と言って、A児にやってはいけないことを強めの口調で伝えていた。家庭でも繰り返し指導をした様子だった。抱き付いてしまう行為はすぐには止まらなかったが、10月後半には、腕をつかんだりすることはあっても押し倒すことはなくなってきた。また、父親は、A児が危険なことや、相手が嫌がることをしている際には、言葉で注意する様子が見られるようになってきた。

<教師の思いと指導上の留意点>

A児の目が友達に向いてきたことを保護者に伝え、そのために起きたトラブルについて、できるだけ丁寧に説明し、家庭でも適切に指導してもらえるように協力を求めた。しかし最初は「でも、うちの子はいい子なのです」と言って、あまり問題があるように受け止めていないように感じられた。その後、B児に怪我をさせてしまった際に、遊びの中での様子や怪我の状態を伝え、さらにA児がB児を大好きな気持ちも合わせて伝え、教師は保護者と共に成長を見守っていくことを伝えた。

◎プラレールで遊ぶ <11月上旬>

廊下にあるプラレールの線路でB児と一緒に遊ぶ姿がよく見られる。それぞれ線路の端と端に離れ、電車を持って走らせている。近くにいたC児（日本）が、「次は月島～、月島～」など、知っている駅名を言うとそれに反応するように「と～ちょ～、と～ちょ～（東京）」と言う。11月中旬に、B児が両親の都合で中国に1カ月帰国することになり、他の日本人の幼児と遊ぶ姿が増えてくる。

◎お寿司屋さんになって遊ぶ <11月下旬>

廊下に牛乳パックで作ったついたてを並べて丸く囲い、その上に皿に乗せたお寿司を置いて、真ん中に一人で座っている。教師が通りかかると、A児は「ここは、Dちゃんとおぼくのお寿司屋さんなの～」と笑顔で言う。「いいね～、二人のお寿司屋さんなの？」と聞くと「そうなの～」と答える。D児が何かを取りに行くにつれていき、D児がどこかに行こうとすると、引っ張って連れ戻そうとする姿も見られる。思いを言葉で何とか伝えようとする姿が見られるが、喧嘩になることがある。

◎おすもうさんごっこ <12月上旬>

好きな遊びの中で、教師が用意した相撲のマットや、まわし、髷、軍配、塩の入れ物、ふれ太鼓などを使って毎日のように遊んでいるE児（日本）がいる。ある日、A児とE児がまわしの取り合いになったので、教師がもう一つのマわしを渡すと、二人で遊び始めた。E児が「えい！」とA児を投げるまねをすると、うまく投げ飛ばされるまねをする。それが楽しく、何度も繰り返していた。A児は、うまく言葉で伝えられないことがあると、相手の顔をギュッと握ってしまうことがあり、教師も気に掛けていたが、この日の相撲ごっこでは特にトラブルは見られず、一緒に楽しく遊ぶ姿が見られた。

＜教師の思いと指導上の留意点＞

- ・ 同国のB児が長期欠席になった期間に、日本の幼児と遊ぶ機会が増え、かなり日本語での会話ができるようになってきた。まずは遊びが楽しめるように援助をしながら、教師もたくさん話し掛け、会話をするように心掛けた。
- ・ スキンシップを喜び体ごとぶつかりあうことが好きなA児には、E児との相撲ごっこが楽しめるであろうと考え、まわしを手渡した。遊びが楽しめたことで、より言葉も豊かになると実感した。

◎日本語が上手になった <2月>

3学期には、友達と楽しく遊ぶ姿が多く見られるようになり、日本語での会話も上手になってきた。家庭での会話も日本語を意図的に使うようになってきたのだが、今度は逆に「中国語を忘れないで欲しい」と、保護者の心配する様子が見られた。

【まとめ】

- ① 各国の文化に思いを寄せ、理解しようと努めることが重要である。
外国籍であることが、幼児や保護者の中で特別なことではなく、自然な関係が築けるようになるために、園側の細やかな配慮や、文化の理解が必要である。そのことが学級の幼児や保護者全体に、異文化受入れのよいモデルになっていく。
- ② 幼児・保護者に対する個別の丁寧な声掛けと、理解されているかの確認が必要である。
園では全体に話したり、手紙を出したりした時に、外国人幼児の保護者には理解が難しいと思われることについては、帰りに個別に重要なことを伝えることが大切である。理解していなくても「分かった」ということも多いので、より丁寧に説明することが必要である。
3歳児は外国籍であることと関係なく言葉では通じないことが多いので、動きで見せたり実際に物を見せたりして伝えることが大事である。
- ③ 積極的なコミュニケーションと、相手の思いや文化を理解しようとしている姿勢を伝えることが、園側の思いが伝わることにつながる。
保護者に対して「幼児のために、こうして欲しい」と伝えたいことが多い。しかし、保護者にとっても、幼稚園が安心できる場にならないと、養育方法を変えることも難しい。教師から良いところやできるようになったことを頻繁に伝えられたことで、次第に関係がついてきた。ゆっくりと信頼関係を築きながら、指導を進めることが大切である。
- ④ 遊びが充実する環境構成に留意し、幼児同士のつながりが豊かになるような援助が重要である。
お弁当を食べない、トイレに行かないなど、日々の生活につまづきがあるのは幼児にとっても辛いことである。そこでゆっくり時間をかけながら、幼稚園が安心して生活できる場であることを伝えていくことや、幼児自身が、楽しいと思える遊びができるよう援助をしていくことの両面が必要である。
好きな遊びの中で、他の幼児とのつながりを丁寧に援助していく必要がある。

(9) 学級指導上の工夫が見られる I 園

自分の気持ちや思いを上手く日本語で伝えられない幼児。その幼児なりの表現を好きな遊びの中で大切にす、皆の前で話したり台詞を言ったりする行事への取組に向けて、その幼児が言いやすい日本語の表現に換える等、指導の工夫をする事例である。

園の概要
学級数・園児数 満3歳児9名 3歳児29名、4歳児30名、5歳児26名 計94名
縦割り保育を特色としており、3歳児、4歳児、5歳児が共に生活している。
外国人幼児について（現在、在籍している幼児）
5歳児 A児（父 日本）（母 ウクライナ） A児の弟 3歳児（父 日本）（母 ウクライナ）
その他に3歳児（マレーシア）
地域の実態
周囲には大学、高校等の学校が建ち、学園都市となっている。幼稚園は静かな住宅街且つ、大学の構内に建つ。外国人が多く暮らす地域ではない。

◎ 入園当初のA児と保護者の様子

- ・父親の転勤に伴い、年中4歳児の6月に転入園してくる。
- ・入園当初は、前園との生活の違いに戸惑い、礼拝、給食、皆でする活動等の際には、落ち着かず戸惑っている姿が見られた。人懐こく、興味がある物事、場所に自分から関わっていた。
- ・縦割り保育であるため、同じ学級には年長児がいる。数名の年長女児が、A児に優しく関わることで、A児が安心して過ごせるようになるまでに時間はかからなかった。また、A児はその年長女児に憧れ、一緒に遊ぶことで、“〇〇ちゃんみたいになりたい”と口にするようになった。
- ・母親が送り迎えをするが、登園時間が守られないことやA児の食べられる物が限られていることもあり、園生活を送る上で必要な生活習慣について主任や担任が伝えていった。しかし、理解が得られにくい様子が見られた。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・礼拝、給食、皆でする活動等は、皆と一緒に行動してほしいという思いから、教師は、A児に個別に関わる中で、園の約束事や一日の流れなどを丁寧に伝えるようにした。
- ・母親とは学級担任の教師をはじめ主任も、日々コミュニケーションをとるように努め、決められた時間を守ってほしいこと、食事や生活リズムが大事であること等を細やかに伝えるようにした。母親は「分かりました」「大丈夫です」と返すが、実際には理解されていないことも多く、根気を要した。

◎ A 児の学級での様子から

◎自分の気持ちや思いを上手く伝えられない状況を理解する <年長9月>

A 児は年長に進級すると、年長児同士で遊ぶようになり、友達の中で自分の思いやイメージを主張するようになる。しかし、6月ころになると、A 児が遊びのルールや順番を守らない、思いが通らないと手を出すことなどが原因で、トラブルになることが増えてきた。夏休み明けには、一緒に遊ぶことが多いB 児と次のようなトラブルも起きた。

B 児「色鉛筆、貸して」 A 児「いや！」 B 児「じゃあぬったら、貸して」

A 児「いや」 B 児「も～、A ちゃんのものじゃないでしょ！」 A 児：「私が使いたい」

B 児「A ちゃん、嫌い」 A 児：泣く（言葉にならず） B 児をたたく B 児「しないで」

A 児は、再度たたき、B 児の色ぬりに落書きをする B 児「しないで！」 A 児：日本語ではない言葉をぶつぶつぶやく B 児「も～、何て言っているか分からない！」

母親に B 児とのトラブルのことを伝えると、母親は、A 児が手を出してしまうことや、自分の気持ちや思いを日本語で説明できないことは理解していた。

<教師の思いと指導上の留意点>

- ・ A 児は、縦割り保育の中で、入園時（年中時）には年長児から優しくされる経験を通して園生活に慣れてきた。しかし、年長になると、自分の思いを受け止めてくれていた存在はいなくなり、同学年の友達と互いの思いや考えに折り合いを付けながら生活していかなければならなくなった。そのことへの戸惑いや自分の思いを上手く日本語で表せない苛立ちがトラブルにつながっていったのではないかと思われる。そこで、A 児の好きなごっこ遊びや踊ったり歌ったりする遊びの中で、自分の思いを A 児なりに話す経験や友達の言葉を聞いたりする経験を積み重ねることを大切にしていこうと考えた。

◎難しい台詞を A 児が言いやすいように換える <年長12月>

クリスマス礼拝に向けて、A 児は、聖書のお話を聞き、降誕劇のイメージをふくらませながらごっこ遊びを楽しんでいた。年中時に大好きだった年長女児が天使の役をしていたので、ごっこの中では天使の役を楽しむことが多かった。しかし、降誕劇の役決めの日、A 児は、「羊の役になりたい」と言う。羊の役は2名だが、A 児を含めて4名の子供たちが立候補する。教師は、一人一人にどうして羊になりたいか理由を尋ねたり、第二希望の役を聞いたりする。話し合いには時間がかかったが、A 児は、最後まで話し合いに参加し、さらに、自分から羊の役を友達に譲ることを申し出た。A 児は、聖歌隊（劇のナレーターをしたり、歌を歌って劇を進めていく役）の役を選ぶ。しかし、聖歌隊の言葉や言い回しは、A 児にとっては難しく、なかなか台詞を覚えられなかった。

羊の役を友だちに譲ったことやその経緯を母親に分かりやすく伝えたと、母親は「どの役でも A は大丈夫！」と、理解してくれた。また、聖歌隊の台詞がなかなか覚えられないことや、自信のない様子なども細かく伝えたが、あまり気にされていない様子だった。

A 児は、歌や踊りが好きだということや A 児が言いやすいように表現を工夫したこともあり、諦めずに取り組んで台詞を言えるようになった。友達も心配していたので、言えた時には皆で喜び合う様子も見られた。クリスマス礼拝当日は、覚えた台詞を自信を持って話したり歌ったりし、取り組んできた成果を発揮することができた。

＜教師の思いと指導上の留意点＞

- ・ A児は、役決めの際、友達の思いを聞いたり受け止めたりしながら最後まで話し合いに参加し、なりたい役を譲った。教師は、A児が友達の思いを理解し、自分の気持ちをコントロールすることができるようになってきたのだと捉えた。そして、そのことを受け止めて認めた。また、譲ってもらった幼児にもA児の思いが伝わるようにした。こうした指導の中では、A児が思っていることを周囲の幼児に伝わるように言葉を添えたり、周囲の幼児の思いや考えをA児に説明したりするよう留意した。
- ・ 聖歌隊の台詞がなかなか覚えられない様子であったので、担任の教師と個別に取り組みながら励ましたり、難しい台詞はA児が言いやすいように換えたりした。
- ・ 縦割り学級の中で年少児や年中児に披露する機会を設けて、「Aちゃんすごい！」と認めてもらう経験も得た。さらに、クリスマス礼拝のリハーサルに参加した年少児や年中児から、感想やA児の素敵だったところを伝えてもらい、自信へとつなげていった。

【まとめ】

- ① その幼児なりに日本語を使う経験を大切にす。

友達とトラブルになった際、A児は自分の気持ちや思いを上手く日本語にできないもどかしさを感じていた。そこで、教師はA児の好きなごっこ遊び、踊りや歌など存分に楽しめるようにしながら、A児なりの表現ができる機会を大切にす。また、その表現を教師が丁寧に受け止める一方で、他児の思いや考えを代弁していった。そのことでA児は伝わらないもどかしさを感じるこが少なくなつていった。

- ② 皆の前で話したり台詞を言ったりする際は、言いやすい表現に換える。

A児は、降誕劇に向けて聖歌隊となるが、台詞が長く言い回しも難しかった。教師はA児が言いやすいように台詞を換えるなど柔軟な対応をしている。そのことで、A児は皆と一緒に台詞を言えるようになり、自信をもって劇に取り組んだ。特に皆の前で発表したり友達と一緒に言葉を言ったりする際は、その幼児にとって何が障壁になっているのかを捉えながら言葉を換えていくこが大切である。

- ③ 異年齢児との関わりの中で自信をもてるようにする。

縦割り保育の中で、年長者から受け止められる経験や年少者から認められる経験をすることで、友達から受け入れられる心地よさを感じたり自信をもったりすることができている。異年齢児との関わりの中で経験していることを丁寧に見とり援助していったこが、A児の育ちにつながつていったものと思われる。

- ④ 国柄や人柄としての大らかな気質も受け止める。

食事や生活リズムの改善を求めると、母親は「分かりました」「大丈夫です」と返していたが、母親にとっては長年にわたつて身に付いた習慣を短期間で改善することは容易なこではないだろう。また、降誕劇への取組に向けて「どの役でも大丈夫！」という言葉は、母親の大らかさを象徴しているようにも思われる。食事や生活リズムの改善は時間がかかる人もいるという意識をもつこや国柄や人柄として大らかな気質をもつ人がいるこを受け止めるこも大切である。

(10) 就学に向けての取組の例

A園が設置されている外国人集住地域の市では、近年、外国人児童の教育に力を入れている。教育委員会は日本語教育担当者を増員したり、教育センターでは就学前から小学校3年生までの長期過程を7ステップに分けた指導計画を作成したりしている。

また、小学校の日本語教室の教師が幼稚園の教育活動を参観し、幼稚園での指導の様子や外国人幼児の実態の把握に努めている。小学校には、外国人児童の個別指導計画を作成することが奨励されている。市として学びの連続性を保障しようとしていることが伺える。

A園では、日本語習得カリキュラムの作成に取り組んでいる。横軸に幼稚園修了までを「日本語を聞き慣れる時期」「日本語に慣れ親しむ時期」「日本語を理解し使おうとする時期」の3期に分け、縦軸には「絵本・ことば・運動・生活習慣」の視点を挙げている。その中でも、特徴的なものは、外国籍適応指導助手（P42参照）による、『取り出し指導』である。A園の特徴でもある『取り出し指導』の取組について紹介したい。

① 『取り出し指導』の方法

- ・助手が勤務する日の昼食後12時30分から30分程度、他の幼児が学級で絵本の読み聞かせを聞いている時間に、他の保育室で、5歳児を対象として、外国人幼児の半数程度の数人をグループに編成して行われている。
- ・グループのメンバーは、教師と助手とが相談して、その日の個々の体調、集中力や他の幼児との関係を考慮して決めている。

② 『取り出し指導』の内容

○ 「日本語を聞き慣れる時期」

- ・すぐに日本語を教えるのではなく、外国人幼児の母国であるブラジル連邦共和国の絵本を、母語であるポルトガル語で読み聞かせをしている。保護者が長時間勤務している外国人幼児にとって、絵本の読み聞かせの機会を得ることは大変重要である。
- ・さらには、外国人幼児が好きな絵本を選んで、読んでもらえるような機会も設けている。このことによって、絵本に興味を持ち、絵本の楽しさが味わえるようになっていく。
- ・しかし、ブラジル連邦共和国の絵本は手に入りにくいという問題がある。そこで、日本の絵本の読み聞かせを行い、翻訳したり、説明したりしながら読むよう工夫している。徐々に絵本を通して、日本語を聞き慣れるようになっていく。

○ 「日本語に慣れ親しむ時期」

- ・初めは、生活に必要な言葉として、「おはよう」「いただきます」等の挨拶をすることをねらいとしている。
- ・徐々に、「〇〇です」と自分の名前を言うような場面を意図的に作っていく。しかし、自信がなかったり恥ずかしがったりして、言えない幼児が多い。その時に、手作りのマイク等を向けると、抵抗感を持たず、興味を持って言おうとするようになる。
- ・取り出し指導で身に付けたことを、運動会や誕生会等での改まった場で言う等、日々の教育活動と関連付けて行くことが大切である。
- ・物の絵が描かれたカードを使って、物の名前を知らせ、復唱させ、助手が言ったカードをカルタのように取る遊びをしている。このことによって、身近な物の名前を覚え、日本語に慣れ親しんでいく。

○「日本語を理解し使おうとする時期」

- ・絵カードは物の名称であるが、しだいに、「何をしているか」という動作に関わる絵を見せ、「手を洗っています」「歯を磨いています」「階段を登っています」等の日常生活に必要な言葉を覚え、使おうとするようになる。
- ・あいうえおの歌を歌い、50音の中から自分の名前の文字を探したり、いち、に…と数唱し、1から順に線を繋げて絵にしたりと、文字や数字に対しても興味を持てるように指導している。
- ・外国人幼児は、椅子の座面に足を乗せたり、肘を付いたり、姿勢があまりよくないことが多い。このことを考慮し、小学校の机と椅子を使用することで、就学への意識を持たせている。

③ その他の就学に向けての取組

就学に向けての取組は、外国人幼児の『取り出し指導』だけでなく、全体への指導の中でも工夫が見られたので紹介したい。

○カルタとり

- ・力関係を考慮して数人のグループを作り、教師が読み手となってカルタとりをする。どのグループも同じカルタを使用することで、全員の幼児が参加することができる。
- ・正座をし、手は膝に乗せ姿勢を正す、「はい」と言って取る、先に触った人の勝ちである等のルールを作っている。
- ・外国人幼児に対して、教師は読みあげる前に文字札を見せ、文字の形で判断できるように配慮している。
- ・しかし、「い」と「こ」、「し」と「つ」等は、置かれている位置によって間違えやすい。外国人幼児の中には取れないと泣きだし、すねることがある。そのような時は、外国籍適応指導助手が気持ちを受け止めたり、ルールを確認したりする。それが頻繁になると日本人幼児が待ちきれずに「早く」「やろうよ」等と言い、外国人幼児の気持ちの切り替えを促している。

○出席カードへの記入

- ・ひらがなで書かれた幼児名の名簿の欄に、出席したら自分で○を書く、次は△を書く、□を書くというように、鉛筆を使って書くことに慣れるように指導している。
- ・さらに、名前を薄く印刷し、その名前をなぞる。次に、名字と名前をなぞる。なぞらずに名字と名前を書く。横書きが慣れたら、縦に書くというように、段階を踏んで指導をしている。外国人幼児も慣れて、書けるようになっていく。

【まとめ】

外国人幼児が日本の小学校に入学するためには、個々の幼児の発達を捉えて指導することも大切であるが、就学の見通しをもって、計画的に、継続的に指導することが大切である。就学時健診の頃から始めるのでは、遅いと考えられる。5歳児の前期には、発することのできる語彙、理解することのできる語彙を確認する必要がある。

3 考察

本研究では、外国人幼児を受け入れている様々な地域 10 カ所の幼稚園において、在籍する外国人幼児が園で活動する様子を記録してもらった。記録の視点は、受け入れ時に教師が指導の中で困ったことや気になったことといった課題、及びその課題をどのような指導上の配慮や工夫で解決してきたのか、その時に生じた様々なエピソードをまじえて記入してもらった。ここでは 10 園の記録から明らかになった、外国人幼児を受け入れる際の配慮事項や課題を解決する工夫についてまとめる。

(1) 事例から明らかになった教師の困り感や課題

① 言葉が通じず不安定になっている幼児への対応に関する教師の困り感が大きい。

共通する幼児の実態としては、在籍する外国人幼児は、日本語を全く話せない、あるいは挨拶や簡単な単語は話せるが、日本語での指示が理解できないなど、園生活をする上で言葉が通じないということである。このことが教師の最大の悩みとなっていて、まず解決しなければならない課題である。

② 同じ母語を話す幼児が複数在籍すると、日本語を習得するチャンスが少なくなる。

同じ母語を話す幼児が複数在籍すると、その幼児同士でコミュニケーションがとれてしまい、日本人幼児と交わらずに過ごせてしまうという課題が見えた園もあった。幼稚園においては、遊びを中心とした総合的な指導が行われており、母語を中心としたコミュニケーションによって、外国人幼児が遊びを発展させ豊かな体験をすることも可能であり、園生活だけを見れば特に問題は起こらないように思われる。しかし、幼児は、幼稚園修了後、地域の小学校に入学することを考えたとき、大きな問題が起こることは予測できることである。就学すると、日本語で考えたり、読んだり、書いたりすることが必要となってくるからである。

母語を尊重することは大切だが、幼稚園修了後、日本語を中心としてコミュニケーションツールとしている小学校に入学するのであれば、小学校生活に円滑にスタートできるようにするための配慮が必要である。

③ 皆で片付けるとい生活習慣の違いが理解されにくい。

日本の幼稚園の多くが、遊んだ後は次の活動を始める前に皆で片付ける。自分が使ったものを自分で片付けるのが基本だが、その片付けの最後は皆で「きれいになったかな」と確認し、きれいに片付いた心地よさを皆で味わうことで片付ける習慣が定着していくと考えていることが多い。しかし、このような生活習慣がない外国人幼児にとっては、例えば、自分が遊びに使っているものを周囲の幼児が突然「片付けだよ」と言って遊具を取り、片付けようとすれば、遊具を取られてしまったと感じたり、自分の行動を否定されたと受け止めてしまったりして、学級の幼児や教師との関係を悪くしてしまうこともあった。皆で片付けるとい生活習慣の多い日本の多くの学級で行われている園生活の決まりや約束が理解されにくいのである。

④ 自分の思いを表現することに関する課題は、入園する時の年齢によって違う。

3歳の時に入園すると、周囲の幼児も自分の興味のあることを楽しんでいて、言葉でのコミュニケーションよりも表情や遊びの中で動きをまねたり同じリズムで動いたりすることを楽しんでおり、外国人幼児もあまり言葉を必要としない。しかし、5歳の時の入園になると、周囲の幼児は言葉でのコミュニケーションがある程度成立しており、外

国人幼児にとってはその内容が理解しにくい。また5歳児として幼児なりのプライドや葛藤から自分の複雑な気持ちを表現できず困ってしまい、かたくなに話をしようとしなない姿などの課題がみられた。外国人幼児が何に困っているのかをしっかりと捉えて関わっていくことが求められる。

- ⑤ 保護者は日本語が分からず、幼稚園の生活の決まりに対する理解や協力が得にくい。
園生活や園便りなどについての説明をどうするかが課題となっている。行政から通訳ができる人材が派遣される地域もあるが、このような制度は集住地域や多国籍の居住者が多い地域などに限られ、ほとんどが保護者や地域の人材の力を借りて対応している園が多かった。また通訳がついても、個人面談では、自分のプライバシーに関わることなので、保護者自身の信頼のおける人を介してでなければ話せないといった事例もあり、保護者の対応についても、単に言葉のことだけを解決すればよいということではない。幼児・保護者一人一人の気持ちに寄り添い、安心して生活していくための方策が求められるのである。

(2) 日本語指導が必要な幼児に対する指導上の留意点

- ① 外国人幼児が安心感を持てるようにする。
入園当初の不安感などは、教師との信頼関係が築かれることによって、安心感につながる。幼児に寄り添い、遊びに付き合い、園生活が楽しいことを伝えていくことが重要である。幼児が教師を頼りに思い、ついて歩くなどの姿が見られ、安心できるようになるまで、細やかな配慮がなされる必要がある。
事例の中で実施された方法として以下のようなことが挙げられる。
・教師は、言葉の理解や発語を促すだけでなく、スキンシップをとりながら、信頼関係を築き、幼児の安心感につながる関わりを心掛ける。
・得意な遊びの中でよさを認めていく関わりを心掛け、学級の中に位置付けていく。
・好ましくない行為をした時には、禁止や制止をするだけでなく、やりたい気持ちを受け止めながら、どうしたらよいのかを知らせていくようにする。
・皆でつながっていける「鬼ごっこ」などの遊びを取り入れ、一緒に遊べて楽しかったという感覚を持てるようにする。
・遊びが充実することで、会話が増える。「すしや」「すもう」などは、外国人幼児も興味をもって関わることができる遊びである。楽しめる遊びを積極的に提示したり、おもしろさを共感したりする。
- ② 幼児が安心して心を開くように、言葉掛けの中に母語を入れてみる。
携帯アプリを活用したE園の事例や話し掛けるときに「アクア」という母語を使ったA園の事例などから分かるように、教師が挨拶や簡単な言葉のやり取りの中で、単語など一言でも母語を使って話をすると、幼児は安心する姿が確認できた。こうしたことがきっかけとなって、心を開いたり自分の思いを母語をまじえて話したりするようになるので、教師は、積極的に母語を知る努力が必要である。母語で教師の意図をすべて伝えることは困難だが、心を開くきっかけになると考える。
- ③ 母語で自己表現してもよいことを感じ取らせる。
年齢があがると、日本語が話せないといけなさと感じてしまうことがある。外国人幼児にとって、話すことは自己表現であるので、まず母語で話してよいという雰囲気をつ

くるようにしていきたい。

F園の事例にあるように、教師や友達の前で「〇〇って、△△語では何て言うのか教えて」などと、話すきっかけをつくることが大事である。

④ 通訳等の活用にあたっては、日本語を覚える必要性を持たせていく。

日本語が分からない外国人幼児にとって、通訳は自分の思いを伝えることができる拠り所となる存在である。事例の中で、通訳やサポート指導員などが幼児の遊びの中で適切に対応している様子が見られる。

例えば、D園の事例に日本語のサポート指導員が遊びの仲間に入る時の言葉『入れて』や遊びを始める時の言葉『鬼ごっこするもの、この指とまれ』等を、遊びに入りながら伝えているエピソードがあった。ここでサポート指導員が目指しているのは、通訳して外国人幼児を支援しているだけではなく、外国人幼児が自ら人とつながっていくための言葉を覚えて使えるようにしているのである。このことが、他の場面でも外国人幼児が自分で遊びの仲間に入れることにつながるのである。

⑤ 通訳等の存在は有効であるが、教師との連携を図ることが大切である。

「日本語サポート指導」や「外国籍適応指導助手」のように、直接教育活動に加わりながら、生活に必要な言葉を場面に応じて指導ができる人的配置をしている園もあった。この配置は、外国人幼児に適時に日本語を教えることができ、幼児同士をつないでいくこともできるので、その果たす役割は大きい。しかし教師の意図がしっかり伝わることによって、教育効果があげられるものである。教師は、限られた時間の中で、保育をしながらサポート指導員等と連携を図っていくことが重要である。

⑥ 幼小の接続の視点からも日本語の理解の程度を確認しておく必要がある。

同国籍の幼児が複数在籍する学級では、日本語を使わなくてもコミュニケーションがとれるので、幼児は楽しく遊び、園生活を過ごすことができる。そのため、日本語を習得する機会が少なくなるという課題が生じやすい。幼児の遊びや生活が円滑に進んでいると教師は、幼児が言語を習得し、コミュニケーション能力が身についていると捉えやすい。しかし、幼児は周囲の動きを見て真似をしているだけの場合も多く、小学校生活が始まって初めて日本語を理解していないと気付くこともある。そこで、小学校生活が円滑に進められるよう、幼小の接続の視点からも一人一人の幼児の日本語の理解の程度を確認しておく必要がある。

⑦ 幼児期から遊びや生活の中で、段階的に日本語の指導を行う必要がある。

集住地域では、個別の日本語指導を行っている。就学すると、日本語で考えたり、読んだり、書いたりすることが必要となってくるからである。就学を見据えて、5歳児の5、6月頃に、日本語がどの程度習得されているかを個別指導等の中で確認しておき、日本語に親しみ、友達と関わる楽しさや社会性を身に付けていかれるような見通しをもった段階的な指導が必要である。

⑧ 友達とのやり取りができて、日本語が分かっていると思ってしまうのは危険である。

G園の事例は、概ね日本語を理解するようになってきている外国人幼児についてであるが、経験画を描く場面で、教師が活動の振り返りをしながら絵を描くように話したところ、対象児は教師の意図と異なる絵を描いた。このエピソードから、学級全体への話では、説明が長い文であったり見て分かる表示がなかったりするので、外国人幼児には理解が難しいことが分かった。

友達とのやり取りができてきているからとあって、日本語が分かっていると思い込んではいけないという例である。複雑な文脈は外国人幼児には理解しにくいことを理解し、日本語の活用能力を把握して対応するなど、適切な言葉掛けや個別の関わりを配慮していく必要がある。

また、劇遊びなど、学級で取り組むような活動の際には、その幼児が無理なく発話しやすい言葉に合わせて台詞を決めていくように援助するなどの配慮が大切である。

⑨ 絵カードなど視聴覚教材があれば分かるという思い込みは注意が必要である。

絵カードやイラストなどの視聴覚教材は、言葉を覚えるのに有効であるが、事例に出てきた「表情カード」は、幼児に伝わらなかったようである。また「片付け」のようにいろいろな行動を表すものは、絵で示しても意図が伝わりにくい。むしろ遊具や用具は、実物を見せたり、写真を使ったりした方が、物と一致して名前を覚えやすい。絵カードやイラストの表示物はそれぞれのもつ有効性を見極め、視聴覚教材を使えば理解できると思いたないように注意したい。

⑩ わらべうた等は言葉と動作が一致しているので、言葉を覚えるのに有効である。

「あっちむいてホイ」は言葉が単純で、簡単な動作がついていて、相手と気持ちを合わせられる遊びである。また「あぶくたった」は、日常生活の中で使う言葉と動作が入っているので、遊びやすく、大勢の友達と一緒に楽しむことができる。言葉を覚えていくきっかけとして、わらべうたや集団遊びも積極的に取り入れるとよい遊びである。

⑪ 外国人幼児への関わりは教師の姿がモデルとなる。

他の幼児が偏見を持たずに接していくよう、外国人幼児への関わりを配慮すると、教師の姿勢は外国人幼児の関わりモデルとなっていく。

日常会話ができるようになってきても、遊びのルールが理解できないとトラブルになり、自分の気持ちを順序立てて話すことは難しいこともある。幼児の複雑な感情は、教師が幼児の表情やしぐさから感じ取って、友達に伝えていくように配慮していくことが大切である。

グループ名など、生活の中で自然に外国人幼児の母語を使うようにすると、学級の幼児が外国語に興味を持ったり、親しんだりする機会につながる。

事例の中には、担任以外の園長、副園長、主任教諭などの教師が関わり、思いを聞いてもらったり、友達に気持ちを伝えてもらったりして、トラブルを解決できている場面が多く見られる。園内のいろいろな教師が頼れる存在になることが大切である。

(3) 日本語指導が必要な幼児の保護者への対応

① 園生活の仕方を知ったり教師とのコミュニケーションをとれるようにしたりする。

幼児が安心して通園するためには、保護者が園の生活の仕方を理解し、信頼を寄せることが大切である。そのためには、園生活や園の方針を説明してくれる通訳、学習支援員、外国籍適応指導助手などが配置されると、理解が進みやすい。しかし、その配置がない園では、保護者や大使館の職員など、地域の人材を生かして、理解推進を工夫している。

また、個人面談には通訳でなく、保護者自身の信頼のおける友人等を連れてくることもあったことから、プライバシーに関わることは、保護者の気持ちに寄り添って、十分に配慮することが大切である。

② 保護者同士の支え合いを促していくことが大切である。

事例では、通訳などが配置されていない園では、母語が話せたり、英語で通訳をしてくれたりする保護者が支えている様子が多く見られる。外国人保護者が困っている時に、保護者同士で助け合うような雰囲気づくりを醸成することが必要である。また、園行事を丁寧に説明する機会をつくるなどの経営上の工夫も大切である。

B園の事例では、他の保護者がきめ細やかに特別な手紙や資料を作成してくれて、行事に参加することができたが、いつでも用意してもらえると認識されないように、園は保護者の好意でしてくれていることをしっかり伝えている。保護者同士の関わりが特定の保護者に負担がかかり過ぎないようにしていくためには、このような配慮も大切である。

③ 「大丈夫」という言葉には、いろいろなメッセージがある。

園から保護者に、行事や活動、準備についてなどを理解しているかどうかを聞くと、「大丈夫」という答えが返ってくることが多い。この「大丈夫」は分かっている、理解しているということもあるが、逆に「それ以上、言わないで」や「今は聞きたくない」などの気持ちが裏側にあり、いろいろなメッセージを含んでいることも多い。時間の感覚や文化の違いなど、日本人と異なる感覚を持っていることもあるので、「大丈夫」という言葉が返ってきたときには、保護者の気持ちを探り、必要な支援を配慮するようにすることが大切である。

④ 時間の感覚は一人一人異なるものと思って臨むことが大切である。

日本人の時間の感覚は、正確さに定評がある。特に都市部の公共の交通機関は時間通りに運行されるのが当たり前である。徒歩通園をしている幼稚園等では、登園時の開門時間は10分から15分くらいで、その時間内に登園する。しかし郊外の園などでは、通園地域が広く、送迎に車を使っている園では、駐車スペースが限られると、自ずと登園時間に幅を持たせることが必要になる。このように、地域や個人によって、時間の感覚は異なるものであり、外国人幼児の保護者には、それを配慮した対応が大切である。

⑤ 子供のことについて話す際には、伝え方に気を付けていく。

H園の事例では、保護者に「幼児のために、こうしてほしい」と伝えたいことが多かったが、「うちの子はいい子です」と、養育の態度を改める様子はなかった。しかし、園長が丁寧に保護者の話に耳を傾けたり、幼児のよいところを十分認めるような伝え方をしたりしていくと、保護者から相談をしたり、教師の話を受け入れたりするようになってきている。保護者の思いを受け止め、信頼関係を築きながら、指導を進めることが大切である。

⑥ その国の文化や風習に関心を寄せていくことが重要である。

国によっては、宗教や文化などによって、配慮を要する事案が生じることがある。教師は、その国の文化や風習に関心を寄せて対応を考えていくことが重要である。しかし、思い込みで判断してしまうと、実は無駄な配慮であったり、同国の人でも同じ捉えではなかったりするので、その都度、当事者に確認することが大切である。

⑦ 多言語のガイドブックを活用する。

外国籍の家庭が多く居住する地域には、日本の文化や習慣、園の生活の仕方などについて、多言語で書かれたガイドブックのようなものを用意してある地域もあるので、こうした情報を園でも把握し、活用することが必要である。

V 研究の成果と課題

本研究においては、調査研究Ⅰとして、幼稚園における外国人幼児の受け入れ状況の実態を把握するとともに、幼稚園を所管する行政担当部局への質問紙調査を行った。また、調査研究Ⅱとして、外国人幼児が在園している幼稚園への面接調査を行い、二つの調査から、外国籍等の幼児が在籍する幼稚園の教育上の課題と成果を明らかにし、幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方について考察することとした。

そこで、ここでは、2つの調査から明らかになったことを総合的に考察する。

1 研究の成果

(1) 外国人幼児の在籍は、今後増えることが予想される。

質問紙調査から、外国人が多く居住する調査対象地域の幼稚園等の約半数以上に外国人幼児が在籍していることが分かった。平成26年度から平成28年度9月までの間に外国人幼児を受け入れた園の割合は、少数地域の岩手県以外では65.0%以上となり、特に多い東京都では93.9%と突出した割合で、国際化の顕著な部分が出ていた。最も外国人の居住が少ない岩手県でも、25.9%の幼稚園に外国人幼児が在籍している。今後、益々グローバル化が進むと各地の数値が上がることも予想されるため、各園での外国人幼児の受入れに対する配慮が必要になる。

(2) 教師は、言葉の問題で困ることや気になることを様々な工夫をして解消している。

質問紙調査で教師が気になることの上位は、「教職員からの指示が分からない」「話を聞こうとしない」「列に並んだり、順番を守ったりしない」であった。これらのことは、外国人幼児本人にとっては意味の分からないことである。それを解消するために、教師は、幼児が安心して園生活を送ることができるよう、近くに座ったり手をつないだり、簡単な挨拶の言葉の母語を使うなどしてコミュニケーションの方法を多様に工夫している。

(3) 通訳等の活用は即効性があるが、外国人幼児自らが話したくなる工夫が必要である。

教師の話が簡単に伝わらない時には、通訳、学習支援員などが配置されると理解が進むことが分かった。母語を話せる人がいることは、園内で母語を使うことも含めて、外国人幼児の安心感にもつながるので効果がある。しかし、質問紙調査のクロス集計からは通訳等のサポートをする人の存在があっても「話をしようとしなない」姿の未解決の割合が高いという結果も出てきた。このことは、理解を助けるために通訳する支援は、入園から早い時期の言葉の理解等には効果的だが、外国人幼児自らが思いを話すということには簡単につながらないことを示している。自らが話したくなるようにするためには、担任の教師と通訳サポートとの連携が深められてこそ効果が上がるのではないかと考えられる。

(4) 遊びを通して外国人幼児は安定し、周囲の幼児は多様性を受け止める。

「友達と遊ばない」という気になる姿も6カ月以内で55%が見られなくなっている。5歳児の「友達と遊ばない」の未解決の割合0%という結果からも遊びの効果分かる。また、事例の中からも見られるように、その幼児の得意な遊びを取り入れることや、わらべうたや鬼ごっこなど、友達とつながりを持てる遊びや言葉のリズムを感じられる遊びを取り入れると楽しさが伝わり安定することが読み取れた。遊びを通して園生活が安定するのは幼

児の特性である。遊びを通して学級の他の幼児も外国人幼児と自然と一緒に遊んだり、困ったら助けようとするなどの変容も見られる。言葉が分からない外国人幼児の場合でも遊びは最大の決め手になるし、園内の幼児たちにとっても多様性を受け入れる大きな力になっている。

(5) 多くの協力体制が困難感を乗り越える力になる。

教師の言葉が伝わらないことでは、保護者も困っている。各幼稚園等でどのような支援があるかという設問では、母語を話せる人が通訳してくれるというのが44.4%で、その76.4%が通訳のできる保護者である。園内の保護者が大きな力を発揮している。この大きな力を活用する際に、時に課題となるのが支援される側のプライバシーの保護の問題である。支援される側の保護者が、他の保護者には聞かれたくないことなどもあることを常に念頭に置きながら、通訳のできる保護者の支援を得る配慮が必要である。

また、園内では担任の教師と外国人幼児との信頼関係が基本ではあるが、その他の園内の教師等がそれぞれの場所や立場で、組織の協力体制を作り上げる中で、幼児や保護者と関わるのが大切である。

(6) 外国人幼児の国の言葉や文化を取り入れることは、国際理解教育の基盤を培う。

「ケ．当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた」、「ク．様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした」の働き掛けについては、他の働き掛けの度数に比べてかなり少ないが、実践すれば外国人幼児と共に園生活を過ごしている周囲の幼児の変容を促しており、実践の有効性は高いと言える。このことから、外国人幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育活動に取入れることは、学級経営的にも効果が大きい。そこで、様々な外国の文化理解や言語に関する研修を充実させることが求められる。

外国人幼児の国の言葉や文化を知ろうとすることは、意味深い。教師の姿をモデルに学級の幼児たちも同じように興味をもち、知りたいと思ったり、話してみたりすることで、友達の存在と共に相手を思いやる気持ちを育てたり、多文化に触れて視野を広げることができる。行政による研修会などに教師が参加する機会を得て、固定概念に縛られることなく常に情報をキャッチする敏感な感覚を身に付けることや、応用力のある対応ができるように感性を磨くことが国際理解の基盤を培う教育の学級経営に結び付くと考えられる。

2 今後の課題

(1) 外国人幼児一人一人の困り感に的確に対応するコミュニケーションツールの開発

日本語での指示が理解できないなど、園生活をする上で言葉が通じないということが外国人幼児の大きな悩みである。例えば、園生活のきまりや約束が理解できないことで、自分の行動を否定されたと受け止めて不安定になることもある。生活の中で必要な行動をその幼児にとって分かりやすい方法を駆使して伝える工夫が必要になる。カードやイラストなどの視聴覚教材は、単語を覚えるのに有効であるが、繊細な感情表現には使えない。実物や写真を見せる方が効果的な場合もある。何が有効かを見極めることが重要であり、日本語が分かるようになるために多方面からのアプローチが必要である。そのためには、園

内だけの工夫に留まらず、地域や行政で実施されている情報をインターネット配信などから手に入れて、的確に対応するコミュニケーションツールの開発が課題となっている。

(2) 外国人幼児の就学や今後を見通した母語の尊重と日本語の指導

早く日本語を覚えてコミュニケーションが取れるようにと考えがちではあるが、それぞれの家庭の方針もあり、母語を大切にすることは当然のことである。外国人幼児が今後、どこの国に居住するかということも考慮し、個々の家庭が判断することが基本である。教師はその意識を持ちながら、保護者と意思疎通を図り、今何が必要なことかを共に考えていくことが課題である。

また、園内に同じ母語を話す幼児が複数在籍すると、その幼児同士でコミュニケーションがとれ日本語を覚えようとしなない現象も出てくる。日本に住んでいる間は、生活に必要な単語などは、少しずつでも使えるようになる方が困らないし、すぐに小学校へ進むとなれば、日本語で進行する小学校の授業に対応できなくなる。どの程度の語彙力を持っているかを見極め、今後の生活や学習に必要な言葉については、5歳児進級の時から無理のないよう計画的に指導していくことも必要で、事例(10)のように集住地域で行われている「取り出し指導」についても今後は考えていく必要がある。

(3) 保護者とのコミュニケーションに関する支援の充実と適切な活用

確実に伝えたいことが伝わらないという思いは、保護者にも教師にも互いにある。通訳、翻訳、ガイドブックなどの必要性は高い。行政から通訳等の人材が派遣される地域もあるが、多国籍の居住者が多い地域に限られるなど、まだまだ十分とは言えない。また、個人のプライバシーに関わることの場合、通訳できれば誰でもよいという訳にはいかない。必ず、保護者自身の気持ちを確認しながら、必要な支援を見つけていくことが課題である。

(4) 外国の言葉や文化等を学ぶ研修の機会の充実

外国人幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育活動に取入れることは、学級経営的にも効果が大きいことが調査の結果から明らかになっている。そこで、様々な外国の文化理解や言語に関する研修を充実させることが求められる。

日々、目の前の困難感への対応に追われてしまうことは切実なことであるが、余裕を持って指導に当たるためには、広い視野を持ち、多くの情報を取り入れていく必要がある。外国の文化や風習について知る機会、学ぶ機会に多く触れることにより、対応策にも広がりが出てくる。今後、益々グローバル化が進む中、多文化共生社会を築くために教師が学び、その姿勢がモデルとなることが幼児にとっても国際理解の基盤を培うことにつながるであろう。誰に対しても偏見を持たず、一人一人を大切に考える考え方を身に付ける教師の存在こそが重要である。そこで、行政による研修の機会が多く地域で実施されることが望まれる。

おわりに

幼稚園等に在籍する外国人幼児やその保護者は、言語だけでなく、生活習慣や文化も多様であり、教師は柔軟に受け止め対応する必要がある。研究の中では、当該幼児とその保護者の不安感を取り除き、意思疎通ができるようになることを目指して、様々な努力がなされている幼稚園等の実態を捉えることができた。この各園の努力や研究の成果を幼児期の教育内容等の深化・充実に資するために、最も心に留めておきたいと考えるのは、以下の3点である。

一つ目は、国際理解の基盤を培う学級経営と研修の有効性との関連である。幼稚園等が求める支援の中で、日本文化や伝統に関する研修や外国人幼児を受け入れるための言語や配慮を学ぶ研修についてのニーズは少なかった。しかし、教師の配慮の重点と外国人幼児の変容との関連を見ると、それらの研修は、外国人幼児に対する即効性が高いだけでなく、学級の他の幼児の思いやり行動や外国の言語や文化への興味が高くなることが明らかになった。このことから、外国人幼児への配慮は、該当の幼児だけに対するものではなく、常に学級経営の視点と重ねて考えることで効果を大きくすることができると考える。

二つ目は、通訳等の支援の方向性と必要性を見極めることの重要性である。幼児も保護者も教師も言葉が通じずに困り、思いを通じさせたい願いは強い。入園当初における通訳等の存在は大きく、必要性は高い。しかし、その後の課題の解決率が伸びにくいことを考えると、幼児同士のコミュニケーションを支援する通訳等については、どこまで通訳が支援し、どこから外国人幼児が自分の思いを自分自身で表現しようとする意欲を引き出していくか、支援の方向性や必要性を見極めることが重要であり、その頃合いを見極める力こそが、教師の専門性と考える。

三つ目は、多様な人々との出会いが、幼児の心をはぐくみ、多様性を受け止めよりよい社会をつくり出そうとする国際社会の基盤を培うことである。幼児にとって自分の知らない言語を話す人、自分と異なる習慣や考え方をする人々と出会う経験は、多様な考え方を知ることにつながる。また、自分の思いをうまく言葉で表現できずに困っている友達と出会い、友達を助けようとしたり相手の思いに心を寄せたりしながら、身振り手振りや表情などで幼児なりに知恵を働かせることによって、気持ちが通じ合った喜びを感じる体験は、今後の社会の多様性に対応できる力をはぐくむと考える。

このように考えた時、外国人幼児との関わりは、今求められている国際理解の基盤をはぐくむとともに、豊かな人間性や学びに向かう力をはぐくむものであり、幼児期の段階から指導を充実させていく必要がある。そのためには、本研究で明らかになった研修の有効性に鑑み、外国の文化や言語に関する研修を実施するための財政的支援が求められる。また、外国の文化を取り入れた教材やその取り入れ方に関する研修を充実させ、具体的な実践や学級経営、園内体制の充実に資するよう、多様な研修の実施が望まれる。さらに、行政機関だけでなく国際理解に貢献しているNPO等による支援など、地域の様々な資源を活用し、教師の視野を広げる学びの機会を充実させていきたい。

資料 質問紙調査用紙（幼稚園等対象）

日本語指導が必要な外国籍等の幼児に関する調査

この調査は、貴園に在籍する（あるいは、在籍していた）日本語指導が必要な外国籍等の幼児（以下外国人幼児等）の指導上の課題及び留意点についてお聞きするものです。

※「日本語指導が必要な外国籍等の幼児」とは、幼稚園等の遊びや生活を進める上で、幼児あるいは保護者の日本語能力が十分ではない外国人幼児等であって、日本語の能力に応じた特別の配慮を必要とする幼児を指す。この特別の配慮とは、幼児の文化的背景を踏まえた上で、幼稚園生活への適応や人とのかかわりを深めていく観点から、生活指導、保護者支援等を含めた総合的、多面的な指導、支援が想定される。

※当アンケートにおいて、幼稚園・幼稚園型認定こども園における「教育」と幼保連携型認定こども園における「教育及び保育」をまとめて「教育・保育」と表記する。

回答結果は別紙に記した文部科学省委託研究以外の目的には使用いたしません。また、回答結果は全てコンピューターに入力され数字として処理され、回答用紙は細かく裁断し廃棄されます。どの園がどう答えたかが公表されることは一切ありません。貴園の現状について率直にお答えください。

ご協力よろしく願いいたします。

貴園について以下の質問にお答えください。

- (1) 貴園の所在地（ _____ 都道府県 _____ 市区町村）
- (2) 貴園は①幼稚園 ②幼稚園型認定こども園 ③幼保連携型認定こども園
 ④その他（ _____ ） ※当てはまる番号に○印を付けてください。
- (3) 学級数（満3歳～5歳児） 合計（ _____ ）学級
- (4) 園児数（満3歳～5歳児） 合計（ _____ ）人
- (5) 9月1日現在、外国人幼児等が何名在籍していますか。 [いる（ _____ 名、 _____ か国） いない]
- (6) 貴園では、平成26年度から平成28年度までに外国人幼児等を受け入れたことがありますか。（ある ない）
- (7) (6) で「ある」とお答えいただいた方にお尋ねします。
 - ①平成26年度から平成28年度に何名、何か国くらいの外国人幼児等が在籍していましたか。途中入園、途中退園を含めて結構です。（ _____ 名）（ _____ か国）
 - ②母語が同じ外国人幼児等が複数名同時に在籍していましたか。 （はい いいえ）

これまで一度も外国人幼児等を受け入れたことがない園は、これで調査は終了です。このまま返送してください。

これからの質問は、貴園で外国人幼児等と関わった経験が比較的多い先生方にご回答いただければ幸いです。

問1-(1) 貴園に在籍している(していた)外国人幼児等の入園当初の様子について以下の問いにお答えください。
 一番印象に残った(または残っている)お子さんについてご回答ください。

そのお子さんは 歳児(入園時の年齢 歳) 母語又は国()

①ア～コの項目について、入園当初どの程度見られましたか。当てはまる数字に○印を付けてください。

②ア～コの項目の姿が見られなくなったのは入園後何ヶ月頃ですか。()内に数字を入れてください。

(現在でもその姿が見られる場合や卒園まで継続して見られた場合は空白にしてください。)

項 目	①			②
	よく見られた	見られた	あまり見られない	見られなくなった時期
ア 教職員からの指示が分からない	3	2	1	()ヶ月頃
イ 絵本に興味を持たない、楽しめない	3	2	1	()ヶ月頃
ウ 歌を歌うことに興味を持たない、楽しめない	3	2	1	()ヶ月頃
エ 話をしようとしめない	3	2	1	()ヶ月頃
オ 友達と遊ばない	3	2	1	()ヶ月頃
カ 他人から触れられることを嫌がる	3	2	1	()ヶ月頃
キ 必要以上にくっついたり、抱きついたりする	3	2	1	()ヶ月頃
ク 列に並んだり、順番を待ったりしない	3	2	1	()ヶ月頃
ケ 自分の使った物は片付けるが皆で使った物を片付けない	3	2	1	()ヶ月頃
コ その他(自由記述)	3	2	1	()ヶ月頃

問1-(2) 上記項目(ア～コ)のうち、最も気になった項目の記号を一つ選んで右下の□に書いてください。

問2 貴園では、外国人幼児等に対し指導上どのようなことに配慮していますか。以下の各項目について、当てはまる数字に○を付けてください。

項 目	とても配慮した	配慮した	あまり配慮していない
ア 「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	3	2	1
イ 近くに座る、手をつなぐ等、個別の働き掛けを行った	3	2	1
ウ 日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	3	2	1
エ 話したり表示したりするとき、イラストなどでの表示を多くした	3	2	1
オ 周囲の友達から外国人幼児等に声を掛けるように促した	3	2	1
カ サポートする大人が、近くにいるようにした(通訳者を含む)	3	2	1
キ 学級担任だけでなく、園全体で当該幼児に配慮する体制にした	3	2	1
ク 教職員は、様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	3	2	1
ケ 当該幼児の国の文化や生活に関する遊びや教材を教育・保育に取入れた	3	2	1
コ その他(自由記述)	3	2	1

問3 貴園では、保護者との関係や保護者同士の関係について、入園当初どの程度困難を感じていましたか。一番印象に残った保護者についてご回答ください。

その保護者の母語又は国（ ）

①ア～クの項目について、入園当初どの程度感じられましたか。当てはまる数字に○印を付けてください。

②ア～クの項目の姿が気にならなくなったのは入園後何ヶ月頃ですか。（ ）内に数字を入れてください。

（現在でもその姿が見られる場合や卒園まで継続して感じられた場合は空白にしてください。）

項 目		①			②
		強く感じた	感じた	あまり感じない	気にならなくなった時期
ア	幼稚園の決まり（欠席連絡の必要性等）が分からない	3	2	1	（ ）ヶ月頃
イ	園だより等の印刷物の内容が伝わらない	3	2	1	（ ）ヶ月頃
ウ	幼児の育ちや生活の様子を伝えられない	3	2	1	（ ）ヶ月頃
エ	時間感覚に幅があり、登園、降園の送迎が早過ぎたり、遅過ぎたりする	3	2	1	（ ）ヶ月頃
オ	食習慣・食文化（弁当に適切な食材の選択等）の違いに戸惑う	3	2	1	（ ）ヶ月頃
カ	病気や怪我など緊急時の連絡内容が伝わらない	3	2	1	（ ）ヶ月頃
キ	日本人保護者との交流が少ない	3	2	1	（ ）ヶ月頃
ク	その他（自由記述）	3	2	1	（ ）ヶ月頃

問4 貴園では、保護者との関わりについてどの程度配慮していますか。当てはまる数字に○を付けてください。

項 目		とても配慮した	配慮した	あまり配慮していない
ア	「おはよう」などの挨拶や簡単な言葉掛けを母語で行った	3	2	1
イ	子どもの様子や連絡等、個別の働き掛けを行った	3	2	1
ウ	日本語をゆっくり、はっきり話すようにした	3	2	1
エ	伝達事項について、イラストなどでの表示を多くした	3	2	1
オ	他の保護者から声を掛けるように促した	3	2	1
カ	サポートする人・通訳を頼んだ	3	2	1
キ	学級担任だけでなく、園全体で当該保護者に配慮する体制にした	3	2	1
ク	様々な外国の文化理解や言語に関する研修をした	3	2	1
ケ	保護者会等で当該保護者の国の文化や生活に関することを話題にした	3	2	1
コ	その他（自由記述）	3	2	1

問5 学級で共に生活する（していた）他の幼児には、どのような変容が見られましたか。当てはまる番号に○を付けてください。

項 目		とても見られた	見られた	あまり見られない
ア	外国人幼児等の文化的背景に興味を持つようになった（国旗、食べ物、スポーツ等）	3	2	1
イ	外国人幼児等の言葉に興味を持つようになった（簡単なあいさつ等）	3	2	1
ウ	言葉が分からなくても、遊びの中で自然に交わる姿が多く見られるようになった	3	2	1
エ	困っている様子を見ると、助けようとする姿が多く見られるようになった	3	2	1
オ	日本の文化にも興味を持つようになった	3	2	1
カ	その他（自由記述）	3	2	1

問6 外国人幼児等の教育・保育に関して、貴園はア～ウの支援を受けていますか。支援の有無の当てはまる方に○を付けてください。また、支援をしてくれる方について、該当するもの全てに○を付けてください。

項 目		支援の有無	保護者	地域	NPO	行政
ア	母語を話せる人が通訳してくれる	有・無				
イ	外国人幼児等の国の文化や伝統についての情報提供や研修	有・無				
ウ	外国人幼児等を受け入れるための言語や配慮などを学ぶ場や機会	有・無				
エ	その他（自由記述）	有・無				

問7 ア～オについて、必要と考える支援の優先順位をつけて、1～5の数字を記入して下さい。

項 目		優先順位
ア	園行事（健康診断、保護者会等）や必要な時に応じた通訳の派遣	
イ	日本の文化や伝統についての研修	
ウ	外国人幼児等を受け入れるための言語や配慮などを学ぶ研修	
エ	外国人幼児等の指導に関わる補助者	
オ	外国人幼児等や保護者に対応するアドバイザー（医療、生活全般等）	

ご協力ありがとうございました。

公益社団法人 全国幼児教育研究協会
e-mail:admin@zenyoken.org

※アンケートの回答について、情報提供していただける方は、園名と電話番号をご記入ください。

後日、本会より連絡を入れさせていただく場合があります。よろしくお願いたします。

園 名 ()

電話番号 () e-mail ()

資料 質問紙調査用紙（行政対象）

日本語指導が必要な外国籍等の幼児や家庭に対する行政サービス等に関する調査

この調査は、各地域にお住いの外国人居住者の就学前のお子さんに関するアンケート調査です。

貴地域にお住いの日本語指導が必要な外国籍等の幼児（以下、外国人幼児等と記す）の就園、子育ての支援等に関し、現在実施されている行政サービスや幼稚園等への支援等について伺います。

回答結果は、別紙に記した文部科学省委託研究以外の目的には使用いたしません。また、回答結果は全てコンピューターに入力され数字として処理され、回答用紙は細かく裁断し廃棄いたします。どこの自治体がどのように回答したかが公表されることは一切ありません。現在の現状について率直にお答えください。

ご協力よろしく願いいたします。

※「日本語指導が必要な外国籍等の幼児」とは、幼稚園の遊びや生活を進める上で、幼児あるいは保護者の日本語能力が十分ではない外国人幼児等であって、日本語の能力に応じた特別の配慮を必要とする幼児を指す。この特別の配慮とは、幼児の文化的背景を踏まえた上で、幼稚園生活への適応や人の関わりを深めていく観点から、生活指導、保護者支援等を含めた総合的、多面的な指導、支援が想定される。

都道府県・市区町村名

都道府県	市区町村
------	------

アンケートにお答えいただいた方の所属をご記入ください

課

◆人口について（平成28年4月現在）

総人口 _____ 人 在留外国人数 _____ 人 外国人比率 _____ %

◆各施設に在籍している外国人幼児等の人数（平成28年度）を把握していますか。把握している場合は下の枠の該当するところに○印を付けて下さい。

NO	項目	幼稚園	保育所	認定こども園
1	人数を把握している			
2	把握していない			

◆「人数を把握している」に○を付けた方は、下記の欄に人数をご記入ください。（平成28年度）

外国人幼児等在籍数	幼稚園	保育所（3～5歳）	認定こども園（3～5歳）
	人（ 月現在）	人（ 月現在）	人（ 月現在）

問1 ①～③の問いについて、貴自治体が発行している支援全てに○印を付けてください。
(複数回答可)

①外国人幼児等やその家庭への支援について

NO	項 目	○印
1	子育てに関する情報（広報誌、HP等）を多言語で紹介している	
2	就園や子育てについて、外国人専用の相談窓口を設置している	
3	就園に関する情報案内（園の概要、入園手続きの資料等）を多言語で作成している	
4	通訳や翻訳等の手助けをする NPO 法人等の支援団体を紹介している	

②外国人幼児等が在籍する幼稚園等への支援について（各園、保育所ごとにお答えください。）

NO	項 目	幼稚園	保育所	認定 こども園
1	教員等を対象に、外国の文化、習慣等を学ぶ研修を実施している			
2	外国人幼児等に対する指導の参考となる資料（指導資料、外国語会話集等）を作成している			
3	園や保育所の要請に応じて外国人幼児等に対応するための教員等の加配を実施している			
4	園や保育所の要請に応じて通訳ボランティア等を派遣している			
5	園や保育所の配布物を要請に応じて多言語に翻訳している			

③地域との連携について

NO	項 目	○印
1	外国人幼児等の家庭と地域との交流を促進している（子供会、祭り、イベント等）	
2	通訳や翻訳などについて、通訳者を派遣するなどして外国人をサポートしている（人材バンク、ネットワーク等）	
3	外国人のために医療機関との連携をしている（医療機関について多言語での情報配信、通訳者等付き添いの配置等）	
4	外国人幼児等の家庭を支援する NPO 法人等支援団体の活動の推進をしている（団体名、活動内容、連絡先の紹介等）	
5	災害等緊急時の対応について、外国人対応の連絡窓口を設置している	

問2 貴自治体で実施している外国人幼児等や家庭への支援について、成果や課題がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。
〔公益社団法人 全国幼児教育研究協会〕
03-3239-8066 e-mail:admain@zenyoken.org

参考資料 日本語指導が必要な幼児や保護者の参考になる情報に関する資料

<http://www.casta-net.jp/>

かすたねっと…文部科学省初等中等教育局国際教育課日本語指導係が運営
様々な支援リソースへのリンクや教材・手紙例がある。

例えば、多言語の学校運営用語 <http://tg-tools.casta-net.jp/jisho/>

帰国・外国人児童生徒の受入れ実績が豊富な地域で作成・公開された「多言語の学校文書」を
検索 <http://www.casta-net.jp/bunsho/>

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/0000028953.html>

愛知県：社会活動推進課多文化共生推進室 > プレスクール実施マニュアルの作成・普及

<http://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/0000060441.html>

母語教育サポートブック『KOTOBA』－家庭／コミュニティで育てる子どもの母語－を作成しま
した（平成25年4月）…多言語でダウンロード可能

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1320860.htm

外国人児童・生徒のための就学ガイドブック（多言語）…日本の学校制度の説明

<http://www.renrakucho.net/index.shtml>

外国出身保護者のための支援サイト 幼稚園・保育園の連絡帳を書こう！

<http://www.hiragana.jp/>

ひらひらのひらがなめがね…ウェブサイトをひらがなに直す

<http://tagengo.asia/tagengo/tagengo.html>

愛知県国際交流協会 多言語情報翻訳システム・・・多言語の連絡作成

<http://www.resource-room.aichi-edu.ac.jp/>

愛知教育大学 外国人児童生徒支援リソースルーム

http://www.resource-room.aichi-edu.ac.jp/kyozai_sonota.html

同上発行資料・教材へのリンクページ この中には…

1. みんなで奏でよう「ことばのトライアングル」－日英ポ対照学習帳－
2. ちょっと見てみりん！「でら役立つ私たちのアイデア」－外国人児童生徒支援ボランティア
学生の活動報告集－
3. にほんにすむブラジルのこどもたちへ プロジェクト
4. トウド・ベン？げんき？あたらしい友だち 異文化理解ハンドブック－日本・ブラジル－
5. ニーハオマ？げんき？あたらしい友だち 異文化理解ハンドブック－日本・中国－
6. 幼保ガイドブック－ポルトガル・スペイン・中国・タガログ・英語－
7. 小学校ガイドブック－ポルトガル・スペイン・中国・タガログ・英語－

<http://www.zenshihoren.or.jp/ibunka/>

全国私立保育園連盟 あおむし通信「保育園での異文化体験エピソード紹介」

付記

調査研究実行委員会の組織 代表 岡上 直子

○調査研究実行委員会

(五十音順)

実行委員長	荒木 尚子	帝京平成大学教授
委員	足立 祐子	台東区立大正幼稚園園長
委員	新山 裕之	港区立高輪幼稚園園長
委員	岩城眞佐子	中央区立月島幼稚園園長
委員	内田 千春	共栄大学教授
委員	岡上 直子	十文字学園女子大学教授
委員	黒澤 聡子	特別区人事・厚生事務組合教育委員会事務局主任主事
委員	小山 容子	本協会事務局員
委員	田澤 里喜	(学)田澤学園東一の江幼稚園園長、玉川大学准教授
委員	中井清津子	相愛大学教授
委員	中村 和穂	本協会事務局長
委員	中村香津美	(学)竹早学園竹早教員保育士養成所専任教員
委員	林 友子	帝京科学大学教授
委員	東川 則子	聖徳短期大学准教授
委員	宮本 友弘	国立大学法人東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授
委員	山田有希子	東京学芸大学附属幼稚園副園長

○ワーキンググループ(本会調査研究部)

統括	荒木 尚子	前掲
部長	黒澤 聡子	前掲
副部長	岩城眞佐子	前掲
副部長	林 友子	前掲
部員	足立 祐子	前掲
部員	新山 裕之	前掲
部員	小山 容子	前掲
部員	東川 則子	前掲
部員	中村香津美	前掲

○研究協力園

伊勢崎市立殖蓮幼稚園
新宿区立西戸山幼稚園
墨田区立緑幼稚園
港区立高輪幼稚園
台東区立竹町幼稚園
学校法人宗祐寺学園田名幼稚園
豊田市立トヨタこども園
彦根市立高宮幼稚園
大阪市立銅座幼稚園
西南女子学院短期大学部附属シオン山幼稚園

